

仙台市文化財調査報告書第77集

# 山田上ノ台遺跡

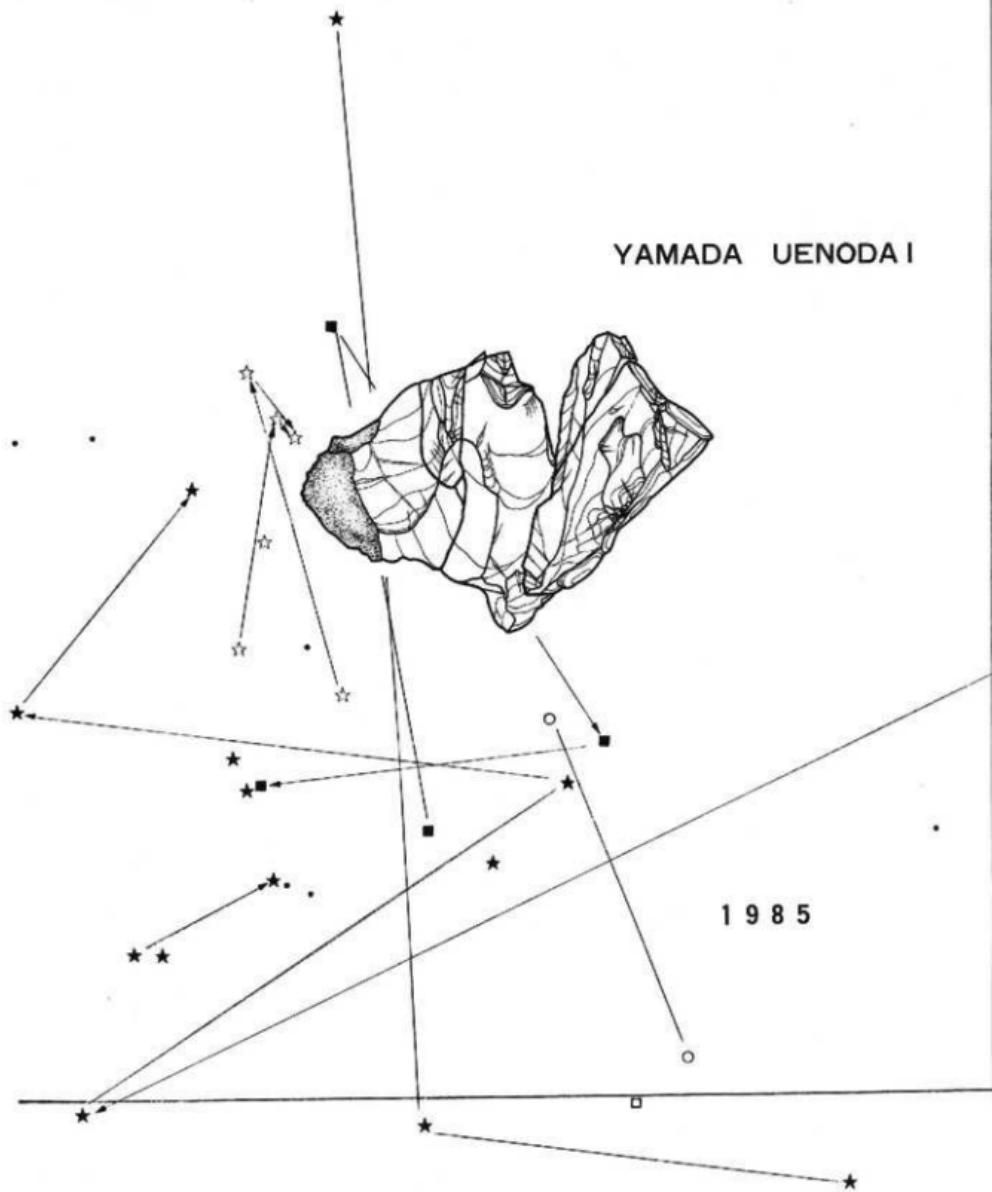
——昭和59年度発掘調査報告書——

1985年3月

仙台市教育委員会

YAMADA UENODAI

1985



## 序 文

昭和54年試掘調査、昭和55年本調査を実施したこの山田上ノ台遺跡は、名取川岸の古い河岸段丘の平坦地に営まれていた遺跡です。縄文時代中期末葉の堅穴住居跡38軒が2つのブロックを形成してムラの様相を呈しながら発見され、それに関連した貯蔵穴群多数と狩猟用おとし穴なども一緒に検証され、この当時の生活を知る貴重な資料が数多く認められた遺跡として各紙に報道され注目をあつめた遺跡でした。とりわけ、住居跡が掘り込まれた台地は厚い火山灰に覆われていて、その堆積火山灰の中にはメルクマールとなった「川崎スコリア層」と呼ばれる藏王起源の火山灰がバンド状に認められ、この火山灰層の年代は<sup>14</sup>Cの測定により約30,000年前後に降下したものであると検証されており、その上、下層中9枚の文化層も検証されて、旧石器人の生活を知る石器群の存在も確認されました。なかでもスコリア層下部は明らかに30,000年を超える火山灰層であり、チョッピングトゥール、橢円形石器などの検出もあって長年にわたる日本列島の前期旧石器時代存否論争に終止符を打つこととなった重要な遺跡ともなったのです。これが機運となって県内座敷乱木・中峠C・馬場塙A等各遺跡の発見にも継承される結果となつたのです。

今回の第2次調査は、上ノ台遺跡の成果を昭和61年開館を控えた新博物館展示に関する資料採集のための発掘調査です。この報告はその成果についてまとめたもので、この上ノ台遺跡を考える上で重要な成果と考えます。上ノ台遺跡の保存活用策を検討中でありますが、今後とも文化財行政に対する深いご理解とご支援を御願い申し上げ序といたします。

昭和60年3月

仙台市教育委員会

教育長 藤井 黎

## 例　　言

1. 本書は、昭和61年に新館開館が予定されている仙台市博物館の展示内容の充実を目的とした、仙台市山田上ノ台町地内に所在する山田上ノ台遺跡の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は、仙台市教育委員会が主体となり、昭和59年4月16日から8月27日まで実施した。
3. 出土遺物の整理と報告書作成は菅原和夫、及川 格が担当し、報告書の編集は及川 格が行なった。
4. 本文の執筆は、菅原和夫が第Ⅰ章2を、及川 格が第Ⅱ章・第Ⅲ章・第Ⅴ章・第Ⅵ章を担当し、本文目次にも示した。また、下記の方々より玉稿を賜わった（敬称略）。

○遺跡の位置と地形 豊島正幸（東北大学理学部地理学教室）  
○山田上ノ台遺跡および北前遺跡の火山灰 庄子貞雄・山田一郎（東北大学農学部）  
○花粉分析 竹内貞子（斎藤報恩会自然史博物館）

5. 報告書の作成は、埋蔵文化財整理室（仙台市福田町一丁目15番1号 高砂公民館内）で行ない、そのための整理作業は下記の通り分担した。

図面整理 及川 格、五十嵐康洋、佐藤永一

遺物実測 及川 格、五十嵐康洋、熊谷みゆき、木幡真喜子、佐藤永一、寺田仁子  
遺物トレース 寺田仁子

遺構トレース 菅原和夫、木幡真喜子、佐藤永一

遺物写真撮影 熊谷みゆき

フィルム現像・写真焼付 熊谷みゆき

図版組 菅原和夫、及川 格、五十嵐康洋、木幡真喜子、佐藤永一、寺田仁子

6. 発掘調査から遺物整理、報告書作成にいたる過程で、下記の方々、機関より御助言、御協力を賜わった。記して厚く感謝の意を表する（敬称略）。

須藤 隆・阿子島香（東北大学文学部）、庄子貞雄・山田一郎（東北大学農学部）、岡村道雄（東北歴史資料館）、豊島正幸（東北大学理学部地理学教室）、竹内貞子（斎藤報恩会自然史博物館）、板垣直俊（本荘市立本荘南中学校教諭）、梶原 洋・佐川正敏（東北大学埋蔵文化財調査班、文学部助手）、柳沢和明・山山晃弘・会田容弘・鈴木博子・藤田 淳・築瀬裕（東北大学文学部考古学研究室）、相沢浩二（国学院大学学生）、東北大学文学部考古学研究室、東北歴史資料館、東北大学埋蔵文化財調査班、石器文化談話会

特に岡村道雄氏には、発掘調査の際、現地まで赴いていただき、剥ぎ取り転写作業の御指

導を頂いた。

7. 石器の石質鑑定は佐々木隆氏（仙台市科学館）にお願いした。
8. 調査の諸記録、実測図、写真（モノクロ、スライド）及び出土遺物の全資料は仙台市教育委員会が一括保管している。

## 凡　　例

- ・本報告書で使用した国上地理院発行の地形図は、図名と縮尺を記載した。
- ・本報告書中の上層の色調の記載については、「新版 標準土色帖」（小山正忠・竹原秀雄 1973）によった。
- ・本報告書に掲載した遺物の番号については、実測図と写真図版の番号が一致するようにした。また、写真図版に番号を付していない遺物は、実測図を掲載していないものである。
- ・石器についての記載は、主要剝離面を裏面、その逆の面を表面として記述した。
- ・本報告書中の調査区に関する方位は、すべて磁北を北としている。

## 目 次

序 文

例 言

凡 例

目 次

### 第Ⅰ章 遺跡の概観

- |                  |                         |   |
|------------------|-------------------------|---|
| 1. 遺跡の位置と地形..... | 豊島正幸（東北大学理学部地理学教室）..... | 2 |
| 2. 歴史的環境.....    | 菅原.....                 | 5 |

### 第Ⅱ章 調査に至るまでの経緯

- |                            |         |    |
|----------------------------|---------|----|
| 1. 昭和55年までの調査に至る経緯と概要..... | 及川..... | 12 |
| 2. 今回の調査に至る経緯.....         | 及川..... | 12 |

### 第Ⅲ章 調査の方法と概要

- |                  |         |    |
|------------------|---------|----|
| 1. 調査要項.....     | 及川..... | 13 |
| 2. 調査の方法と概要..... | 及川..... | 13 |
| 3. 基本層序.....     | 及川..... | 14 |

### 第Ⅳ章 山田上ノ台遺跡および北前遺跡の火山灰　　庄子貞雄・山田一郎（東北大学農学部）

- |                             |    |
|-----------------------------|----|
| 1. はじめに.....                | 19 |
| 2. 宮城県南部の火山灰について.....       | 19 |
| 3. 山田上ノ台遺跡の火山灰.....         | 21 |
| 4. 北前遺跡の火山灰.....            | 23 |
| 5. 山田上ノ台遺跡と北前遺跡の火山灰の比較..... | 23 |

### 第Ⅴ章 検出遺構と出土遺物

- |              |         |    |
|--------------|---------|----|
| 1. 検出遺構..... | 及川..... | 25 |
| 2. 出土遺物..... | 及川..... | 26 |

### 第Ⅵ章 花粉分析

竹内貞子（斎藤報恩会自然史博物館）

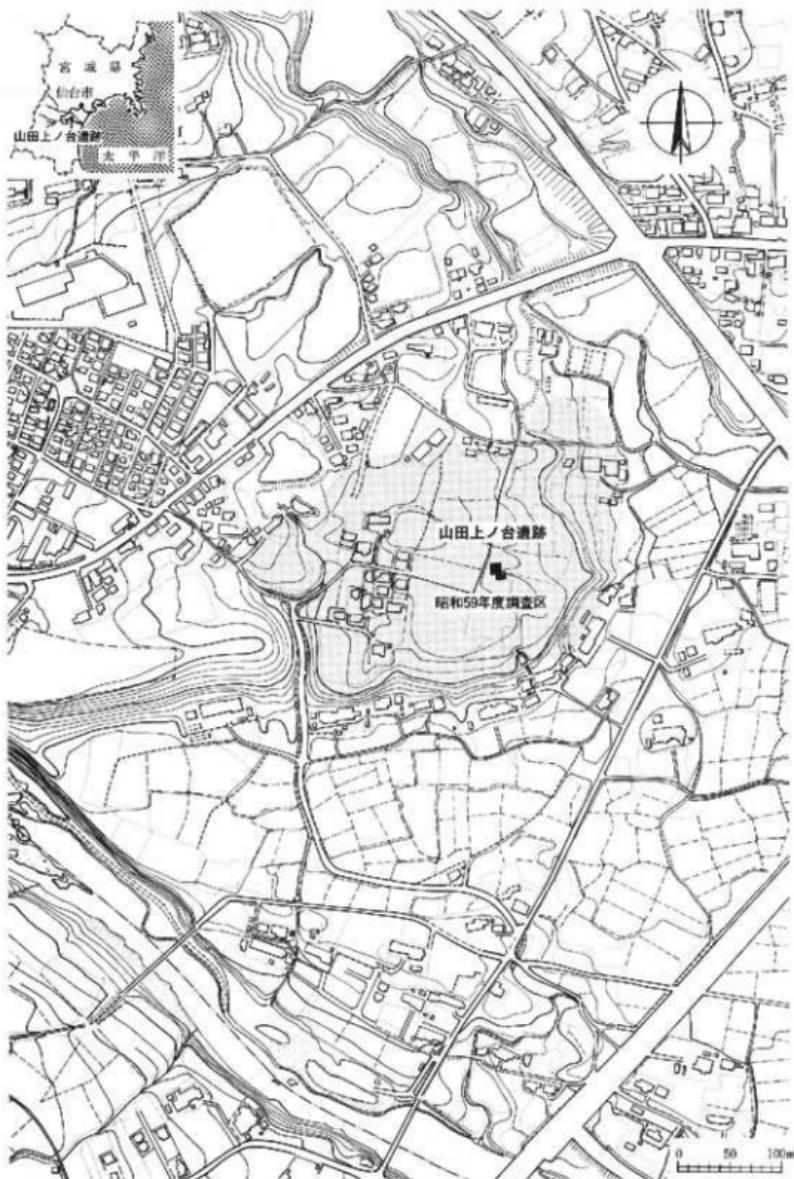
- |                       |    |
|-----------------------|----|
| 1. 試料採取.....          | 55 |
| 2. 分析方法.....          | 55 |
| 3. 花粉分析の結果.....       | 55 |
| 4. 段丘構成層堆積時の自然環境..... | 57 |
| 5. 碾層および粘土層の堆積時代..... | 58 |

### 第Ⅷ章 まとめ

及川.....65

### 写真図版

67



第1図 遺跡周辺地形図

## 第Ⅰ章 遺跡の概観

### 1. 遺跡の位置と地形

豊島正幸

(東北大学理学部地理学教室研究生)

仙台西南部の、広瀬川と名取川にはさまれた一帯は、標高250m～200mの丘陵地帯であり、荒川をはじめとする諸支流がこの丘陵地帯から南東方向にほぼ平行に流下し、谷を刻んでいる(第2図)。山田上ノ台遺跡は、この丘陵地帯の南東麓に位置する。

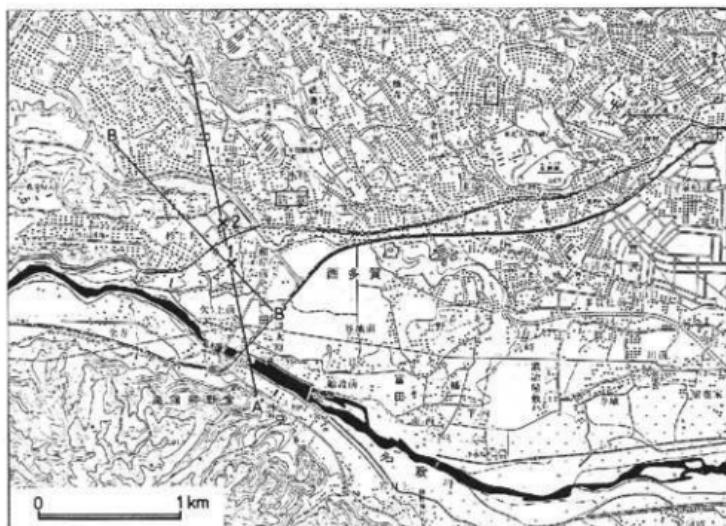
遺跡周囲の土地は全体として平坦であり、その南端部は、名取川に向って急崖をなす。このように、河川に沿う平坦面(段丘面)と急崖(段丘崖)の組み合わせからなる地形は、河岸段丘と呼ばれる。

この地形の特徴は、名取川に対して横断方向にきった地形の断面図によく表われる。第3図は、2,500分の1の地形図に基づいて作成した断面図である。断面の位置は第2図に示すとおりである。A-A'断面をみると、山田上ノ台遺跡が位置する標高55m付近と、標高30m付近に平坦面(段丘面)が見いだされ、それぞれ、河側に急崖(段丘崖)を作っている。すなわち、この付近には、名取川に沿って二段の河岸段丘が見いだされる。

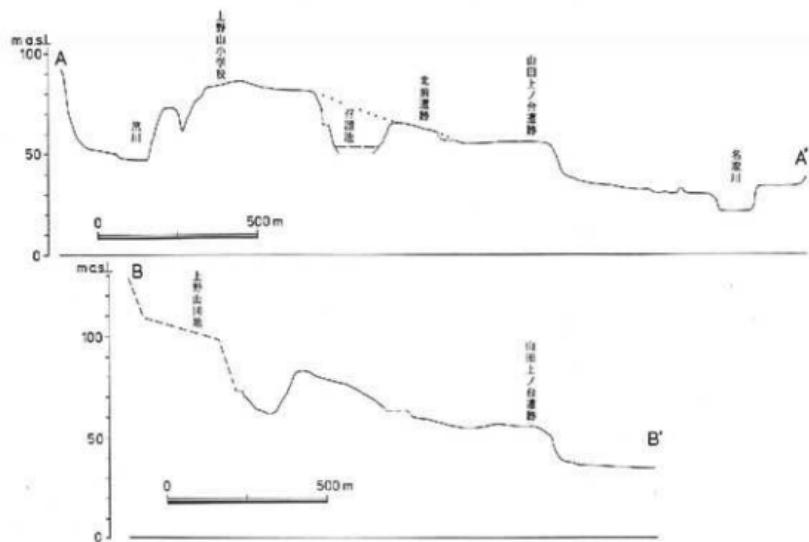
さらに、同断面図によれば、山田上ノ台遺跡、北前遺跡、および、上野山小学校の位置する平坦面は、最大30mの高度差をもつもの、支流によって開析(侵蝕)された部分を復元すると、それらは、連続する断面形を示す。山田上ノ台遺跡を通る北西-南東方向の断面(B-B'断面)においても、遺跡から丘陵に向って高度が増すが、少なくとも標高82m付近の地点までの間に、段丘崖とみられる急崖は存在しない。すなわち、山田上ノ台遺跡と北前遺跡は、地形的に連続する段丘面上に位置する。

これとほぼ同時期に形成された段丘面は、山田上ノ台より東方の鈎取や東原、さらに西ノ平まで見いだせる(中川ほか 1961、中田ほか 1976)。この段丘面は、荒川等の諸支流によって開析(侵蝕)された結果、現在ではいくつかに分断されている。なお、三神峯やその北東方の電気通信学園付近にみられる平坦面は、西ノ平付近で、上記の段丘面より20m前後高いが、これは、この部分が長町一利府線と呼ばれる構造線に沿う隆起帶(幅1km弱、長さ約10km)の一部にあたり、上記の段丘面が断層を作って変形したものと考えられている(中田ほか 1976)。

河岸段丘面は、かつての氾濫原(しばしば洪水時に浸水を受ける部分)が、種々の原因による河床の低下によって、洪水時の浸水を受けなくなった(受けにくくなった)地形面である。この状態になった時、氾濫原は段丘化したと呼ばれ、この時期以降、その土地はヒトの居住の場となり得る。



第2図 山田上ノ台遺跡の位置と断面図(A-A'、B-B')の位置  
1は山田上ノ台遺跡 2は北前遺跡



第3図 地形の断面図2,500分の1地形図から作成 A-A'、B-B'の位置は第2図に示す  
破線は人工地形、点線は復元した断面形

山田上ノ台遺跡の位置する段丘面がいつ段丘化したのかについては、まだ確定されていないが、現在の段階で次のことがわかっている。

この段丘面上には、2万数千年前と3万数千年前の間のある時期に降下堆積した川崎スコリア層（板垣ほか 1981）が見いだされることから、この段丘面は、約3万年前ごろにはすでに段丘化していたと判断される。

さらに、山田上ノ台周辺の羽黒台や三神峯付近には、降下時期が川崎スコリア層より古い愛島軽石層が、約130cmの厚さで堆積しているが（板垣 1985）、山田上ノ台遺跡の地点では見いだされない。このことは、山田上ノ台遺跡が位置する段丘面の段丘化の時期が、愛島軽石層の降下時期より新しいことを示す。（なお、この段丘面の丘陵に近いところでは、一部に、愛島軽石層が見いだされるので、段丘化の時期は段丘面の横断方向でずれており、丘陵に近い部分で段丘化がより早かった可能性が強い。）

以上をまとめると、山田上ノ台遺跡の地点は、今から約3万年前の時期に、すでにヒトが居住し得る状態であった。今後、愛島軽石層の絶対年代や段丘の構造が判明すれば、この地点の段丘化の時期をはじめとするこの地域一帯の地形発達史を、より詳細に編むことができよう。

## 文 献

- 板垣真俊・豊島正幸・寺戸道夫（1981）：仙台およびその周辺地域に分布する洪積世末期のスコリア層、東北地理、33巻1号、P.P.48~53。
- 板垣真俊（1985）：仙台およびその周辺地域に分布する愛島軽石層（演習）、東北地理、37巻1号、P.P.79~80。
- 中川久夫・相馬寛吉・石田琢二・竹内貞子（1961）：仙台付近の第四系および地形図、第四紀研究、2巻1号、P.P.30~39。
- 中田 高・大槻憲四郎・今泉俊文（1976）：仙台平野西縁・長町一帯府綫に沿う新期地殻変動、東北地理、28巻2号、P.P.111~120。

## 2. 歴史的環境

山田上ノ台遺跡が立地する名取川流域には、古くから多くの遺跡が存在することが知られている。更に最近の各種の開発に伴なって新しく発見された遺跡も多く、現在ではかなりの数にのぼっている。ここでは最近の調査事例も混じながら、本遺跡周辺の遺跡を時代別に概観することによって、本遺跡の歴史的環境について述べることとする。

### 旧石器時代

名取川流域の旧石器時代の遺跡としては、仙台市内では本遺跡の他に2ヶ所の遺跡が知られている。その一つは北前遺跡である。北前遺跡は本遺跡より北へ約200mの同一段丘上に立地しており、昭和56年の調査によって、前期旧石器時代、後期旧石器時代の石器が出土している。もう一つは青葉山段丘上に立地する青葉山B遺跡である。青葉山B遺跡はこれまで後期旧石器時代の遺跡として知られてきたが、昭和59年の東北大学埋蔵文化財調査班の調査によって「愛島軽石層」より下位からも石器が出土することが確認され、前期旧石器時代の人々の生活痕跡も残されていることが明らかとなった。

以上のように旧石器時代の遺跡は、本遺跡も含め丘陵あるいは段丘上に立地していることがわかる。

近年、宮城県内では相次いで旧石器時代の遺跡の調査が行なわれ、着々と成果を上げている。昭和59年度に限っても本遺跡の他、先述した青葉山B遺跡、泉市長崎遺跡、古川市馬場壇A遺跡等が調査されており、更に一昨年調査された中峰遺跡の最下層の石器群は、熱ルミネッセンス法による年代測定の結果、十数万年以前まで遡ることが明らかとなっている。これらの調査を通して、次第に日本の歴史の初端が解明されつつある。

### 縄文時代

早期　早期の遺跡としては、三神峯遺跡、萩ヶ丘遺跡、北前遺跡等が知られ、それらの遺跡からは条痕文系土器が出土している。中でも北前遺跡からは8軒の竪穴住居跡が検出されている。また沖積平野部では、名取川と広瀬川とに挟まれた、自然堤防から後背湿地にかけて立地している山口遺跡、下ノ内浦遺跡から、最近の調査によって早期の土器が出土している。特に下ノ内浦遺跡からは早期前縄の押型文土器が出土しており、仙台市内では最も古い土器の発見である。

以上のことから、丘陵や段丘上に立地する遺跡が多いことは旧石器時代と同様であるが、早期になると沖積平野部への進出のきざしが認められる。

本遺跡からは、昭和55年の調査（以下、前回の調査とよぶ）の際、条痕文系土器の他に沈線文土器、貝殻腹縁文土器もわずかに出土している。

前期　早期に較べると遺跡数が増加する傾向がみられる。また、名取市今熊野遺跡のように

集落跡が大規模化するのもこの時期の傾向である。集落跡としては三神峯遺跡が知られ、北前遺跡からは前期末の土壙群が検出されている。

この時期の遺跡は段丘もしくは丘陵上に立地しており、現在までのところ沖積平野部ではほとんど確認されていない。わずかに下ノ内浦遺跡から、昨年の調査の際に前期後半の土器片が出土しているのみである。

本遺跡では、前回の調査の際、上器片が若干出土している。

**中期** 中期になると遺跡数は更に増加し、集落跡が沖積平野部までも進出してくる。段丘もしくは丘陵上の遺跡として上野遺跡、人来山遺跡等があげられ、また沖積平野部の遺跡としては六反田遺跡、下ノ内遺跡等があげられる。沖積平野部の遺跡はすべて自然堤防上に立地している。

このように、中期には居住の空間がかなり拡大しているようである。

本遺跡はこの時期の大集落跡であり、前回の調査で確認された住居跡だけでも20軒をこえ、また土塁は200基以上も検出されている。

**後期** 後期の遺跡は中期の遺跡と重複して立地する場合が多い。先述の六反田遺跡からは集落跡が確認されており、それに隣接する伊古田遺跡では良好な遺物包含層が、下ノ内浦遺跡では遺物包含層の他、配石遺構群、上壙群が確認されている。この3遺跡はすべて沖積平野の自然堤防上に立地するものである。

後期の特徴としては、段丘もしくは丘陵上と沖積平野の自然堤防上の両者で生活が営まれていたが、沖積平野部へより積極的な働きかけが行なわれたといえる。

本遺跡からは、前回の調査の際、少量の上器片が出土している。

**晩期** 晩期になると周知の遺跡数はかなり減少していく。遺構が確認されている遺跡は、現在までのところほとんどなく、山口遺跡でこの時代の河川跡が検出されているのみである。六反田遺跡や茂庭の梨野A遺跡等では小規模な包含層が確認されている。

本遺跡では、禪文時代晩期から奈良時代に至る遺構、遺物はほとんど確認されていない。

#### 弥生時代

この時代になるとほとんどの遺跡は沖積平野部に立地するようになる。稻作が開始されるため、それに適した沖積平野部が主な生活空間となつたのであろう。

主な遺跡として南小泉遺跡、西台畠遺跡、藤山新田遺跡、船渡前遺跡等が知られている。また、最近の調査によってこの時代の水田跡が検出されている。東北地方の弥生時代の水田跡としては、これまで青森県垂柳遺跡が知られているだけであったが、昭和58年に富沢水田遺跡鳥居原・中谷地地区、泉崎前地区でも水田跡が検出され、東北地方では2番目の発見例となった。富沢水田遺跡は、主に名取川と広瀬川によって形成された後背湿地に立地している。近隣に

この水田跡を営んだ人々の集落跡の存在が予想されるが、現在までのところまだ確認されていない。しかし、隣接する下ノ内浦遺跡では大規模な包含層が確認され、更に整穴造構と石庵丁2点、太梨蛤刃石斧1点が底面から出土した土壙が確認されている。

#### 古墳時代

古墳時代になると更に沖積平野部への進出が認められ、小規模な浜堤や自然堤防までも進出してくる。古墳についてみると名取市雷神山古墳、仙台市遠見塚古墳等非常に大規模な古墳が築造されているので、その背景に富の集積と人的資源の調達を可能にしたある程度の支配力を有する人々の存在を想定できる。集落跡としては南小泉遺跡、下ノ内浦遺跡、栗遺跡等が知られている。また、名取川と広瀬川との合流点から北西約1kmの地点には多賀城以前に造営された官街跡の郡山遺跡がある。昭和59年度の調査で5ヵ年計画が完了するが、これまで材木列と大溝で囲まれた方四町の官街城（Ⅱ期官街）と推定方二町の寺院城、Ⅱ期官街以前の官街跡（Ⅰ期官街）の確認等多大の成果を上げている。第2次の5ヵ年計画にも大きな期待が寄せられる。

最近の成果では戸ノ内遺跡で方形周溝墓が確認されている。これは安久東遺跡に次いで仙台市内で2例目の発見となった。

#### 奈良時代

仙台平野北端部の丘陵に国府多賀城が造営され、中央の支配が明らかとなるこの時代、仙台市内では陸奥国分寺、同國分尼寺が創建される。集落跡は主に沖積平野に立地し、六反田遺跡、山口遺跡、下ノ内浦遺跡等があげられる。また仙台市の北部丘陵地帯では多くの麻跡が確認されている。

#### 平安時代

平安時代の遺跡の立地は奈良時代とほぼ同様で、しかもそのほとんどが奈良時代の遺跡と重複している。従って奈良時代以降、一定の土地への完全な定着が進んだものと思われる。

生産遺跡としては茂庭の嶺山C遺跡で製鉄遺構が確認されている。また山口遺跡、富沢水田遺跡では水田跡が検出されている。山口遺跡の水田跡は、真北線を基準とした大畦とこれにほぼ直角に取り付く小畦が確認され、一筆の面積が確認されたものまでもある。

#### 中世

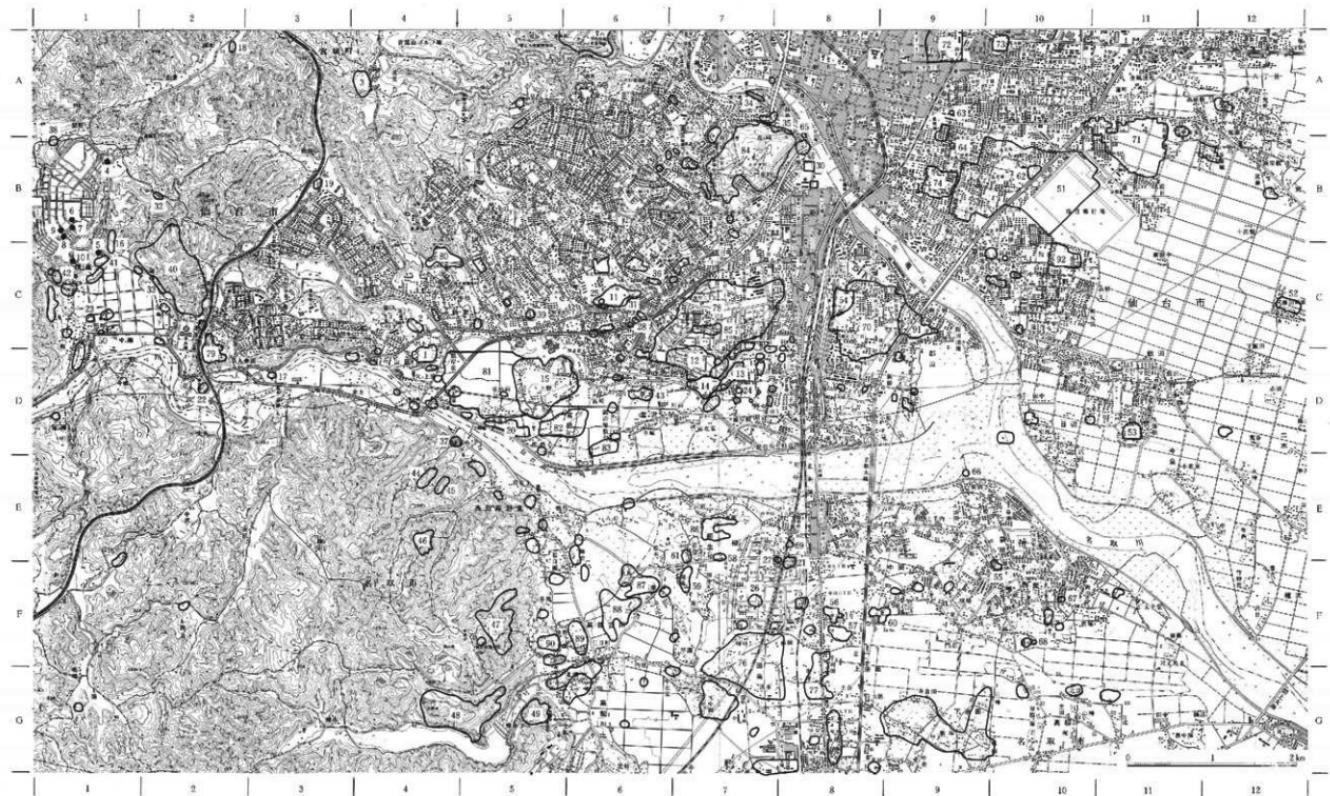
中世になると館跡が丘陵や沖積平野部に築かれるようになる。七北田川流域の高森城を中心とする一方で、茂庭の丘陵地帯や高館丘陵付近にも集中して確認されている。また、沖積平野部では安久東遺跡で館跡の一部と思われる遺構が確認されている。しかし、一般的の集落跡の調査例は非常に少なく、清水遺跡で井戸跡が検出されているのみである。またこれらの遺跡の周辺には中世の古碑群が数多く点在している。生産関係では最近、山口遺跡、富沢水田遺跡中谷

地地区、後河原遺跡で水田跡が確認されているが、わずかこの3例にすぎず、一般の集落跡とともに今後の調査例の増加が待たれるところである。

以上、かなり大まかにではあったが名取川流域に残された人々の生活活動の痕跡をたどってみた。それを要約すると、人間の生活の場は丘陵地帯から平野部へと移ってきてていることがわかる。しかし、平野部への進出はこれまで考えられてきたよりも相当古い時期（縄文時代早期前葉）までも遡るようである。また、平野部の利用は縄文時代中期以降には確実に行なわれているが、それは自然堤防上に限られていたようである。ところが弥生時代になると都作の導入によって後背湿地部分までも平野部の利用が拡大してくる。以上のことから平野部が最大限に活用されたのは弥生時代以降であるといえる。

## 文献

- 岩淵廣治・佐藤則之（1980）：「三神峠遺跡発掘調査報告書」 仙台市文化財調査報告書 第25集  
木村浩二・青沼一民・他（1981）：「郡山遺跡」 仙台市文化財調査報告書 第29集  
渡部弘美・主浜光朗・柳沢みどり（1981）：「山田上ノ台遺跡」 仙台市文化財調査報告書 第30集  
佐藤 淳・吉岡泰平（1981）：「山口遺跡発掘調査報告書」 仙台市文化財調査報告書 第33集  
出中利和（1981）：「六反田遺跡発掘調査報告書」 仙台市文化財調査報告書 第34集  
佐藤 洋・森野裕彦（1982）：「北前進跡発掘調査報告書」 仙台市文化財調査報告書 第36集  
木村浩二・青沼一民・他（1982）：「郡山遺跡Ⅱ」 仙台市文化財調査報告書 第38集  
篠原信彦・吉岡泰平・他（1982）：「仙台市高速鉄道関係遺跡調査概報Ⅰ」 仙台市文化財調査報告書 第40集  
佐藤利和・森野裕彦（1983）：「茂庭」 仙台市文化財調査報告書 第43集  
木村浩二・金森安孝・他（1983）：「郡山遺跡Ⅲ」 仙台市文化財調査報告書 第46集  
篠原信彦・吉岡泰平・他（1983）：「仙台市高速鉄道関係遺跡調査概報Ⅱ」 仙台市文化財調査報告書 第56集  
青森県教育委員会（1983）：「垂柳遺跡発掘調査概報」 青森県歴史文化財調査報告書 第78集  
川中利和・主浜光朗（1984）：「山口遺跡Ⅳ」 仙台市文化財調査報告書 第61集  
木村浩二・長島栄一・他（1984）：「郡山遺跡Ⅴ」 仙台市文化財調査報告書 第64集  
江藤哲司・渡辺 誠（1984）：「富沢水田遺跡第一番・二番・三番前地区」 仙台市文化財調査報告書 第67集  
篠原信彦・吉岡泰平・他（1984）：「仙台市高速鉄道関係遺跡調査概報Ⅲ」 仙台市文化財調査報告書 第69集  
佐藤利二・青沼一民（1984）：「後河原遺跡」 仙台市文化財調査報告書 第71集  
石器文化講話会・吉川ロータリークラブ（1984）：「吉川市馬場塚A遺跡発掘調査現地説明会資料」  
泉市教育委員会（1984）：「泉市長治遺跡現地説明会資料」  
東北大大学（1984）：「青葉山B遺跡現地説明会資料」  
仙台市教育委員会（1984）：「説明会資料、伊古田遺跡」  
東北歴史資料館・石器文化講話会・吉川市教育委員会（1984）：「馬場塚A遺跡Ⅰ、第2次発掘調査現地説明会資料」  
山川米太（1984）：「中峰山石器遺跡の丁し年代測定」 日本文化財科学会大会研究発表要旨



第4図 周辺の遺跡分布図（国土地理院1/25,000「松台西南部」「松台東南部」を複製）

第1表 遺跡地名表

No.	遺跡名	立地	年代	位置	%	遺跡名	立地	年代	位置
1	山東北ノ台跡	段丘	新石器中期-後半-鉄器	D4	57	東山遺跡	丘陵	中古	F5
2	北 墓 池 跡	段丘	新石器中期-後半-鉄器	C4	48	大城山遺跡	丘陵	中古	G4-G5
3	青 売 山 遺 蹤	丘陵斜面	新石器(後)	A4	49	青島山遺跡	丘陵	中古	G5
4	聖 級 A 遺 蹤	丘陵	新石器(後)-商-周-秦	B1	50	聖紀北水道跡	丘陵	-	C1
5	聖 級 A 遺 蹤	丘陵	新石器(後)-商-周	C1	51	南小河遺跡	自然凹陷	聖紀-占領-泰良-平安-中古	B9-B11
6	聖 級 B 遺 蹤	丘陵	新石器(後)-商	B1	52	聖紀新田遺跡	丘陵	聖紀	C12
7	源原 C 遺 蹤	丘陵	新石器(後)	B1	53	南原遺跡	自然凹陷	聖紀-古墳-平安-延暦	D11
8	源 D A 遺 蹤	丘陵	新石器(後)-平安	B1	54	西谷遺跡	自然凹陷	聖紀-古墳	C8
9	源 E B 遺 蹤	丘陵	新石器(後)-商	B1	55	中瀬相中清跡	自然凹陷	泰良-平安	F10
10	源 F C 遺 蹤	丘陵	新石器(後)-平安	C1	56	中田北遺跡	自然凹陷	泰良-平安	F5
11	三 神 遺 蹤	丘陵	新石器(後)	C6	57	日吉遺跡	自然凹陷	泰良-平安	F5
12	山 D 遺 蹤	自然凹陷	新石器(後)-中期	D7	58	雷山遺跡	自然凹陷	平安	E7
13	六 反 山 遺 蹤	自然凹陷	新石器(後)-平安	D7	59	区山遺跡	自然凹陷	泰良-平安	F7
14	下 E 内 遺 蹤	自然凹陷	新石器(後)-平安	D7	60	佐河原遺跡	自然凹陷	泰良-平安	F8-F9
15	下 F 外 遺 蹤	丘陵	新石器(後)-平安	D5-D6	61	空道跡	自然凹陷	平安	E7
16	年 墓 遺 蹤	丘陵	新石器-古墳-平安	B1-C1	62	東原遺跡	自然凹陷	古墳(中期)	B10
17	八 木 田 C 遺 蹤	丘陵	新石器-古墳-平安	D3	63	桃原遺跡	自然凹陷	古墳(後期)	A9
18	溝 木 本 遺 蹤	丘陵	新石器	A2	64	樺原遺跡	自然凹陷	古墳	B9
19	聖 保 山 A 遺 蹤	丘陵	新石器	B3	65	京神寺塚六號	自然凹陷	古墳-空堀	B8
20	都 滝 遺 蹤	段丘	新石器-平安	D5	66	佐谷大塚古墳	自然凹陷	古墳	E9
21	久 久 久 遺 蹤	自然凹陷	新石器-中期	F5	67	丸古塚	古墳	古墳	F10
22	久 木 田 B 遺 蹤	台地	古墳-平安	D2	68	久木田塚	自然凹陷	古墳	F10
23	阿 里 田 遺 蹤	台地	古墳-平安	C1	69	伊豆野原御塚	自然凹陷	古墳	E8
24	大 岩 口 古 墳	自然凹陷	古墳	D2	70	郡山遺跡	自然凹陷	古墳-空堀	E8
25	元 座 古 墳	丘陵	古墳	C6	71	新石器時代余跡	自然凹陷	余跡	A11-A12
26	美 武 遺 蹤	自然凹陷	古墳	F7	72	施基國分寺跡	自然凹陷	泰良	A9
27	美 久 遺 蹤	自然凹陷	古墳	F8	73	治田無分寺今寺跡	自然凹陷	泰良	A10
28	高 町 木 沼 遺 蹤	丘陵	古墳	C6	74	岸井塚	自然凹陷	山體-江戸	B9
29	教 振 吉 清 遺 蹤	自然凹陷	古墳	C6-C7	75	前田塚	自然凹陷	中後	F8
30	北 宇 内 墓 遺 蹤	段丘	古墳	B8	76	木造跡	自然凹陷	泰良-千歲	E7-E8
31	高 沢 金 山 古 墓 遺 蹤	段丘	古墳-平安	C6	77	上木田遺跡	自然凹陷	泰良-平安	F8-G8
32	智 野 横 六 墓 遺 蹤	丘陵斜面	古墳-泰良	B2	78	高木村遺跡	自然凹陷	泰良-平安	C7-E8
33	向 横 六 墓 遺 蹤	丘陵斜面	古墳-泰良	C3	79	元田町遺跡	自然凹陷	傳文(中期)	C2-D3
34	重 岩 古 横 六 墓 遺 蹤	丘陵斜面	古墳-泰良	A7-A8	80	重岩平遺跡	自然凹陷	傳文-平安-中世	C4
35	大 年 桜 横 六 墓 遺 蹤	丘陵斜面	古墳-泰良	B8	81	山田墨田遺跡	冲積平野	泰良-平安	D4-E5
36	上 田 内 横 六 墓 遺 蹤	丘陵斜面	古墳-泰良	C6	82	上田東遺跡	冲積地	泰良-平安(中期)	D5-E6
37	知 野 並 横 六 墓 遺 蹤	丘陵斜面	古墳-泰良	D4-E5	83	六重松遺跡	自然凹陷	泰良-平安	D6
38	左 井 B 遺 蹤	丘陵斜面	泰良-平安	B1	84	左井溝塚	古墳(後期)	傳文-古墳-平安	E7-E8
39	九 勝 西 遺 蹤	段丘	平安	C5	85	貝崎遺跡	沖積平野	傳文-古墳-平安-延暦	C7
40	荒 原 東 遺 蹤	丘陵	中後	B2-C2	86	柳生古墳群跡	自然凹陷	古墳-泰良-平安	E7
41	荒 原 東 遺 蹤	丘陵	中後	C1	87	東馬遺跡	自然凹陷	泰良-平安	F6
42	荒 原 西 遺 蹤	丘陵	中後	C1	88	大原古墳	河川敷	古墳	F6
43	高 沢 舞 遺 蹤	自然凹陷	古墳	D6	89	高澤舞遺跡	冲積平原	傳文-泰良-平安	F6
44	黑 海 舞 遺 蹤	丘陵	中後	F4	90	上木田遺跡	古墳	傳文-泰良-平安	E5
45	小 沢 舞 遺 蹤	丘陵	中後	B4	91	若吉城跡	自然凹陷	空堀-江戸	C9
46	密 野 金 大 遺 蹤	丘陵	中後	E4	92	津野城跡	自然凹陷	中後	C10

## 第Ⅱ章 調査に至るまでの経緯

### 1. 昭和55年までの調査に至る経緯と概要

山田上ノ台遺跡が最初に調査されたのは、昭和54年である。本遺跡の所在する仙台市西部の山田地区は、当時、すでに急速な宅地化が進んでおり、昭和54年には、本遺跡内においても、本間物産株式会社による宅地造成計画が立案された。

仙台市教育委員会は、提出された開発行為事前協議書にもとづいて開発者と協議を行ない、その結果、試掘調査を実施することとなった。試掘調査は年度内に行なわれ、绳文時代から平安時代にかけての遺構・遺物が良好に保存されていることが確認された。この試掘調査成果をもとに、再度の協議を行なった結果、記録保存を前提とした事前調査が実施されることとなつた。発掘調査は、翌昭和55年4月10日より56年1月13日まで行なわれた。

発掘調査の結果、绳文時代早期・前期・中期・後期、平安時代、近世の遺構・遺物が数多く確認され、更に調査の後半には、前期旧石器時代から後期旧石器時代までの文化層が9枚確認された。当市は、これらの事実から、本遺跡が前期旧石器時代から近世に至るまでの人の生活痕跡が良好に残されている遺跡であるという重要性を認識し、遺跡の保存をはかるために、開発予定地の買収を行なった。今後は、広く社会教育に資することを目的とした原始古代村構想の一環として活用する予定である。

### 2. 今回の調査に至る経緯

仙台市博物館は、昭和61年3月に新館の開館が予定されており、現在、仙台市三の丸において建築工事が進められている。新館開館にあたっては、展示内容の充実が計画されている。その一つとして通史部門の設置があげられ、そのうちの旧石器時代の展示としては、昭和55年度に行なわれた山田上ノ台遺跡の調査の成果を中心として、昭和56年度の北前遺跡の調査成果も加えた展示が予定されている。

しかし、これまでの調査結果からは、両遺跡とともに、旧石器時代の石器群の平面的なまとまりが明瞭には捉えられておらず、また、両者の（特に前期旧石器時代の石器群）時期的な先后関係についても明らかにはなっていない。

今回の調査は、仙台市博物館の通史部門の展示内容の充実をはかるとともに、これらの課題を解決することを目的として行なわれたものである。展示内容の充実のための具体的な作業としては、遺跡の層序断面及び石器出土面の剥ぎ取り転写作業を行なった。

### 第Ⅲ章 調査の方法と概要

#### 1. 調査要項

遺跡名称 山田上ノ台遺跡（仙台市文化財登録番号 C-193）

所在地 仙台市山田上ノ台町地内

調査主体 仙台市教育委員会

調査担当 仙台市教育委員会社会教育課文化財調査係

教諭 菅原 和夫

主事 及川 格

剥ぎ取り転写作業を実施するにあたっては、主事 木村浩二、教諭 松本清一の協力を得た。

調査期間 昭和59年4月16日～8月27日

調査面積 125m<sup>2</sup>

調査参加者 柳沢和明、山田晃弘、相沢浩二、五十嵐康洋、岩見和泰、大友 透、木幡真喜子、佐藤永一、中野裕平、原 充広、阿達成子、阿部とめよ、阿部とよ子、大里ちよし、小原ミツヨ、菅井マツ子、高橋秀子、沼田和子、沼田すいの、沼田すい子、鈴木博子、藤田 淳、篠瀬裕一

#### 2. 調査の方法と概要

今回の調査は、仙台市博物館の展示内容の充実をはかることと、前述の課題の解明を目的としていたので、昭和55年の調査（以下、前回の調査とする）の際に、前期旧石器時代の石器が出土したグリッドの付近に調査区を設定することとした。調査は、昭和59年4月16日から開始した。

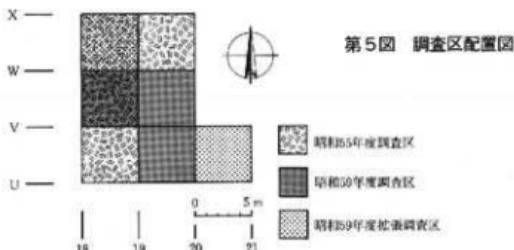
調査区の設定は、前回の調査と同様に5m×5mのグリッドとし、前回の設定にならうこととした。しかし、当時の基準杭はすでに原位置を保っていなかったため、初めに、前回の調査で前期旧石器時代の石器が出土したW-19区付近の地点に埋め戻し土除去地Xを設定した。埋め戻し土を除去した結果、W-19区を確認することができ、また、グリッドポイントも確認できたので、それをもとにグリッド設定を行なった。従って、グリッドは前回と同様に、磁北を基準としている。

発掘調査は、前回の調査で前期旧石器時代の石器が出土した2グリッド（U-18区、W-19区）の間の3グリッドをまず対象区とした。その3グリッドの調査は順調に進み、7月中旬には段丘疊層近くまで到達することができた。しかし、調査成果が不充分だったので、新たに2グリッド（U-20区、W-18区）を設定し、調査区を拡張した。

調査の方法は、W-19区の埋め戻し土をすべて除去した後、その南壁と西壁によって層序の検討を行ない、その検討にもとづいて層位毎の精査を進めていった。埋め戻し土の除去にはスコップを用い、それ以外は鋭利な刃のついた草搔きを主に使用し、数ミリメートルずつ慎重に掘り下げていった。ただし、拡張区（U-20区、W-18区）の埋め戻し土の除去には、すでに埋め戻し土除去地区により埋め戻し土の厚さを把握していたので、重機を使用した。

調査中に、博物館展示のために、石器出土面及び層序断面の剥ぎ取り転写作業を行なった（写真16・17）。

すべての作業が終了したのは、昭和59年8月27日である。現在、発掘調査区は調査前と同じように埋め戻されている。



第5図 調査区配置図

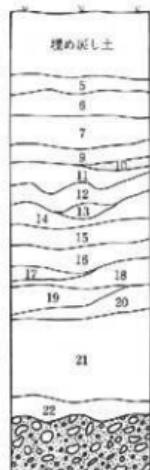
### 3. 基本層序

今回の調査では、基本層序の分層は、原則として前回の調査概要が明らかにされている『山田上ノ台遺跡一発掘調査概報一』（1981）の「IV 基本層序」にもとづいて行なった。しかし、第10層の川崎スコリア層よりも下位の層序については、前回の調査の基本層序との対比が困難な層位もあったため、上から順に層名を付していった。また、前回の調査で部分的にしか確認されなかった第8層（N-23区で顕著に見られた層）などは、今回の基本層序から欠落している。

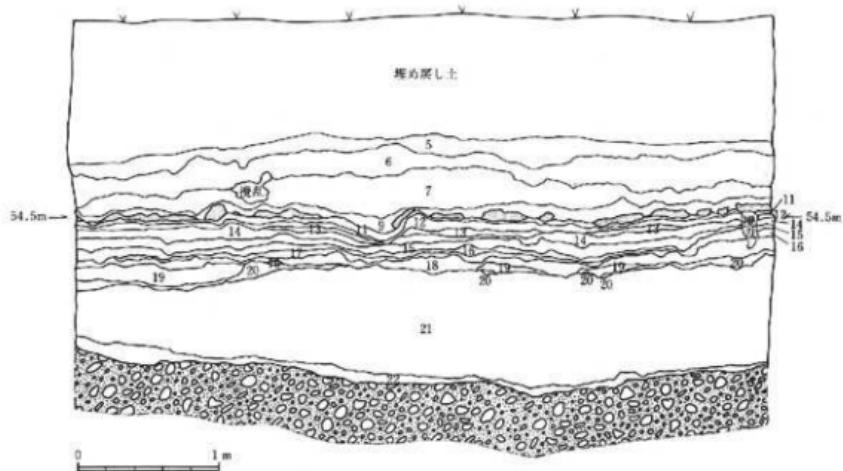
ここでは、まず、V-18区西壁を用いて各層の概略について述べ、次に前回の調査の基本層序との対比を行なうこととする。なお、V-18区は、前回の調査すでに第4層まで精査が終了しているので、基本層序模式図には第5層以下しか図示していない。

**埋め戻し土** 前回の調査終了後、埋め戻された層である。前回の調査では、重機で表土を排除しているので、耕作等によってそれに含まれたと思われる縄文時代、平安時代の遺物が出土している。

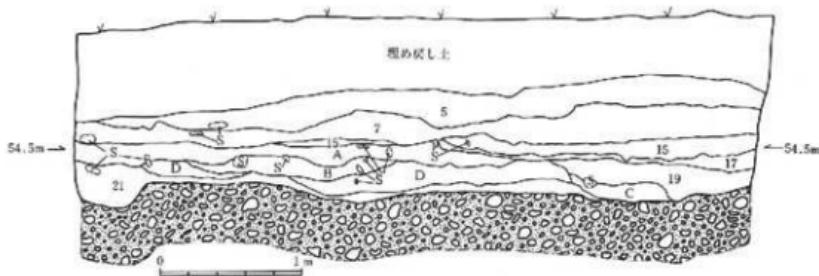
**第4層 黄褐色（10YR%）粘土質シルト** 火山灰層への漸移層である。し



第6図 基本層序模式図



第7図 V-18区西壁断面図

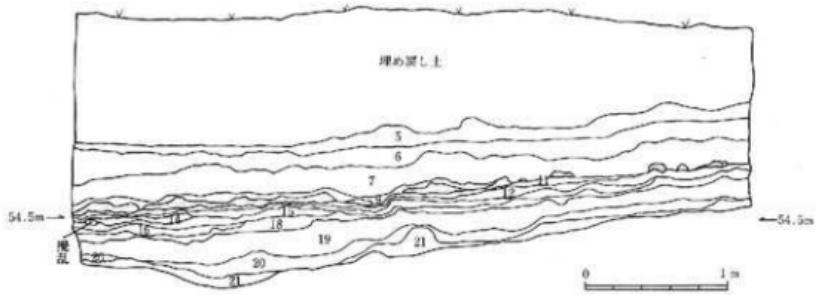


第8図 U-20区南壁断面図

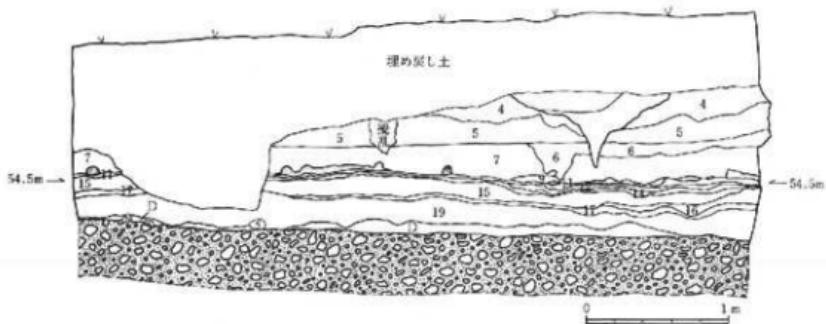
土層注記  
 A 明黄褐色(10YR 6/6)粘土質シルト  
 B 黄褐色(10YR 5/6)シルト質粘土  
 C 黄褐色(10YR 5/6)粘土  
 D 黄褐色(10YR 5/6)砂 塵

まりがあまりなく、粘性も弱い。直径0.5~2cmの褐色のブロック及び非常にもろい白色の岩片を全体的にまばらに含んでいる。この層は、前回精査された箇所もあったため、U・V-19区の一部でしか確認されなかった。この層の上面で、性格不明のピット群を検出している。層中及び埋め戻し土との層理面からは、縄文土器と思われる風化の著しい土器片が数点出土している。

**第5層** 黄褐色(10YR 5/6)ローム。火山灰層である。しまりはそれほどなく、粘性はやや弱い。部分的に上層が混入している。直径0.5mm程のマンガン粒を含み、第7層起源の大きさの一



第9図 W-18区西壁断面図



第10図 U-19区南壁断面図

定しないロームブロックが、時おりみられる。調査区のほぼ全体に分布する層である。この層からは旧石器時代の石器が出土している。

第6層 明褐色(7.5YR 8%) ローム。火山灰層である。上層に較べややしまりがまし、粘性も強くなる。第7層起源の大きさの一定しないロームブロックを上層よりも多く含み、直徑2mm程の小礫、黄白色の岩片をごくまれに含んでいる。この層は、U-19区の東半からU-20区にかけては分布しなくなる。旧石器時代の石器が出土している。

第7層 オリーブ褐色(2.5Y 6%) ハードローム。火山灰層である。よくしまっており粘性も強い。ほぼ均質な層で、ごくまれに直徑1mm前後のマンガン粒、0.5mm程の白色粒、2mm程の小礫を含むだけである。分布は、今回の調査区全体に及ぶ。この層からも旧石器時代の石器が出土している。

第9層 オリーブ褐色(2.5Y 6%) ハードローム。火山灰層である。直徑0.2~1cmの白色シルトのブロック、第10層(川崎スコリア層)起源の直徑1~2mmのスコリア粒を含み、これらの有

無によって第7層とは分層できる。今回の調査区の中央部で明瞭に認められるが、W-18区では北にいくにつれて、U-19区では東へいくにつれて分布しなくなる。U-20区にはほとんど分布しない。

第10層 明赤褐色（5YR%）スコリア層。川崎スコリア層を含む固結部に相当する層である。移植ベラでも削れるほど軟らかい部分がほとんどであるが、良好に遺存し、板状になっている部分もある。今回の調査区中央部に顕著に分布し、V-18区とV-19区にまたがった浅い皿状の落ち込みには非常に厚く堆積している。

第11層 棕色（10YR%）粘土。粘性が強く、しまりはあまりない。軟質でほとんど均質な層である。ほぼ今回の調査区全体に分布するがU-19区東半からU-20区にかけては分布しない。

第12層 黄褐色（10YR%）シルト質粘土。しまりがあり粘性はやや強い。明黄褐色（10YR%）シルトを非常に多く含んでおり、これによって特徴づけられる。分布は上層と同様である。

第13層 黄褐色（10YR%）粘土。しまりがあり、上層と較べると粘性は強くなる。直径5mm程の白色の小礫及び微砂を含む。V-18区、V-19区付近に部分的に分布する。

第14層 棕色（10YR%）粘土。上層と同様な層相を示すが、上層よりは若干暗く、よりしまっている。直径1mm前後の白色粒及びマンガン粒を全体的にまばらに含んでいる。ほぼ調査区全体に分布するが、W-18区の北半、U-19区の東半からU-20区にかけては分布しない。

第15層 黄褐色（10YR%）粘土。しまりがあり粘性も強い。微砂、直径1mm前後の白色粒、マンガン粒を全体的に含んでいる。上層と較べると、より明るくなる。W-18区の北端、U-20区の東端には分布しない。

第16層 明黄褐色（10YR%）粘土。しまり、粘性とも上層と同様であり、混入物も同様であるが、上層よりも更に明るくなる。W-18区、U-19区では部分的にしか認められない。

第17層 黄褐色（10YR%）粘土。粘性があり、しまりはあまりない。第15層と同様な色調であるが、直径1cm程の第16層のブロックを全体的に含んでいるため、第15層よりは若干明るく見える。黄色の微砂を含んでいる。W-18区、U-20区東半にはほとんど分布しない。

第18層 黄褐色（10YR%）粘土。粘性はあまり強くなく、しまりがある。上層にみられた黄色の微砂を非常に多く含み、カマ等で削った時にはジャリジャリと音がする程である。今回の調査区北半部に分布する層で、U-19区、U-20区ではほとんどみられない。

第19層 明黄褐色（10YR%）粘土。粘性が非常に強いのが特徴である。下部にいくにつれて彩度が増し、10YR%を示すようになる。上層まで全般的にみられたマンガン粒はそれほど含まなくなる。主にU-19区、V-19区に分布し、それ以外では部分的にしかみられない。この層から石器が1点出土している。

第20層 この層は、明黄褐色（10YR%）シルト質粘土を基調とし、それに、にぶい黄橙色（10

Y R 3/4) 砂質シルトがまだらに混じる層である。この砂質シルトは、下部により多くみられる。W-18区には明瞭に分布するが、V-18区、V-19区では部分的にしか認められなくなり、U-19区、U-20区ではほとんどみられない。

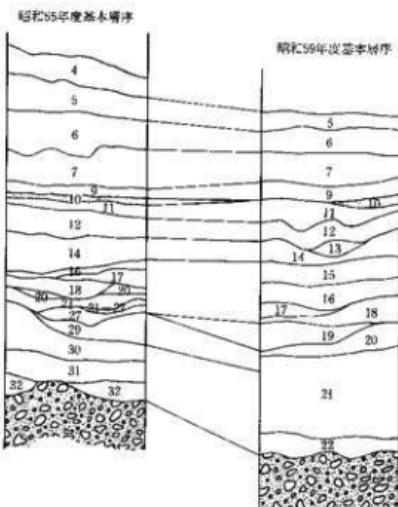
**第21層 明黄褐色 (10 Y R 3/4) 粘土。** 浅黄色 (2.5 Y 3/4) 砂及び粘土を基調とし、橙色 (7.5 Y R 3/4) の酸化鉄斑が混じる層である。酸化鉄斑は部分的に層状をなす所もあるが、途中で拡散してしまい、層として捉えることはできない。同様に、粗砂や直徑 1 cm前後の礫を層状に含む部分もある。全体的には、直徑 3 ~ 10 cmの礫をまばらに含んでいる。今回の調査区の北半に分布し、特にV-18区では60 ~ 70 cmもの厚さになっている。W-18区の精査は、この層の上面までにとどめた。

**第22層** すでに段丘礫層の一部分である。しかし、まだそれほど多くの礫を含まず粗砂が大部分を占めているので、段丘礫層とは分層した。

**段丘礫層** 風化した安山岩を土体とする礫層である。

今回の基本層序と前回の調査の際の基本層序との対応関係を第11図に示した。後期旧石器時代の石器が出土した第5層から第7層までと、第9層・第10層（川崎スコリア層）及びそれ以下の第14層までは対比が可能であった。しかし、第14層よりも下位の、段丘礫層までに至る層は対比が非常に困難で、今回の第19層が前回の第28層に、第20層と第21層の上部が第29層に対応することを確認し得たのみである。これは、前回の第15層から第28層までの各層が、「支谷からの運搬堆積が弱まる過程で地表流の影響をも受けながら堆積され<sup>(1)</sup>」て形成されたため、部分的にしか分布しない層が多いことによるものと考えられる。また、今回の調査では、前期旧石器時代に属する資料が1点しか得られなかったことも対比を困難にする原因となっている。

(注) 仙台市教育委員会・本間物産株式会社 (1981)『山田上ノ台遺跡一発掘調査報告』P.10 ff. 7~8



第11図 基本層序対応関係図

## 第Ⅳ章 山田上ノ台遺跡および北前遺跡の火山灰

庄子 貞雄・山川 一郎

(東北大學農學部)

### 1. はじめに

宮城県内でみい出される旧石器遺跡のほとんどは火山灰でおおわれている。火山灰はこのように旧石器遺跡の最も重要な保護者となっており、そして火山灰は広い範囲にわたり分布するため遺跡間の対比者としての役割もたす。さらに火山灰はその噴出年代が種々の方法により決定され得るので、遺跡や遺物の年代決定に極めて重要な役割をはたす。火山灰は土壤化すると新しい年代の場合（東北地方では1万年以後）は、かつての表層が真黒な腐殖層となっているので過去の生活面が判明できる。火山灰の年代が古い場合でも、旧生活面にはクラック帯と呼ばれる割れ目があったり、また土色から判定可能なものが多い。このように火山灰は遺跡や遺物にとり多くの過去の情報を引き出してくれるものである。

山田上ノ台遺跡や北前遺跡も先に報告されているように（仙台市教育委員会・本間物産株式会社 1981、仙台市教育委員会 1982、庄子、山川 1982）、発掘された旧石器は火山灰やその堆積物と思われる母材でおおわれている。本報告では、はじめに両遺跡に關係の最も深い宮城県南部の火山灰の概要をしめし、ついで山田上ノ台遺跡と北前遺跡の火山灰について検討することとする。

### 2. 宮城県南部の火山灰について

第12図には板垣（1979）によりまとめられた宮城県南部の火山灰の層序をしめした。新しいものから遠刈田、永野、平沢、愛島、越路の各火山灰と呼ばれ、永野火山灰はさらに上部、中部、下部に3分されている。

遠刈田火山灰、永野火山灰、平沢火山灰は蔵王火山が噴出源とされているが（板垣 1979）、愛島火山灰と越路火山灰についてはまだ明らかでない。しかし、近年、愛島火山灰の噴源は川崎町安達付近の可能性が強いと考えられている（板垣 1985、蟹澤 1985）。

これらの火山灰の年代は、遠刈田火山灰のうち蔵王-aが1624年の大噴火による火山灰（三枝、庄



第12図 宮城県南部の火山灰層序（板垣1979）

第2表 宮城県南部の代表テフラの重鉱物組成<sup>1)</sup>

		重鉱物組成(種類%)						重鉱物 含有量 (Wt%)	噴出層	年代
		シソ輝石	普通輝石	角閃石	磁鐵鉄	かんらん石	火山ガラス			
遠刈田火山灰	藏王-a <sup>2)</sup>	66	15	5	1	13	9	中央藏王	1624	
	藏王-b <sup>3)</sup>	71	12	2		5	16	*	1000	
永野火山灰	N S - 1 <sup>4)</sup>	78	13	2		4	26	*		
	N S - 2 <sup>4)</sup>	79	11	3		7	17	*	6800	Y.B.P.
	N S - 3 <sup>4)</sup>	85	8	2		5	16	*		
	N S - 4							*		
	スコリア	85	12	4			10		26000	Y.B.P.~
	遠刈田火山灰	84	12	5			9		32000	Y.B.P.
愛島火山灰	火 山 灰 <sup>5)</sup>	4	48	39			21	不 明		
	軽石(黄色部)	1>	60	46			8	*		
	軽石(白色部)	1>	56	43			2	*		
越路火山灰	火 山 灰 <sup>6)</sup>		避鉄鉄	>シソ輝石 >普通輝石				*		
	越路 軽石 <sup>7)</sup>		避鉄鉄	>シソ輝石 >普通輝石				*		
	シドリ鉄石 <sup>8)</sup>		避鉄鉄	>シソ輝石 >普通輝石				*		

1) 0.1~0.2mm部分 2) 山田ら(1980) 3) 三枝・庄子(1984) 4) 梶原(1979)

子(1984)、藏王-bが<sup>14</sup>C年代から約1000年前と考えられている。永野火山灰は多くの固結した青灰色の火山灰の累積した層であり、このうちとくに4枚の固結層はその分布範囲が広いことと、層厚が厚いことから各々N S-1からN S-4と呼ばれたり(板垣 1979)、第1青盤～第4青盤(三枝、庄子 1984)と呼ばれたりしている。N S-2はその底以下の層の<sup>14</sup>C年代が約6800年(GAK-3310)である。これらのN S-1からN S-4の4枚の火山灰のうち両遺跡にとり最も重要な火山灰はN S-4である。この火山灰は山田上ノ台遺跡や北前遺跡にもみとめられたように最も分布範囲が広い。このN S-4は川崎スコリアと呼ばれる赤色のスコリアを固結した粗粒火山灰がサンドイッチ状にはさんでおり通称パンパンと呼ばれている。このN S-4の年代は3万数千年よりも新しく2万数千年よりも古ないと考えられている(板垣ら 1981)。愛島火山灰と越路火山灰についてはその年代はまだ明らかにされていない。

第1表にはこれらの火山灰の重鉱物組成をしめした。また今まで述べてきた噴出源や年代もあわせてしめした。藏王起源の遠刈田火山灰、永野火山灰の重鉱物含量はほぼ10~20%で、その組成は全てシソ輝石が大部分で、その他少量の普通輝石、磁鐵鉄、火山ガラスが含まれている。このように藏王起源の火山灰は重鉱物組成は全て類似している。軽鉱物組成は、ここには示さなかつたが、大部分が有色火山ガラスで、その他斜長石が含まれている(山田ら 1980)。一方、愛島火山灰の重鉱物含量は火山灰で約20%、黄色軽石部分が8%、白色軽石部分は2%と風化が進んでいる部分ほど高い値となっている。このうち、黄色軽石部分が従来の愛島軽石

で、白色軽石部分（川崎町安達の断面でよく観察できる）は、板垣（1979）の野外観察や蟹沢（1985）の詳細な岩石鉱物学的研究から愛島軽石の未風化部分であることが明らかにされてきている。この愛島火山灰の重鉱物組成は巖王起源の火山灰とはまったく異なり、角閃石と強磁性鉱物から成り、軽鉱物部分には石英が多量に含まれている。そして、この角閃石はカミングトナイトと呼ばれる角閃石で、わが国の火山灰中には今まで認められていない珍しい角閃石であることが蟹沢（1985）により明らかにされ、この愛島火山灰の成因が火山学的にも注目されてきている。また、この愛島火山灰はその分布範囲が広いので、考古学研究とくに旧石器の研究にとり重要な鍵層となる火山灰である。越路火山灰の重鉱物組成は磁鐵鉱>シソ輝石>普通輝石であり、この火山灰はその分布が広いことから、将米重要な鍵層となると考えられる。

これらの各火山灰の岩質は速刈田火山灰と永野火山灰は玄武岩質安山岩と比較的苦鉄質の火山灰である（Shoji et. al. 1975, 山田ら 1980, 三枝、庄子 1984）。これに対し、愛島火山灰は流紋岩と極めて珪長質である（三枝、庄子 1984）。

### 3. 山田上ノ台遺跡の火山灰

山田上ノ台遺跡では第1文化層から第9文化層までの9層の文化層面がみい出されており、このうち第6文化層以下の面が前期旧石器が発掘された面である。第1文化層は5層上面、第2文化層は6層上面、第3文化層は7層上面、第4文化層は8層上面、第5文化層は9層上面である。10層が川崎スコリア層を含む固結火山灰層（通称パンパン）であり、このパンパンの年代が2万数千年前と3万数千年前の間と考えられることから（板垣ら 1981）、この火山灰が前期旧石器時代と後期旧石器時代をほぼ区分できる有効な示標層となる。第6文化層は大部分が21層上面、第7文化層はほぼ22層～24層上面、第8文化層は27層上面、第9文化層は29層上面となっている。

山田上ノ台遺跡の基本層序の中で第1層より第9層まで全体的に風化し、褐色を呈し、埋没腐植層をもたない。第10層は前述したように川崎スコリア層である。第11層、第12層は地表風化の特徴をしめし暗褐色で著しく風化した層である。14層～24層も風化の著しい層であり、このうち15層と20層には少量の、16層と18層には多量の風化した軽石を含む。また21層と23層には円礫が多い。25層、26層、27層は比較的粗粒な粒子から成り、とくに27層には多量の円礫が認められる。

山田上ノ台遺跡の5層以下の重鉱物組成を第3表に示した。重鉱物組成からは5層～9層、10層、11層、14層～19層、20層以下に大別できる。第5層から第9層までは、シソ輝石が大部分で、ついで磁鐵鉱、角閃石、普通輝石の順である。10層はシソ輝石が大部分で、その他普通輝石、磁鐵鉱を少量含む。この重鉱物組成は、第2表に示した川崎スコリア（N S-4）の重鉱物組成と同様であり、重鉱物組成からみても川崎スコリアとして矛盾はない。14層～19層は磁鐵

第3表 山田上ノ台遺跡土壌の重鉱物組成

層序	重鉱物組成(粒度%)						重鉱物 合量 (Wt %)	云母 有無	理 由	風化軽石
	シソ細石	普通細石	角閃石	磁鐵鉱	ジルコン	アバタイト				
5	56	1	12	32			14			
6	59	3	16	20	1>	1	20			
7	69	3	6	20		2	13			
8	61	3	5	30		1	11			
9	75	1	11	12		1>	17			
10	89	7		4			26			
11	12		40	46			4			
12		n.d.								
13		n.d.								
14	1		42	36		1	6			
15	1		45	33		1	5			少
16	1		51	48			13	あり		多
17		n.d.						あり		多
18			34	66			9	含む		
19			45	55			14	多		
20	2		24	71	1	2	5	あり		少
21	1		28	71		1	4	含む	少	多
22			18	81		1	3	あり		
23	1		17	81		2	7	あり	少	多
24			15	81		4	5	含む		
25			12	81	2	5	3	含む		
26			15	83	1	2	2	あり		
27			4	95		2	14		少	多
28		n.d.								
29			9	82		4	4	多		
30			14	84	1	1	4	多		
31		n.d.						多		
32	2		5	86		8	3	含む		

鉱、角閃石がほぼ半分ずつであるが、20層以下は大部分が磁鐵鉱である。16層以下には多少とも雲母が含まれている。以上のことと、断面観察の結果とをかみあわせると、第5層から第9層までは降下火山灰が土壤母材であり、第10層は川崎スコリアである。15層～17層には風化軽石を含むが、16層以下の層には、これまで知られている宮城県南部のテフラには含まれていない雲母も認められる。そのため、この風化軽石は基盤岩の軽石凝灰岩に由来する可能性があり、15層～17層が著者らが前に報告したように（庄子、山田 1982）、愛島火山灰の再堆積か否か

の決定は軽石中の角閃石がカミングトナイトかどうかを検討する必要がある。

#### 4. 北前遺跡の火山灰

北前遺跡では基本層序は第1層から第9層までとえられており、それ以下は浅黄色粘土質上層とされ、各セクションとの対応はされていない。旧石器は5層上面、6層上面、9層上面、そしてD3a区の15層上面と15b区17層上面からみい出されている。第7層は断面観察から明らかに川崎スコリアである。従って第7層以下から出土した旧石器は前期旧石器である。

北前遺跡土壤の重鉱物組成を第4表にしめした。第5層と第6層は、シソ輝石を主体とし、その他磁鐵鉱、角閃石、普通輝石を含む。また、第7層は川崎スコリアであるが、純粹の川崎スコリアに比べシソ輝石が少なく、角閃石と磁鐵鉱が多くなっているが、これは試料に川崎スコリア以外のものが混っていたためと考えられる。第9層は円礫が多く再堆積層である。第9層以下の層は磁鐵鉱が大部分で、その他角閃石と極少量のシソ輝石が含まれている。また多量の雲母鉱物も含まれている。以上のことから第5層、第6層、第7層は隣下火山灰を主体とすると考えられる。第8層以下は再堆積物を母材とすると思われ、とくに第9層以下には雲母が多量にみられることから、北前遺跡の発掘調査報告書(1982)にもあるように支谷からの凝灰岩由来の供給物質を主体とする可能性がある。

第4表 北前遺跡土壤の重鉱物組成

層序	重 鉱 物 組 成 (粒度%)						重鉱物 合量 (Wt%)	雲 母	標
	シソ輝石	普通輝石	角閃石	磁鐵鉱	ジルコン	アバタイト			
5	67	2	9	19			12	あり	
6	50	3	14	33			12		
7	32		26	39			10		
8	1		46	50			8	あり	
9	2	1	17	78	2		1	多	円礫多
10	1		16	82	1		1	*	
11	6	1	22	70			1	*	
12	4		19	77			1>	*	
13			n.d.	—				*	
14	3		43	54			1>	*	
15	1>		10	90			1>	*	

#### 5. 山田上ノ台遺跡と北前遺跡の火山灰の比較

断面観察と重鉱物組成からみて、山田上ノ台遺跡の第5層～第9層と北前遺跡の第5層および第6層の火山灰は同一のものと考えられる。山田上ノ台遺跡の第10層と北前遺跡の第7層は川崎スコリア層である。山田上ノ台遺跡の第11層～第19層と北前遺跡の第8層は重鉱物組成が

類似しており、愛島火山灰の可能性が考えられる。しかし前述したように、これらの層には玄母が含まれる場合があるので角閃石のより詳細な検討が必要である。山田上ノ台遺跡の第20層以下と北前遺跡の第9層以下は重鉱物組成が類似していること、玄母がかなり認められること、円礫を多量に含む層が認められることなどから、周囲の支谷から凝灰岩由来の物質の供給をくり返し受けた上層であると推定される。

なお、今回の分析に用いた土壌は昭和55年の調査の際に採取したサンプルであり、層名は昭和55年の基本層序によった。

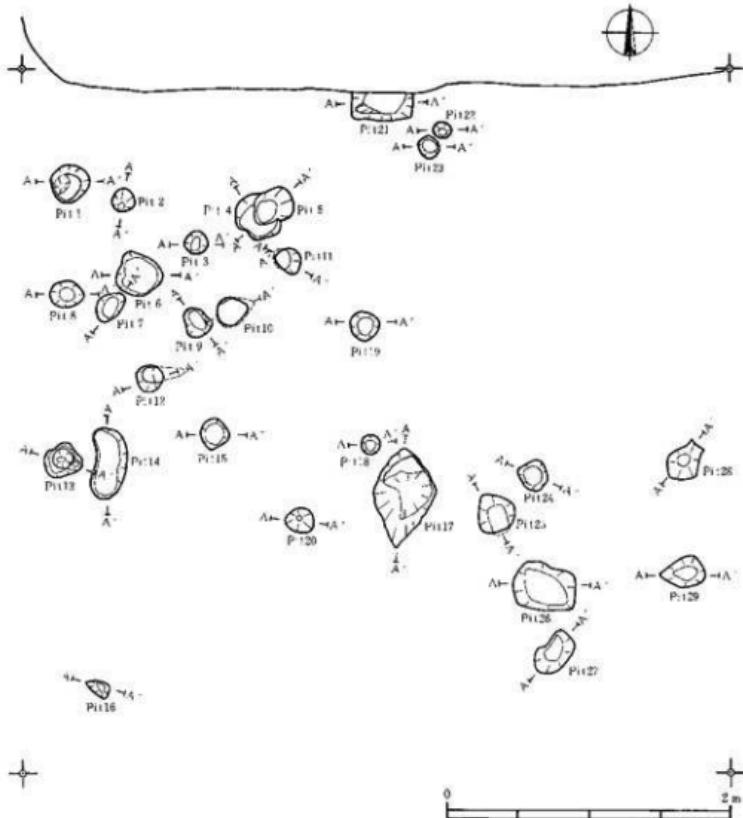
### 引用文献

- 板垣直俊 (1979) : 仙台周辺のチフクについて、東北大卒論
- 板垣直俊・豊島正幸・寺戸直夫 (1981) : 仙台およびその周辺地域に分布する洪積世末期のスコリア層 東北地理、33巻、P. P. 48~53.
- 板垣直俊 (1985) : 仙台およびその周辺地域に分布する愛島軽石屑 (演旨) 東北地理、37巻、P. P. 79~80.
- 齋澤聰史 (1985) : 仙台市および周辺に分布する愛島軽石とその中の深成岩質岩片について、齊誌誌、80、352~362.
- 三枝正彦・庄子貞雄 (1984) : 戦前火山灰の分布と特性、ベジロジスト、28巻1分、P. P. 14~26.
- 仙台市教育委員会・本間物産株式会社 (1981) : 山田上ノ台遺跡一発掘調査概報、仙台市文化財調査報告書第30集
- 仙台市教育委員会 (1982) : 北前遺跡発掘調査報告書、仙台市文化財調査報告書第36集
- 庄子貞雄・山川一郎 (1982) : 宮城県の火山灰と旧石器時代遺跡、考古学ジャーナル206、P. P. 12~16.
- Shoji S. - Kobayashi S. - Yamada I. and Masui J. (1975) : Chemical and Mineralogical Studies on Volcanic Ashes (1), Soil Sci. Plant Nutr., 21, 311~318.
- 山田一郎・小林通介・庄子貞雄 (1980) : 東北地方の主要火山灰の母材について(1), 土肥誌, 51, P. P. 193~202.

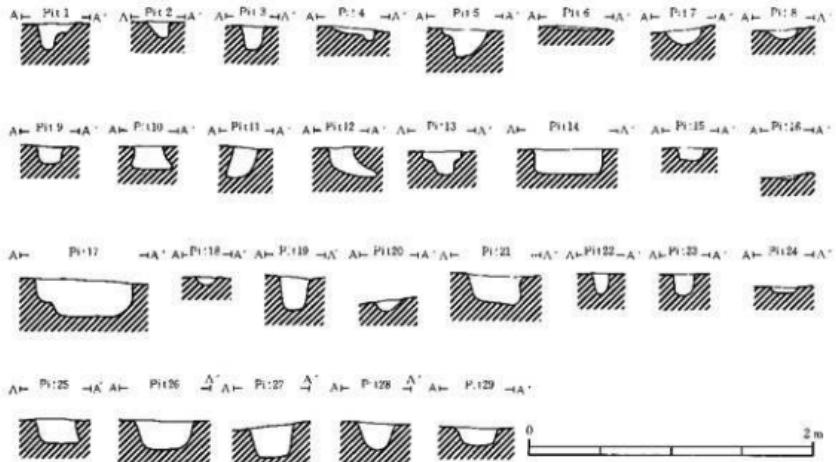
## 第V章 検出遺構と出土遺物

### 1. 検出遺構

〈ピット〉 V-19区で計29のピットを確認した。V-19区には部分的に第3層が残されていて、このピット群の確認層位は、第3層もしくは第4層の上面である。ピットの形態は、平面的にもまた断面的にも一定せず、規模も大きさ10~70cm、深さ3.5~27.9cmとまちまちであり、配列にも規則性は認められない。堆積土はすべて単層で、黒褐色(10YR 3/6)もしくは暗褐色(10YR 4/6)の粘土質シルトである。pit-10, 22, 23からは縄文土器が出土しているが、磨滅が著しく所属時期も判断できなかったので、掲載するまでにはいたらなかった。



第13図 V-19区検出ピット群平面図



第14図 V-19区検出ピット群断面図 (A-A'の標高はすべて34.8m)

(風倒木痕) V-19区で1基、U-20区で2基の風倒木痕を確認した。V-19区の風倒木痕は第4層上面で検出し、最大長2.8m、最大幅1.6m、深さ約60cmの規模である。前回の調査でW-19区南壁東端で確認された擾乱はその一部分である。風倒木痕内からは、石器が2点出土している(第17図1、4)。1は珪質頁岩製の剝片である。表面の右側縁下部には微細剝離痕が認められる。

U-20区の1号風倒木痕は、第17層下面で確認した。最大長4.1m、最大幅2.4m、深さ約80cmの、やや深い皿状の落ちこみで、底面は段丘礫層にまで達している。この風倒木痕内からは剝片2点が出土しており、ともに表面に大きく自然面を残すものである(第17図2、3)。

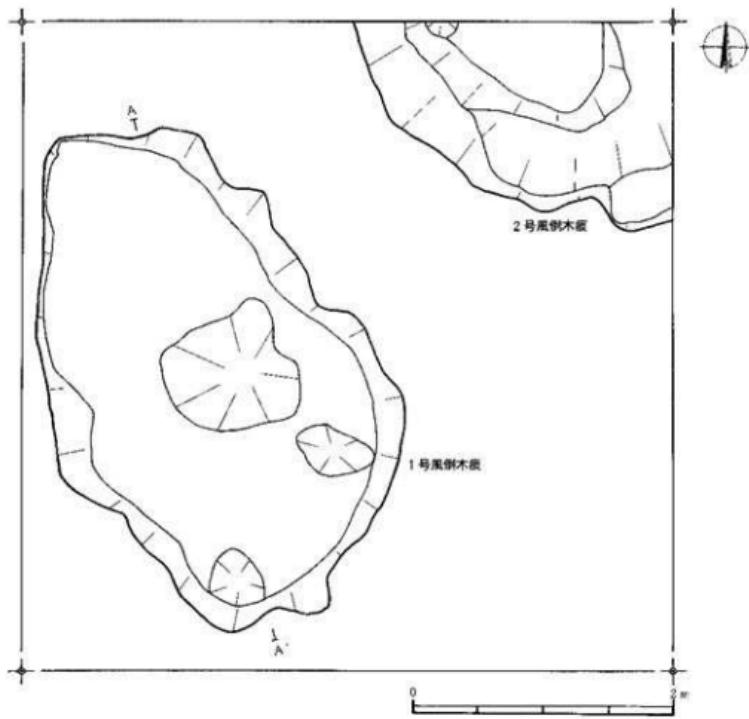
2号風倒木痕は、U-20区北東隅で確認したもので、前回の調査では上坑としてとらえられたものである。検出層位は、第4層である。今回の調査区内では完掘できなかったため、規模は不明である。深さは約80cmである。

(注) 仙台市教育委員会・本間物産株式会社(1981)『山田上ノ台遺跡一発掘調査概報』P.14第7図

## 2. 出土遺物

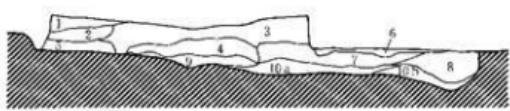
### (第3層) (第18図5、写真18-5)

V-19区で石錐が1点出土している。円基石錐で、基部はやや深くU字状にくぼむものである。側辺は、両側辺とともに尖端部と基部の境界が明瞭で、その境界は側辺の中程の、やや基部に近い所に位置する。表面・裏面ともに、細部調整剝離面によってすべて覆われ、主要剝離面は残されていない。



第15図 U-20区検出風倒木底平面図

A→ 54.5m



1号風倒木底断面図

→A・土層注記

1号風倒木底

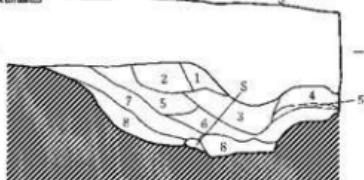
- 1 細 色(7.5YR 4/6)シルト質粘土
- 2 赤 色(5 YR 5/6)シルト質粘土
- 3 明 黄 色(7.5YR 4/6)シルト質粘土
- 4 明 黄 色(7.5YR 4/6)シルト質粘土
- 5 明 黄 色(7.5YR 4/6)粘 土
- 6 赤 黄 色(7.5 YR 4/6)シルト質粘土
- 7 明 黄 色(7.5YR 4/6)シルト質粘土
- 8 明赤褐色(7.5YR 4/6)シルト質粘土
- 9 黄 色(7.5YR 4/6)シルト質粘土
- 10a 黃 色(10YR 4/6)砂
- 10b に赤い赤褐色(10YR 4/6)砂

2号風倒木底

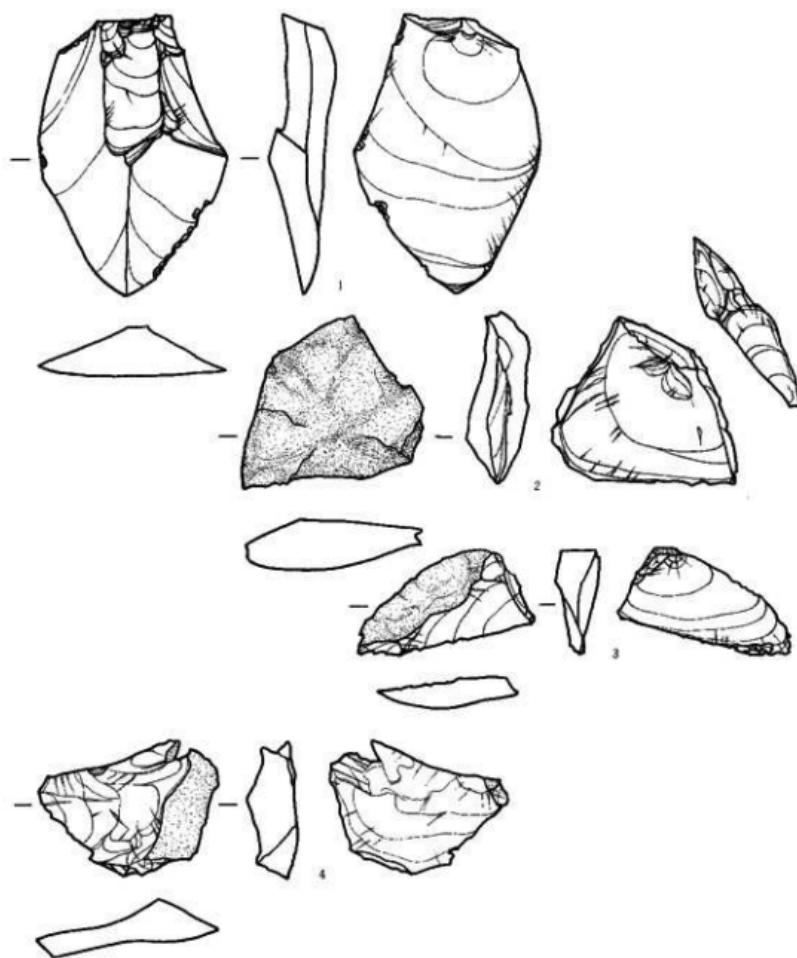
- 1 塗黄褐色(10 YR 4/6)粘土質シルト
- 2 灰 色(10 YR 5/6)シルト質砂
- 3 基本層位の第7層
- 4 黄 色(2.5Y 4/6)シルト質砂
- 5 暗黃褐色(2.5Y 4/6)砂
- 6~8 基本層位の第21層であるが、含まれる種の大小によって細分される。

2号風倒木底断面図

54.5m →

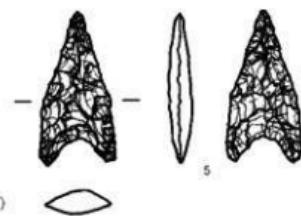


第16図 U-20区検出風倒木底断面図

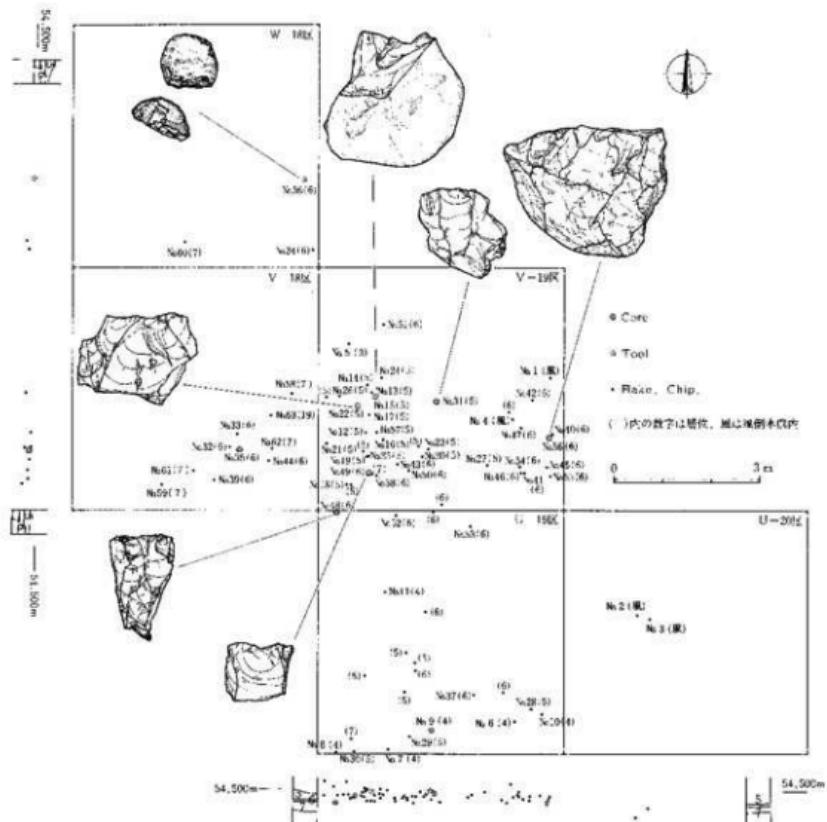


第17図 風倒木痕内出土遺物 (Scale; 1/2)

(1・4: V-19区風倒木痕内  
2・3: L-20区1号風倒木痕内)



第18図 第3層出土遺物 (Scale; 1/2)



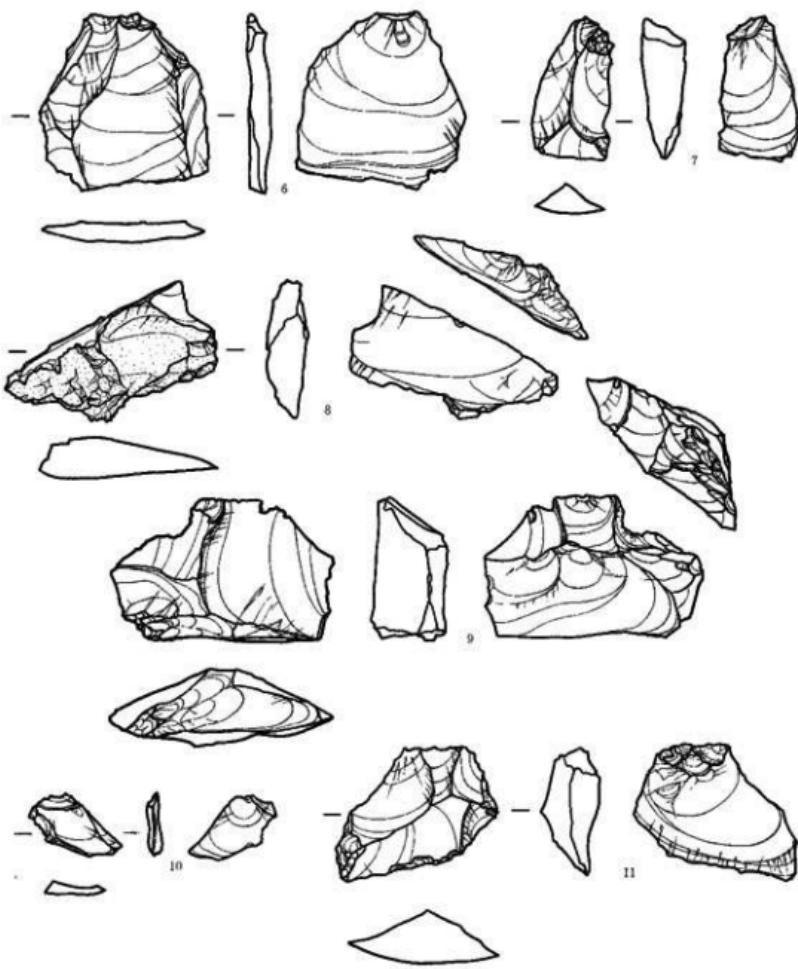
第19図 出土遺物分布図

（第4層）（第20図6～11、写真18-6～11）

U-19区から6点の石器が出土している。散漫な分布を示し、遺物集中部は形成しない。スクレイバー1点（第20図9）と、微細剝離痕を有する剥片2点（第20図8、11）と、3点の剝片から成る。石質はすべて珪質頁岩であるが、同一母岩と思われるものはない。

（第5層、第6層）（第28図～第36図、写真18-12～写真21）

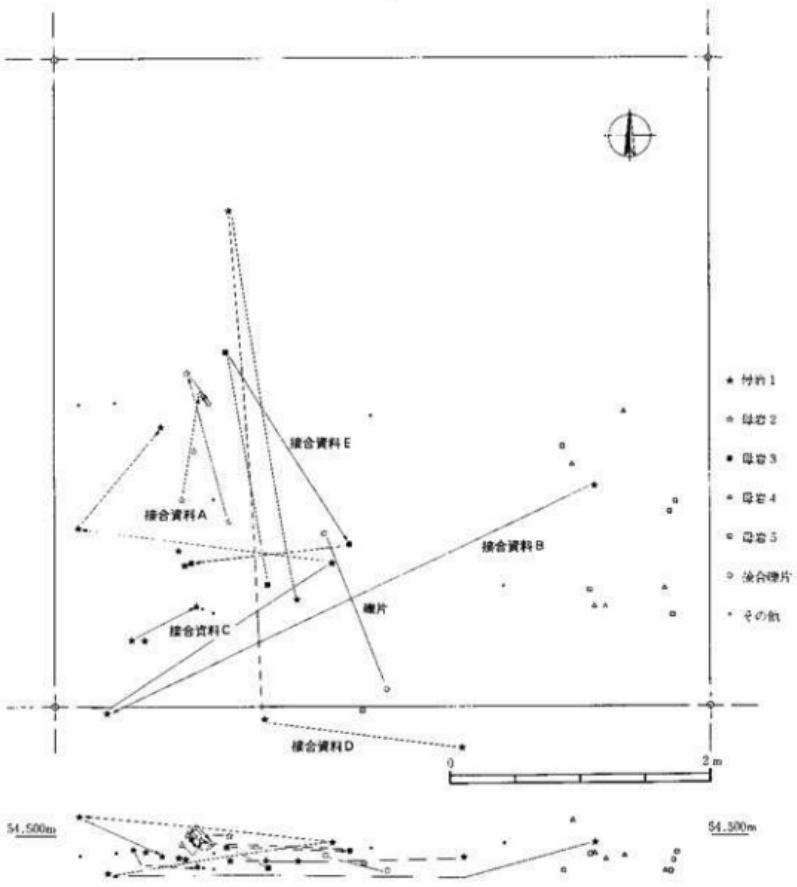
今回の調査では、合計5例（折れ面接合1例と礫片の接合1例も含めると7例）の接合資料が得られた。その中には、第5層中出土の石器と第6層中出土の石器とが接合した例もあるので、まずそれぞれの接合資料について述べ、次に確認された遺物集中について述べることとする。なお、接合関係については、第21図に示した。



第20図 第4層出土遺物 (Scale: 3)

接合資料A (第22図、第23図、写真22、写真24)

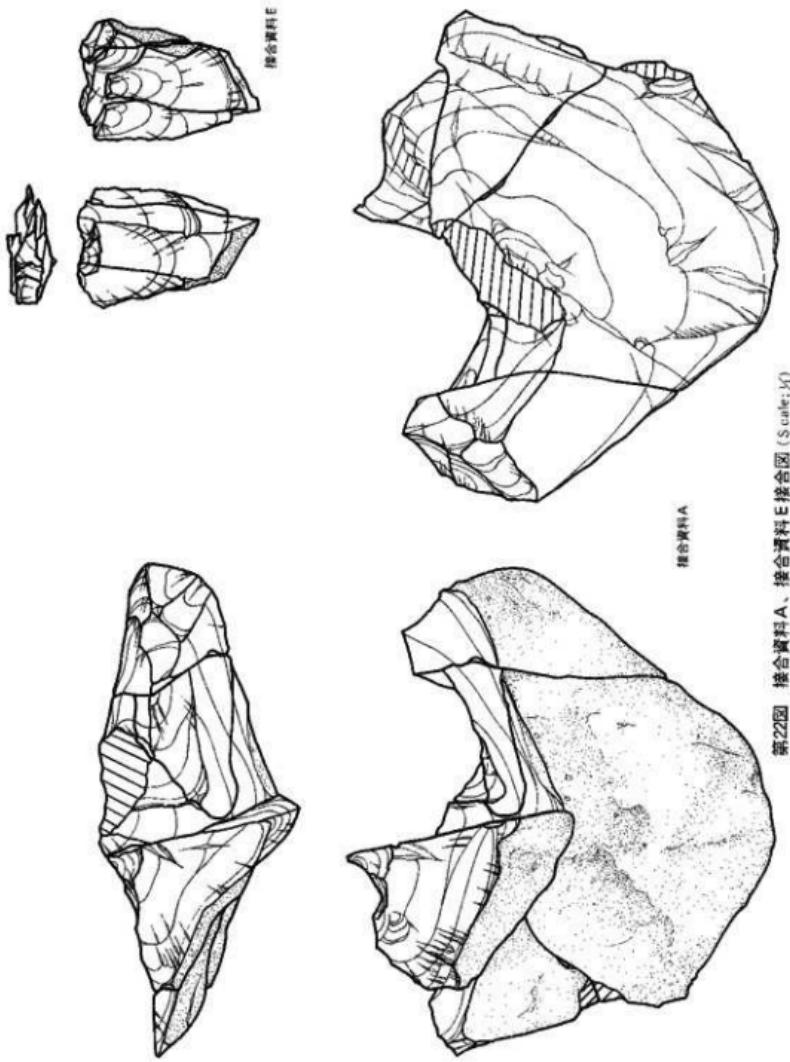
この接合資料に属する石器は、すべて第5層中より出土している。平面的には最も離れているものでも1.2m程と、それ程の距離はない。垂直分布では、最大で8cmのレベル差をもつ。剝片4点と石核1点との接合例で、大型の剝片を素材としている。また、直接接合はしないが、

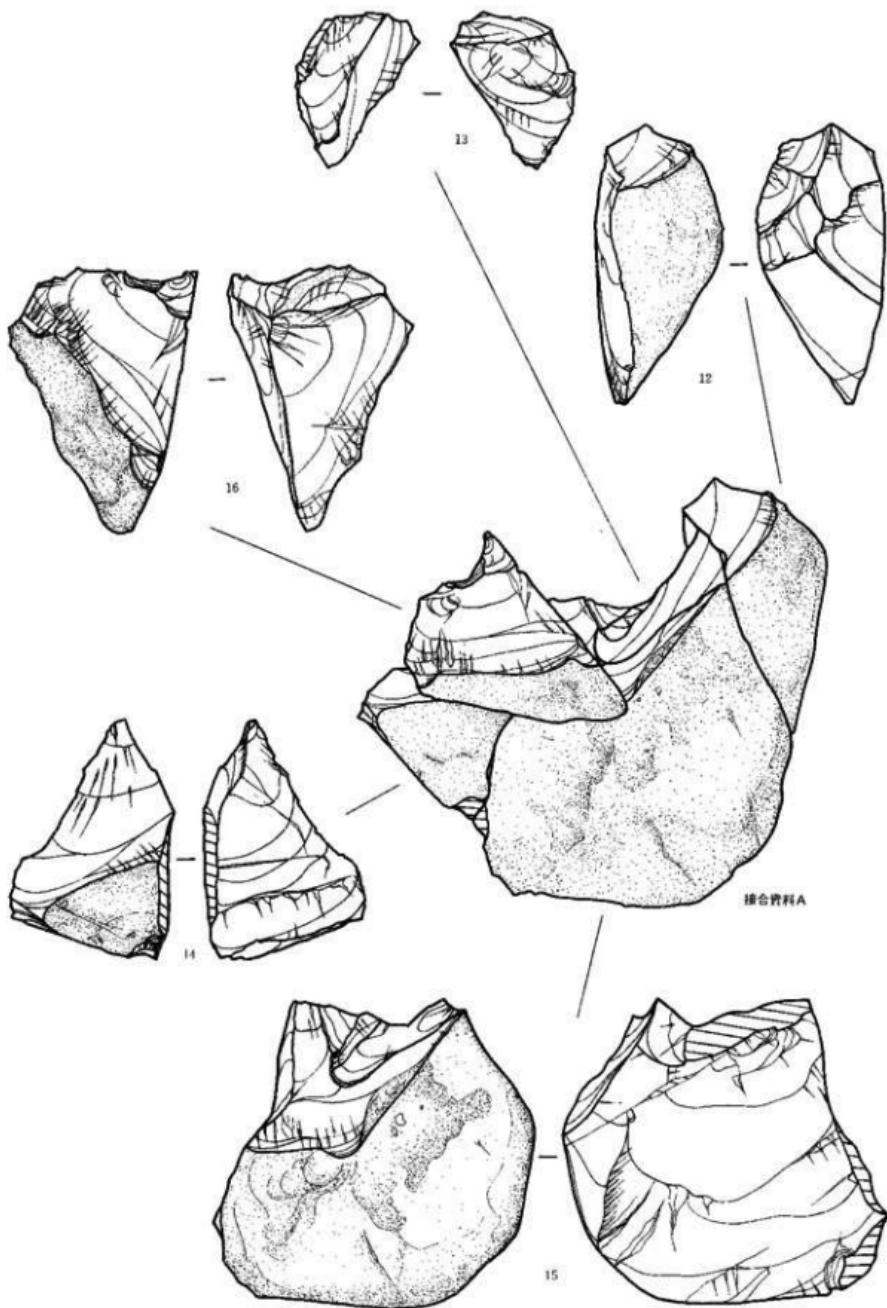


第21図 接合関係図 (V-19区)

同一母岩と思われる剝片が第5層中より1点出土している(第29図17)。剝離作業は、最初に裏面からの打撃によって連続的に剝片を剝離している。第23図16の剝片は、この剝離作業によって得られた最後のものの1つである(第29図17もこの剝離作業によって得られた剝片であるが、第23図16の剝離が行なわれる前に剝離されている)。次に、第23図16を剝離した時に生じた剝離面を打面として、第23図12を剝離し、更に第23図12を剝離した際に生じた剝離面を打面として、剝離作業を行なっている。第23図13の剝片は最終的に得られた剝片である。その後の剝離作業は認められない。以上の剝離作業の工程をまとめると次の様になる。大型の剝片を素材と

第22圖 條合資料A、條合資料E接合圖 (Scale; A)





第23図 接合資料A (Scale: 1/2)

して、裏面から連続的に剥離作業を行なった後、最後に形成された剥離面を打面として剥片を1点剥離し、またそれによって得られた剥離面を打面として剥離作業を行なっている。すなわち、交互にというわけではないが、旧剥離作業面を次の剥離作業の打面とするように打面転移が行なわれた剥離作業である。打面調整は認められない。

#### 接合資料B（第24図、第25図、第26図、写真23、写真25）

この資料に属する石器は、第5層中及び第6層中から出土している。平面的にはかなり離れたものも接合しており、中には4m以上も離れた資料の接合もある。垂直的には大きなレベル差をもち、最大で45cmもの差がある。剥片3点と石核2点とからなる。この接合資料は、2つの個別資料が接合したものである。すなわち、第34図48の石核と第30図20の剥片との接合面は分割面と考えられる。しかし、共通する剥離面が多くみられることとその剥離面の観察から、分割は剥離工程の初期に行なわれたものではなく、ある程度進行してから行なわれたものであろう。

B-①の接合資料は剥片1点と石核との接合例である（第25図）。平面的には約4m、垂直的には約25cmの距離をもつ資料が接合している。B-②との接合関係及び残存状況の観察から、石核は本来、あまり大きくななく、それ程大型の剥片を剥離することはできなかったものと考えられる。作業面は1面で、石核の長軸方向にそって同一方向から連続的に剥離作業が行なわれている。打面は剥離面打面である。

B-②の接合資料は、剥片2点と石核とが接合している資料である（第25図）。石核と剥片との平面的距離は1mと1.6mで、垂直的には最大25cmのレベル差がある。作業面は1面で、剥離面を打面として連続的に剥離作業を行なっている。第26図20の剥片を剥離した際に、剥離前の石核の3分の1程が失なわれ、それがその後、第26図21の剥片1点だけの剥離で作業が終了している大きな原因となっていると考えられる。

#### 接合資料C（第24図、第27図、写真23、写真25）

接合資料Cは、剥片1点と石核との接合例である。剥片が第5層、石核が第6層から出土しており、平面的には55cm、垂直的には15cmの距離をもっている。剥片は剥離作業の比較的初期の段階に剥離されたものである。また、石核はほとんど残核に近い状態である。

#### 接合資料D

接合資料Dは、剥片4点の接合例である。すべて第6層中から出土している。平面的には、最大で約4m離れたものが接合しており、垂直的なレベル差はほとんどなく、2cm程度である。この4点の剥片は、自然面と節理面によってそのほとんどが覆われ、剥離過程について述べることができないので、接合図は掲載していない。接合した剥片は、第34図50・51、第35図52・53である。

第24圖 接合資料B、接合資料C接合圖 (Scale: 1/1)

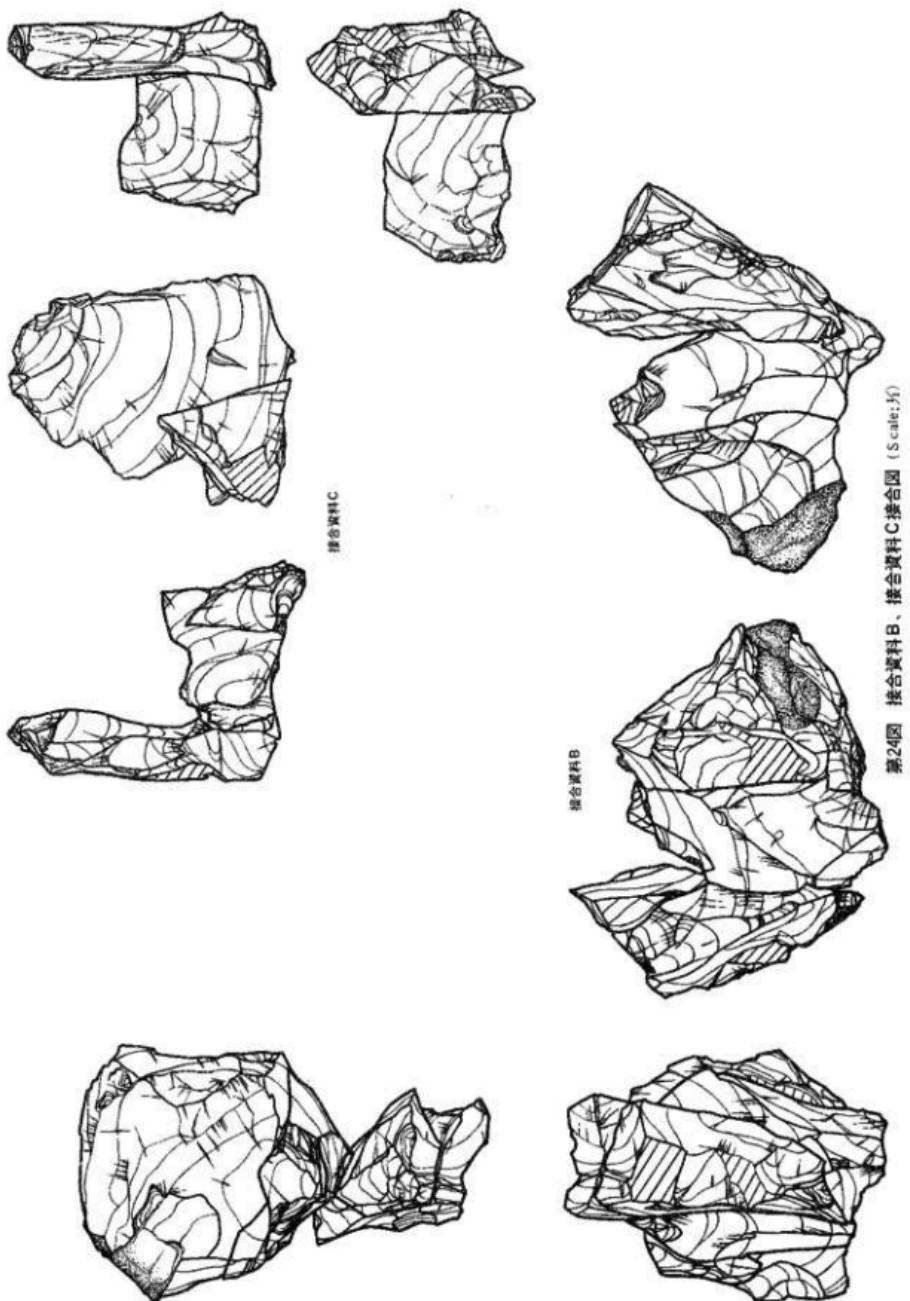
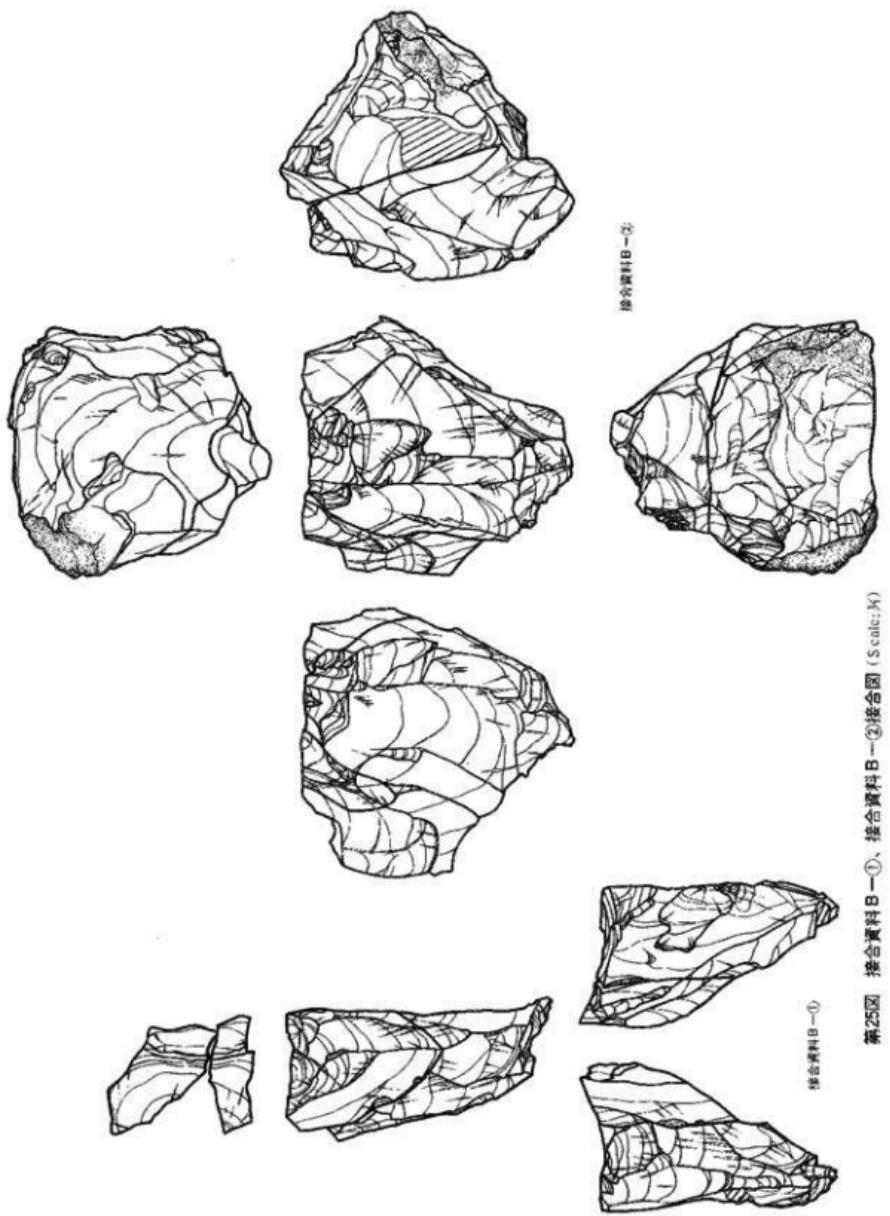
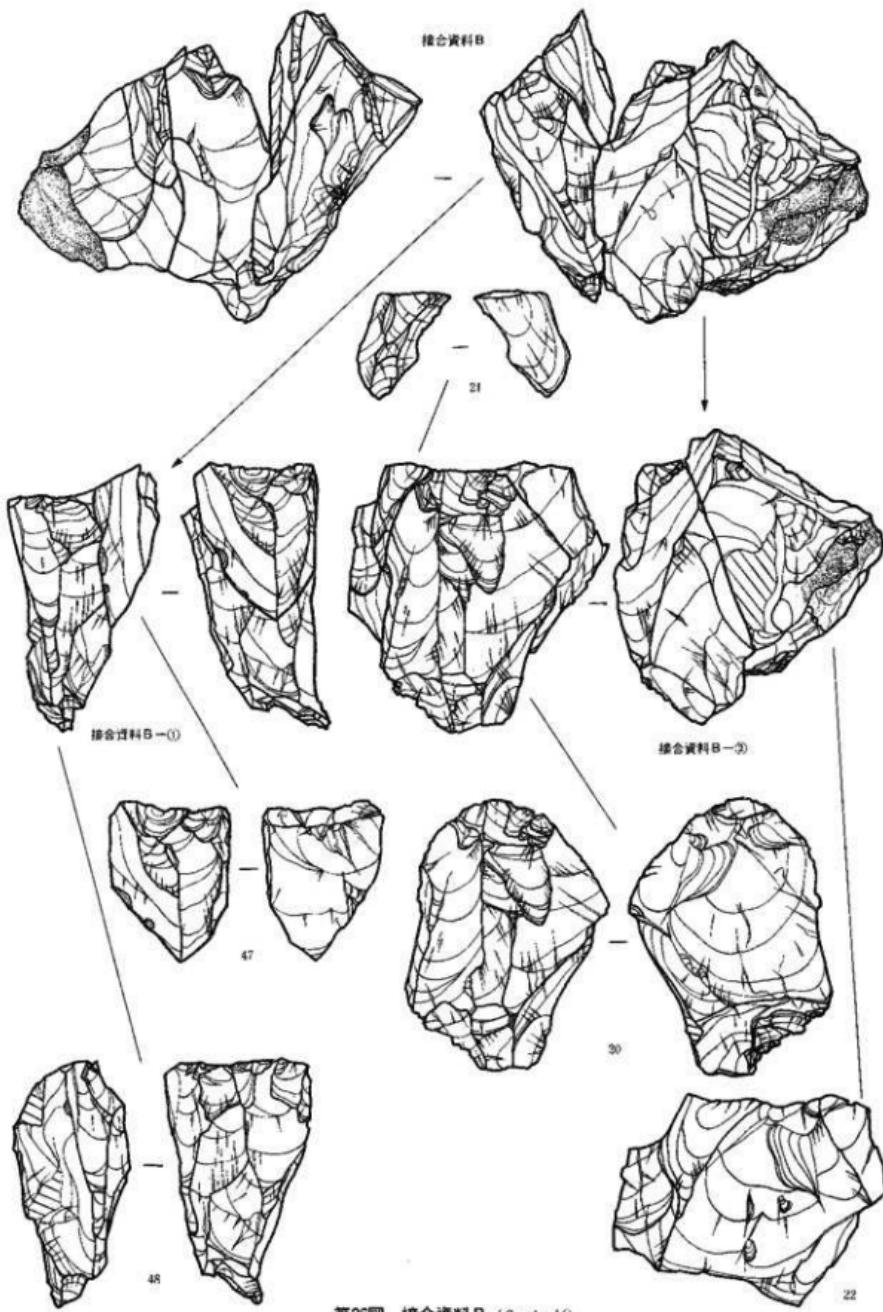
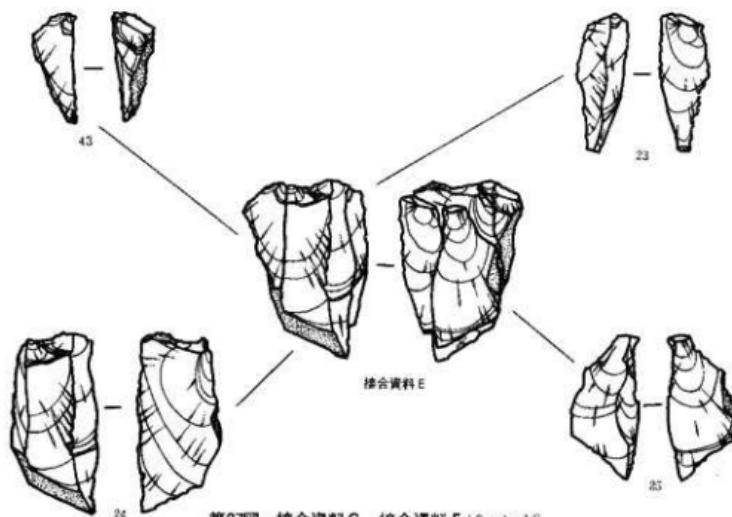
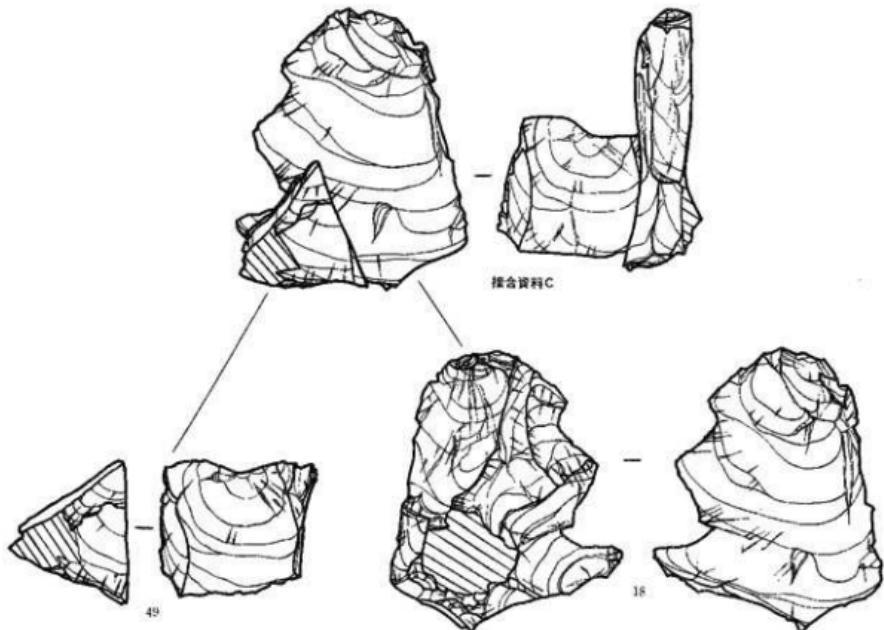


圖25 圖 接合資料B—①、接合資料B—②接合圖 (Scale: 1/2)





第26図 接合資料B (Scale: 3)



第27図 接合資料 C、接合資料 E (Scale; 1)

#### 接合資料 E (第22図、第27図、写真22)

この資料は剥片4点の接合資料である。そのうちの1点は第6層中、残りの3点は第5層中から出土している。平面的には最大でも1.8mとそれ程離れてはいないが、垂直的には22cmものレベル差がある。折れ面での接合が1点あり、それ以外は剥離面での接合である。同一方向からの連続的な剥離作業によるもので、剥離面打面である。

以上の接合資料のうち、接合資料B・C・Dは同一母岩の資料である。

このように、第5層、第6層中には接合資料も多く含まれ、更に最大で約45cmものレベル差をもつ資料が接合している。また、第5層、第6層中出土の石器は、ともに層中から出土しており、垂直的な分布では分離することはできない。従って同一の文化層としてとらえるべきであろう。以下、確認された3ヵ所の遺物集中部について述べていくこととする。

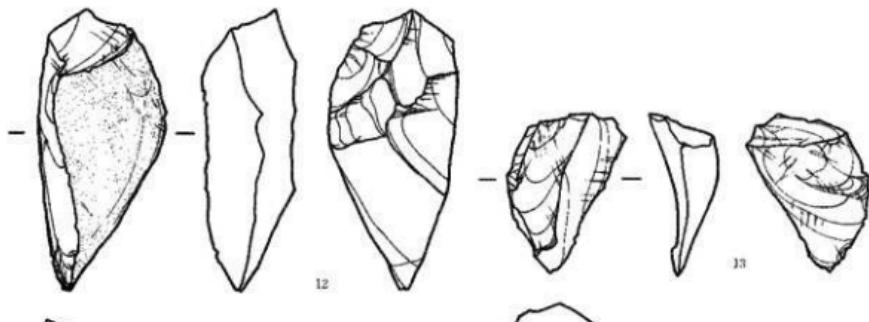
遺物集中1 遺物集中1は、V-19区からU-19区にかけて確認されたもので、4.6m×3mの範囲の平面分布を示す。合計で31点の資料が出土しており、石核5点、剥片21点、碎片1点、敲打痕のある砾石器1点、礫片3点によって構成され、狭義の石器(Tool)は認められない。接合資料A・B・C・D・Eの資料と、接合資料A及び接合資料B・C・Dと同一母岩の剥片、碎片も含んでいる。

遺物集中2 遺物集中2は、V-19区の南東隅付近で確認された。1.6m×1.0mの範囲の平面分布を示すが、今回の調査区よりも東へ広がる可能性がある。石核1点、剥片9点によって構成され、狭義の石器(Tool)は認められない。接合資料B-①の資料1点を含んでいる。また、接合はしないが、2種類の同一母岩と思われる資料を含んでいる。

遺物集中3 遺物集中3は、U-19区の南半部にやや散漫に分布している。3m×3.5mの範囲の平面分布を示すが、今回の調査区よりも更に南へ広がる可能性もある。剥片8点と碎片3点の合計11点から成り、狭義の石器(Tool)は認められない。接合資料B・C・Dと同一母岩の剥片を1点含むが、それ以外に同一母岩と思われる資料もなく、接合する資料も含まない。この集中部には、やや小型の剥片が多く含まれる傾向がある。

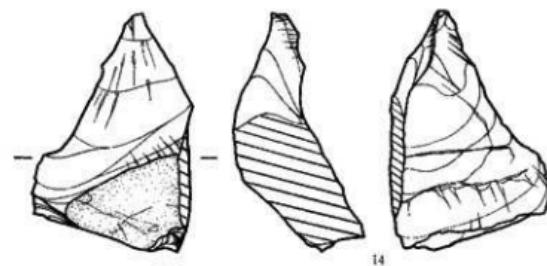
以上の3ヵ所の遺物集中部以外に、W-18区で剥片とスクレイバーが1点ずつ、ともに第6層中から出土している。スクレイバー(第32図36、写真20-36)は黒曜岩製で、直径3cm程(推定)のやや扁平な原石を半割した後、打点付近に裏面から急角度の剥離を加えて刃部を形成したものである。表面には、自然面を大きく残している。半割は、その剥離面の状態から両極剥離による可能性が高い。このスクレイバーは、今回出土した資料の中では唯一の黒曜岩製の資料である。また、V-18区からも5点の石器が得られており、No.35は石核である。

第37図には、母岩別の分布図を示した。この図からは、遺物集中1に接合資料のそのほとんどが含まれること、遺物集中2や3には遺物集中1にみられる母岩の資料がほとんど含まれな

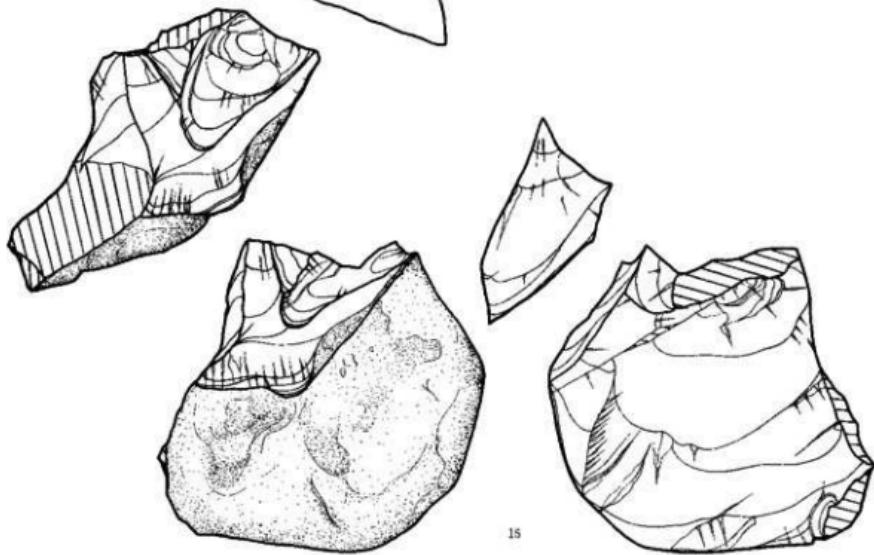


12

13

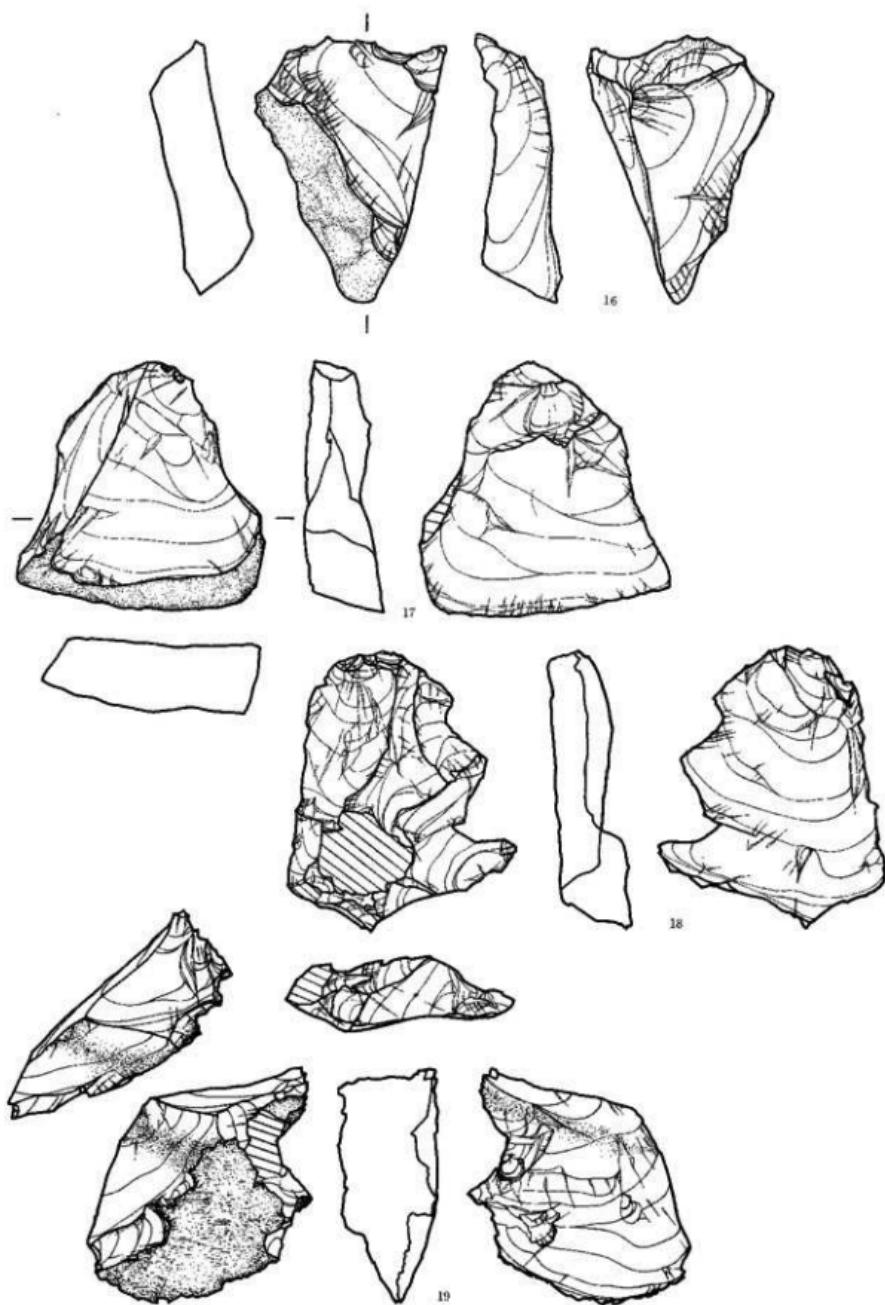


14

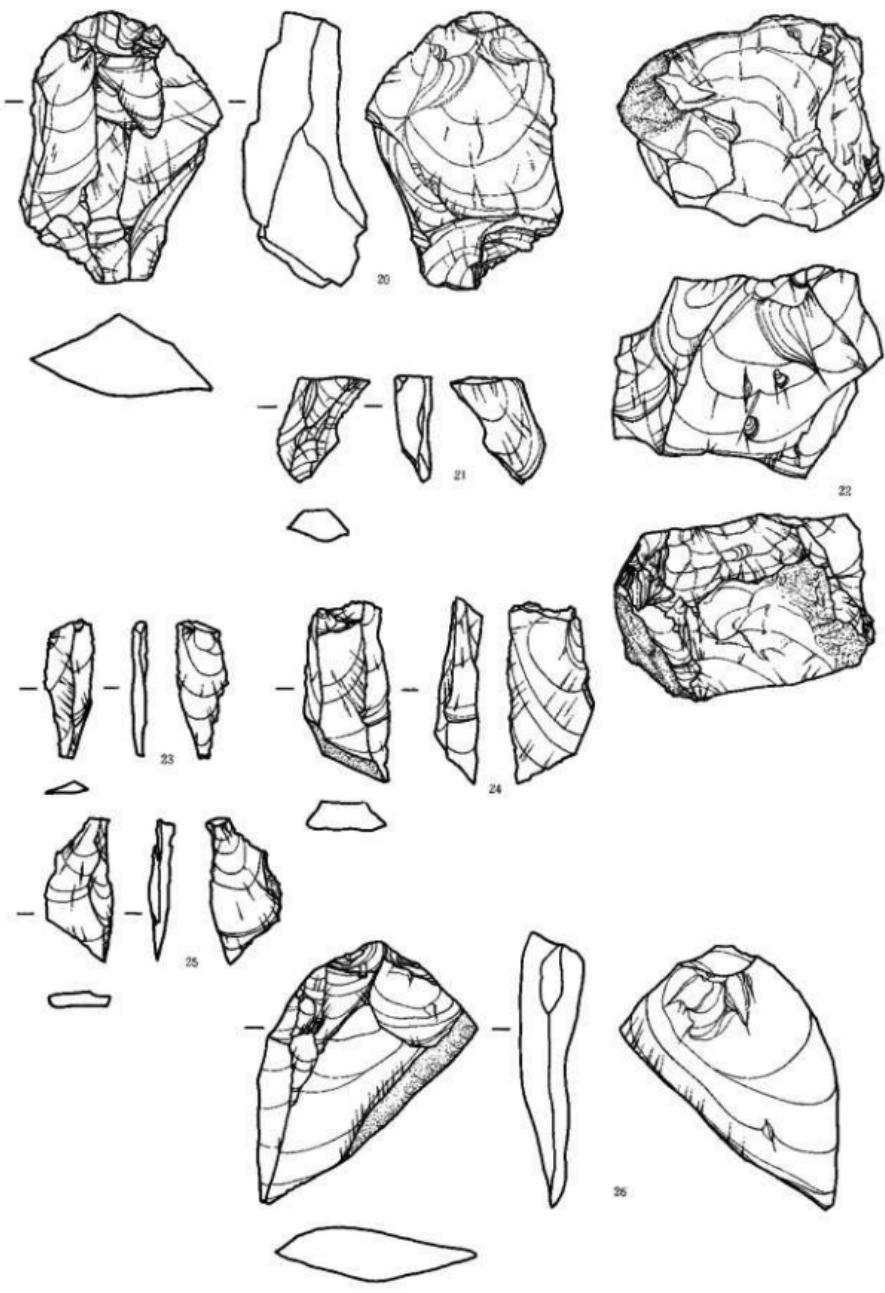


15

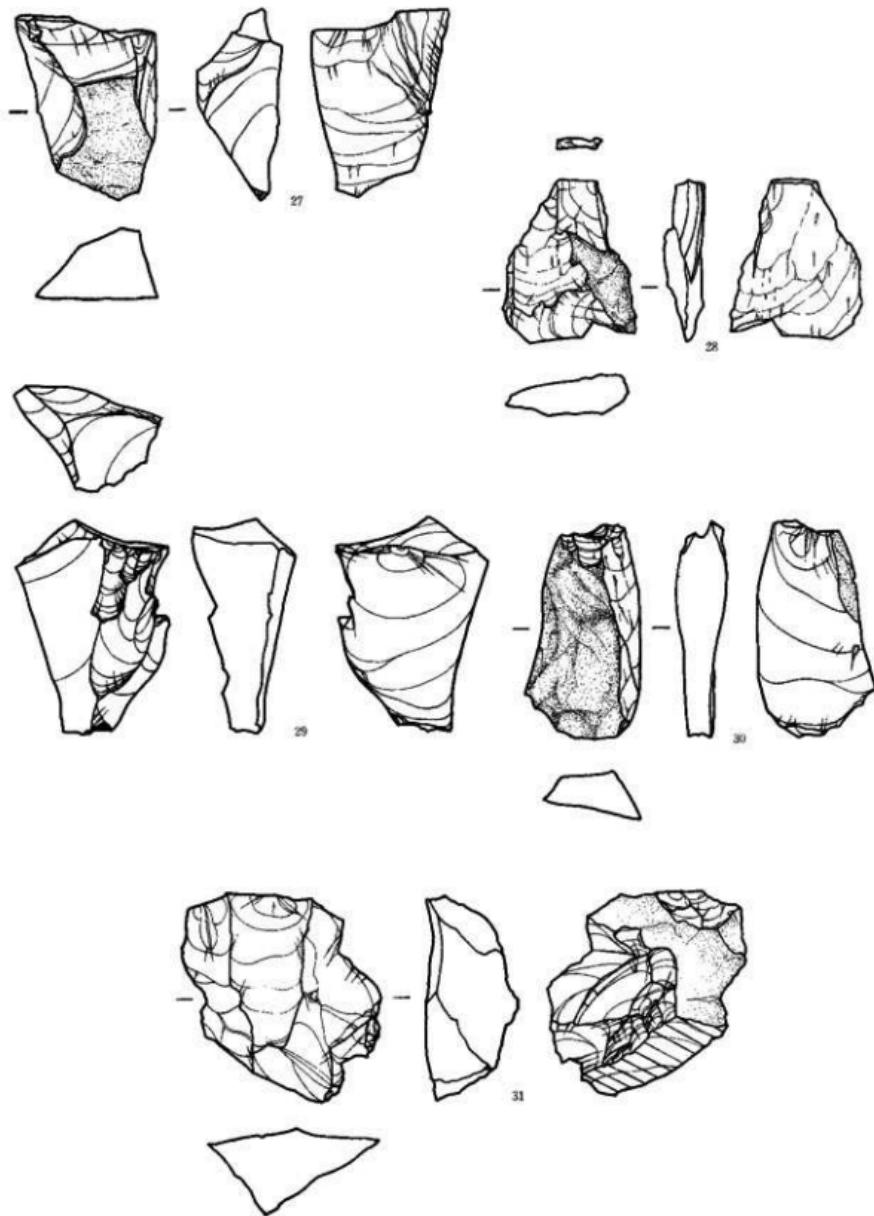
第28図 第5層出土遺物 (Scale; 1/4)



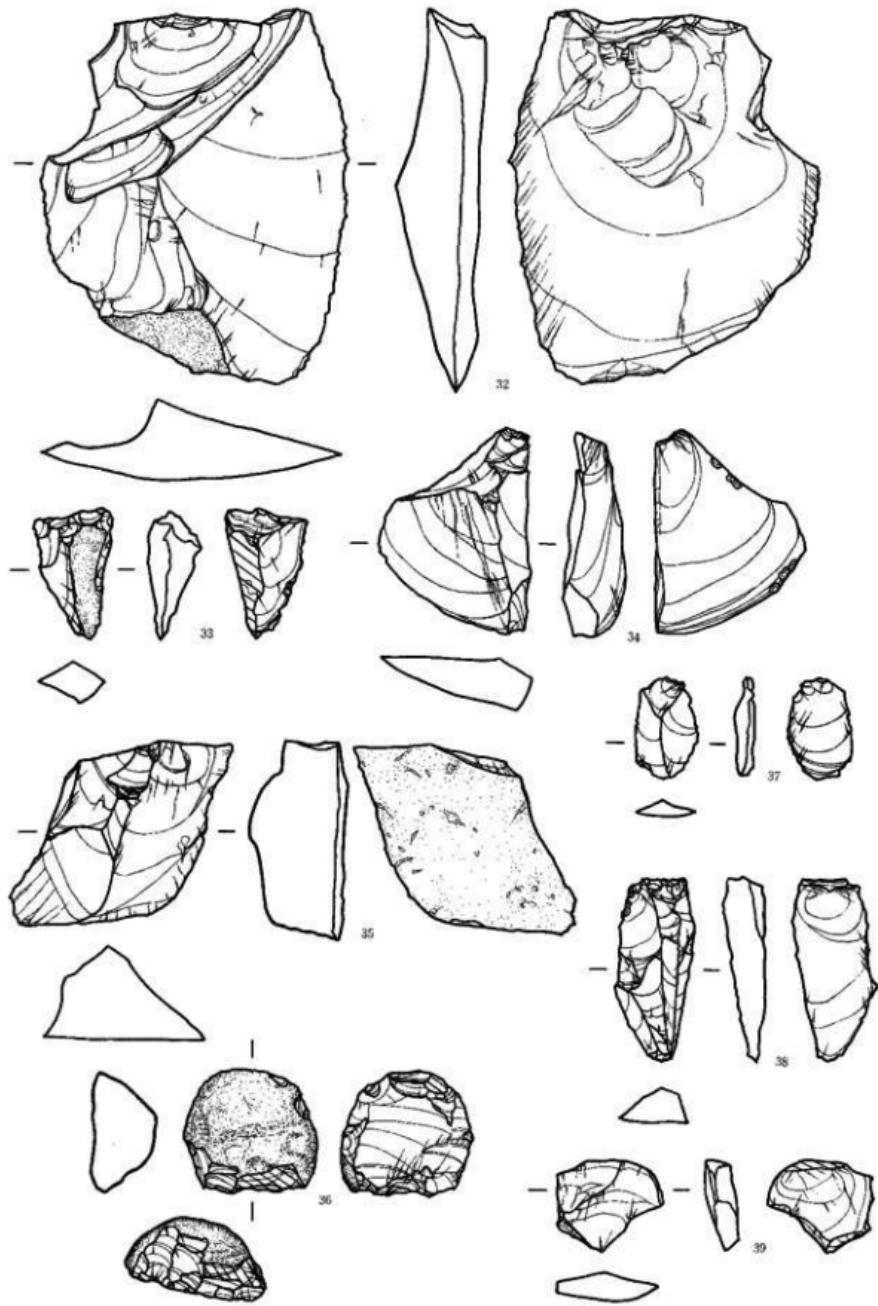
第29図 第5層出土遺物 (Scale; 1/1)



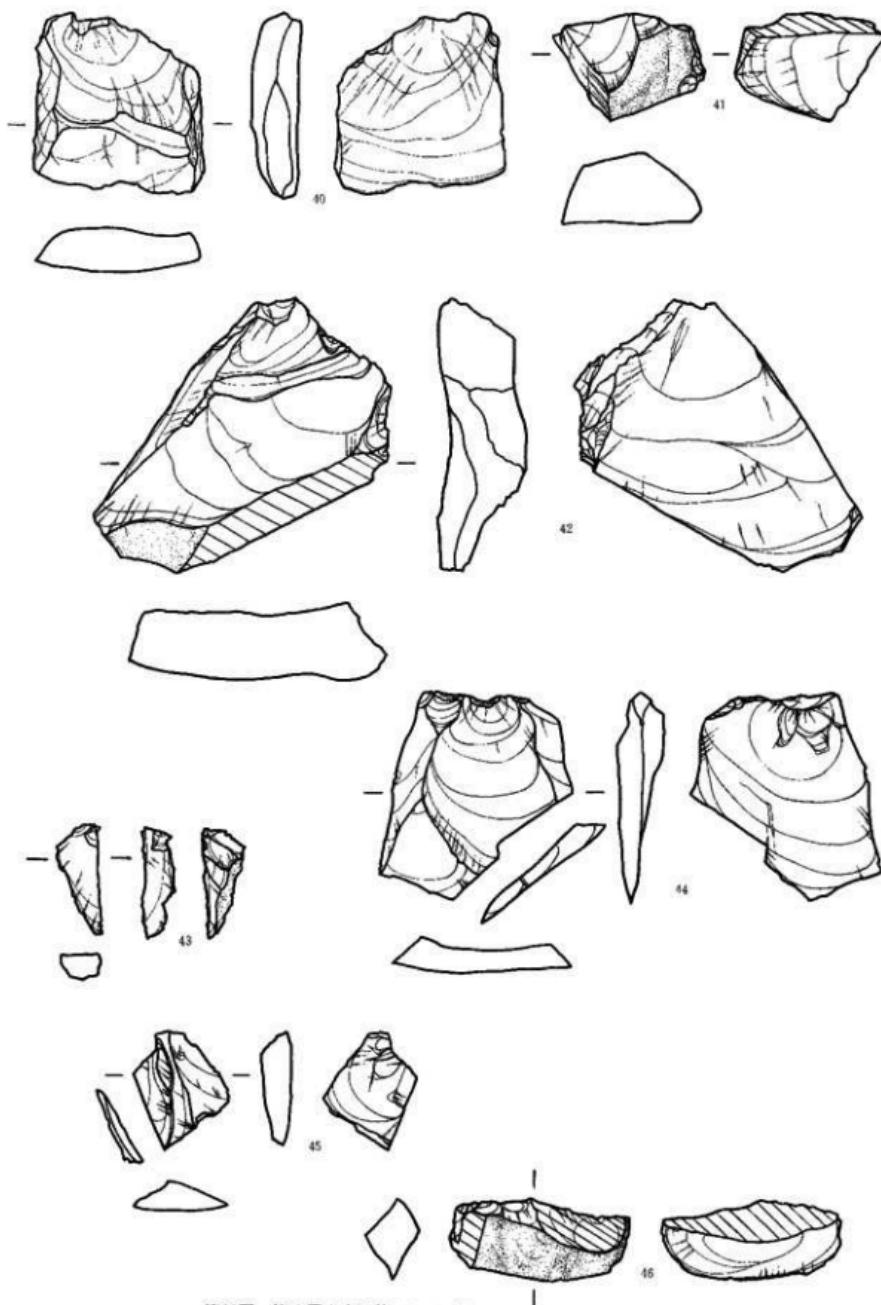
第30図 第5層出土遺物 (Scale: 1/4)



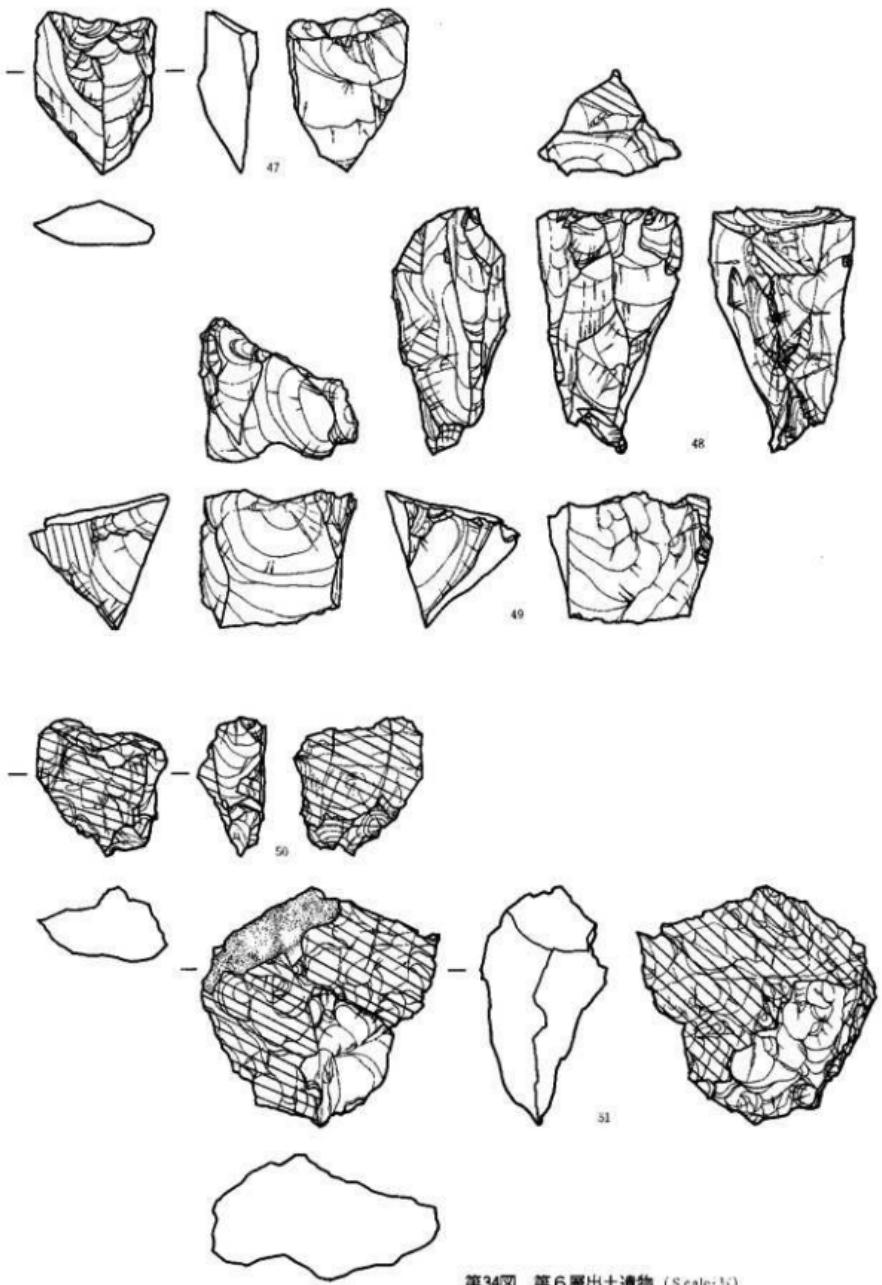
第31図 第5層出土遺物 (Scale; 3)



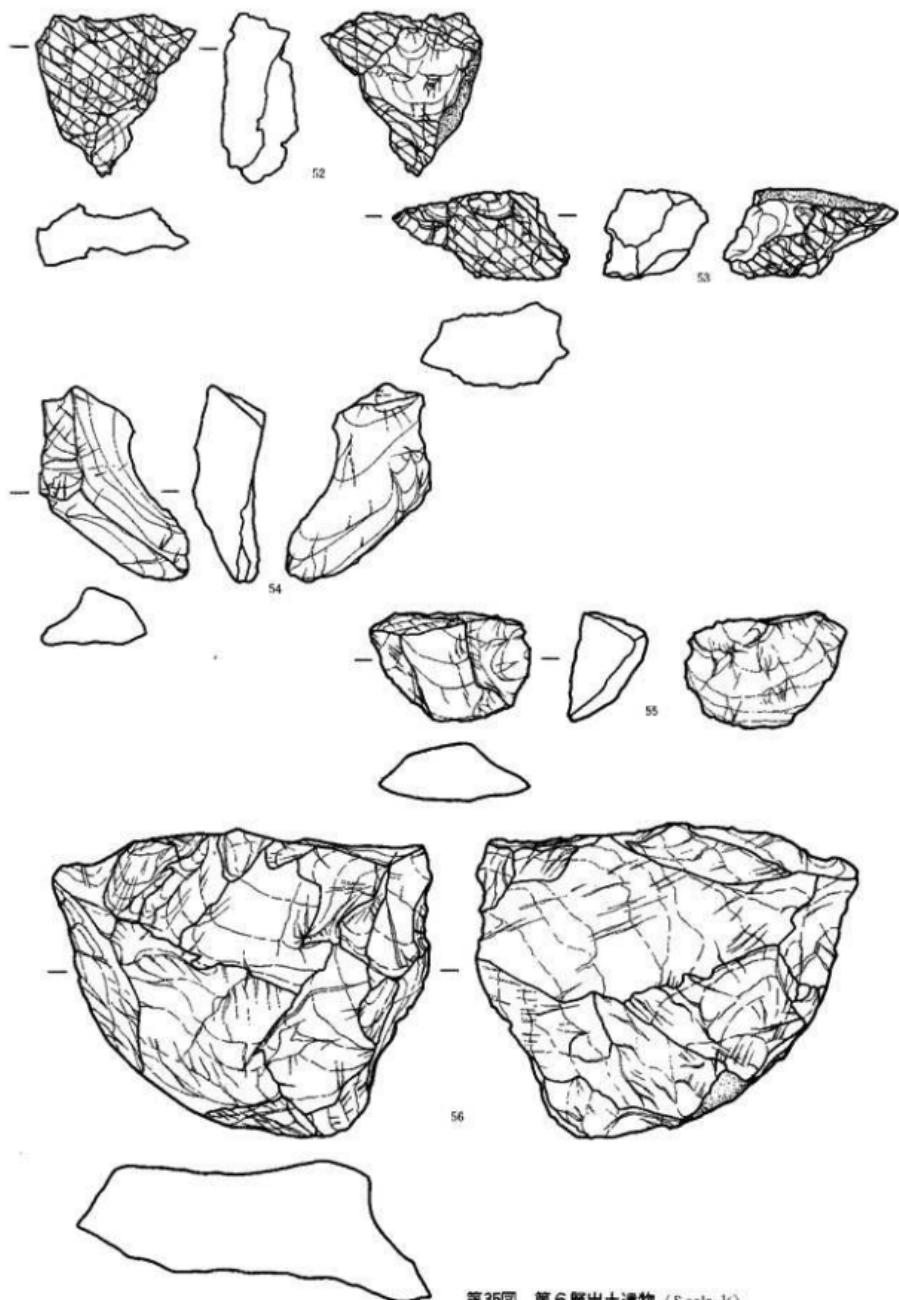
第32図 第6層出土遺物 (Scale; 1/4)



第33図 第6層出土遺物 (Scale: 1/2)

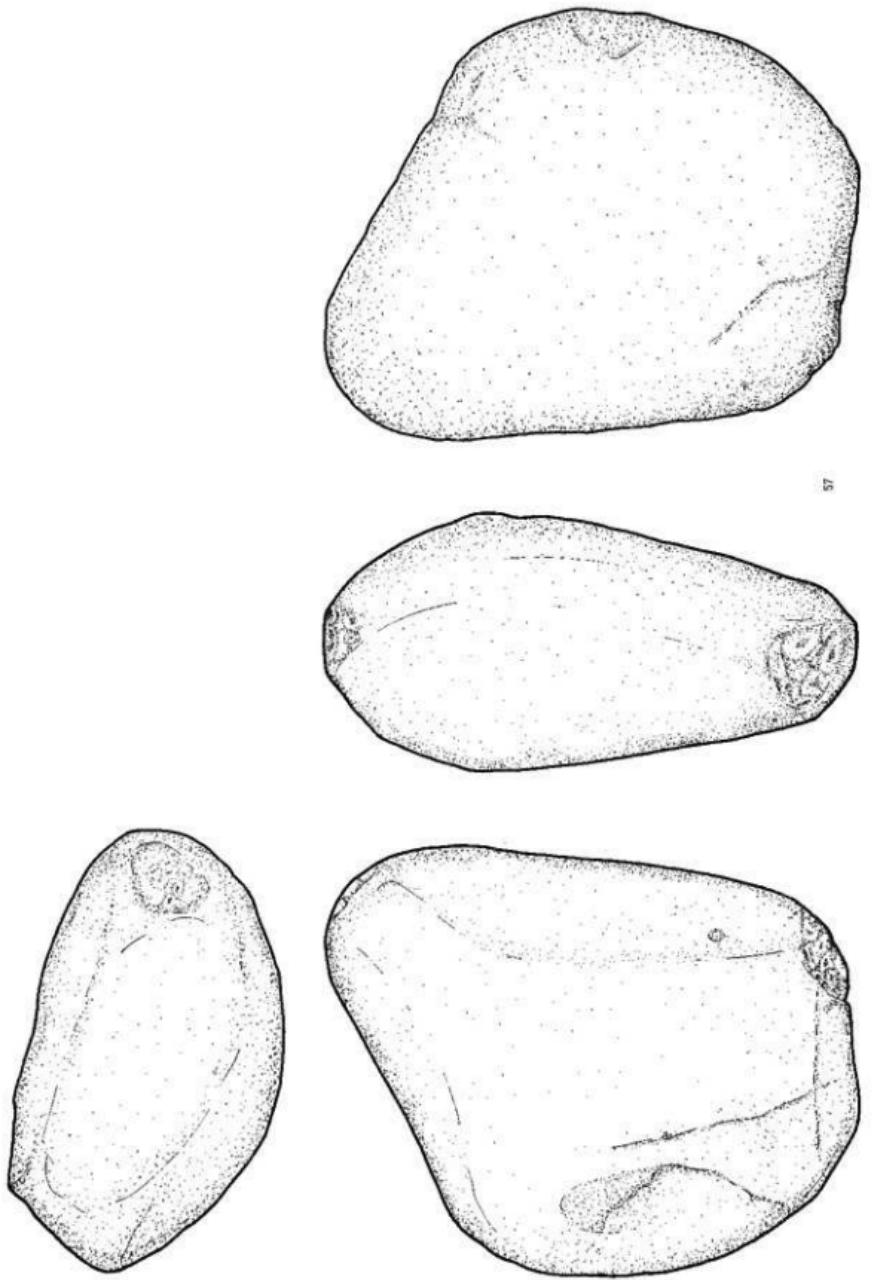


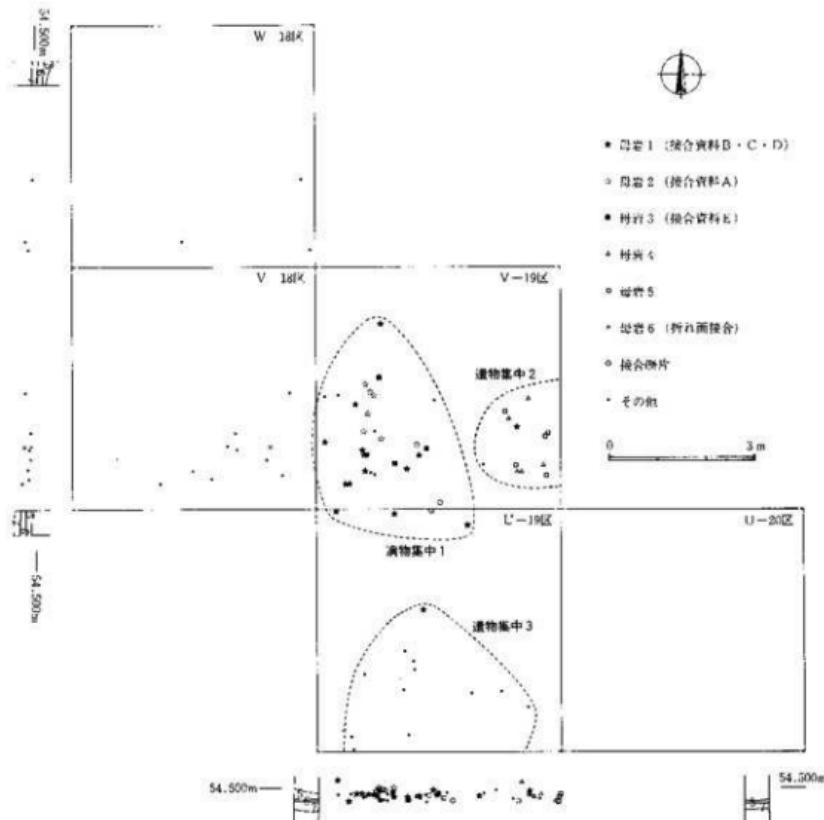
第34図 第6層出土遺物 (Scale; 1/2)



第35図 第6層出土遺物 (Scale; 1/2)

第36圖 第5層出土石器 (Scale : 1/2)





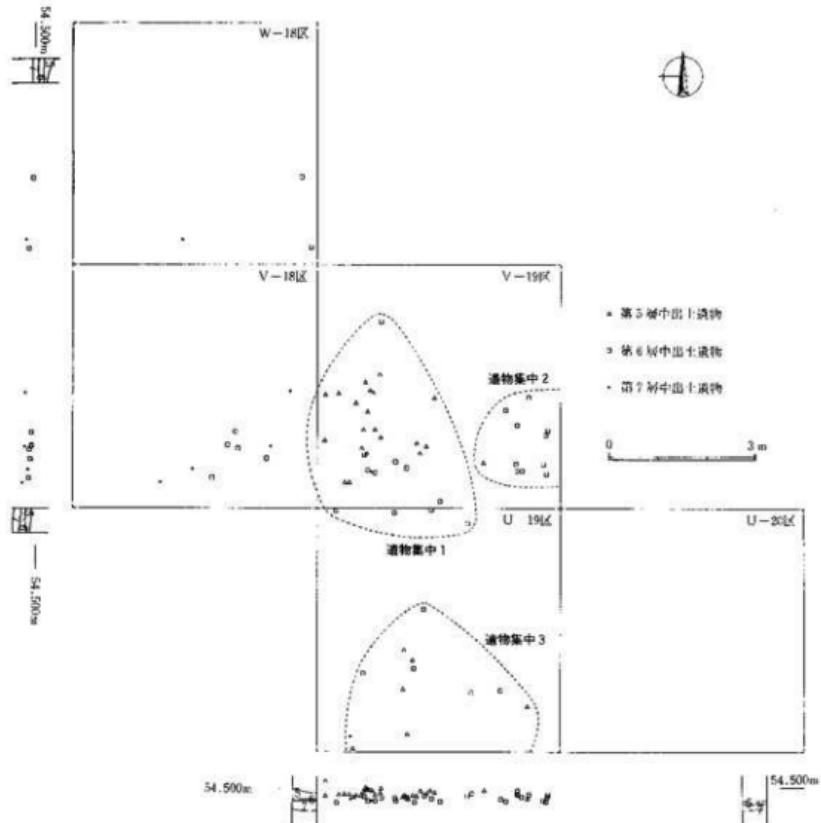
第37図 母岩別分布図

いことが読みとれる。また、遺物集中2は鉄石英の資料を1点含むものの、非常に単純な石質構成を示している。以上の点から、遺物集中1・2・3は、母岩別にみると独立した傾向をもつていていることがわかる。

#### (第7層)

第7層からは、W-18区で1点、V-18区で4点、V-19区で1点、U-19区で1点の合計7点の石器が出土しているが、明瞭な遺物集中部は形成しない。二次加工ある剝片1点(第39図58)、微細剝離痕を有する剝片1点(第39図59)、碎片1点の他はすべて剝片である。第39図61と62は折れ面で接合する。これ以外の資料で同一母岩と思われる資料は認められない。

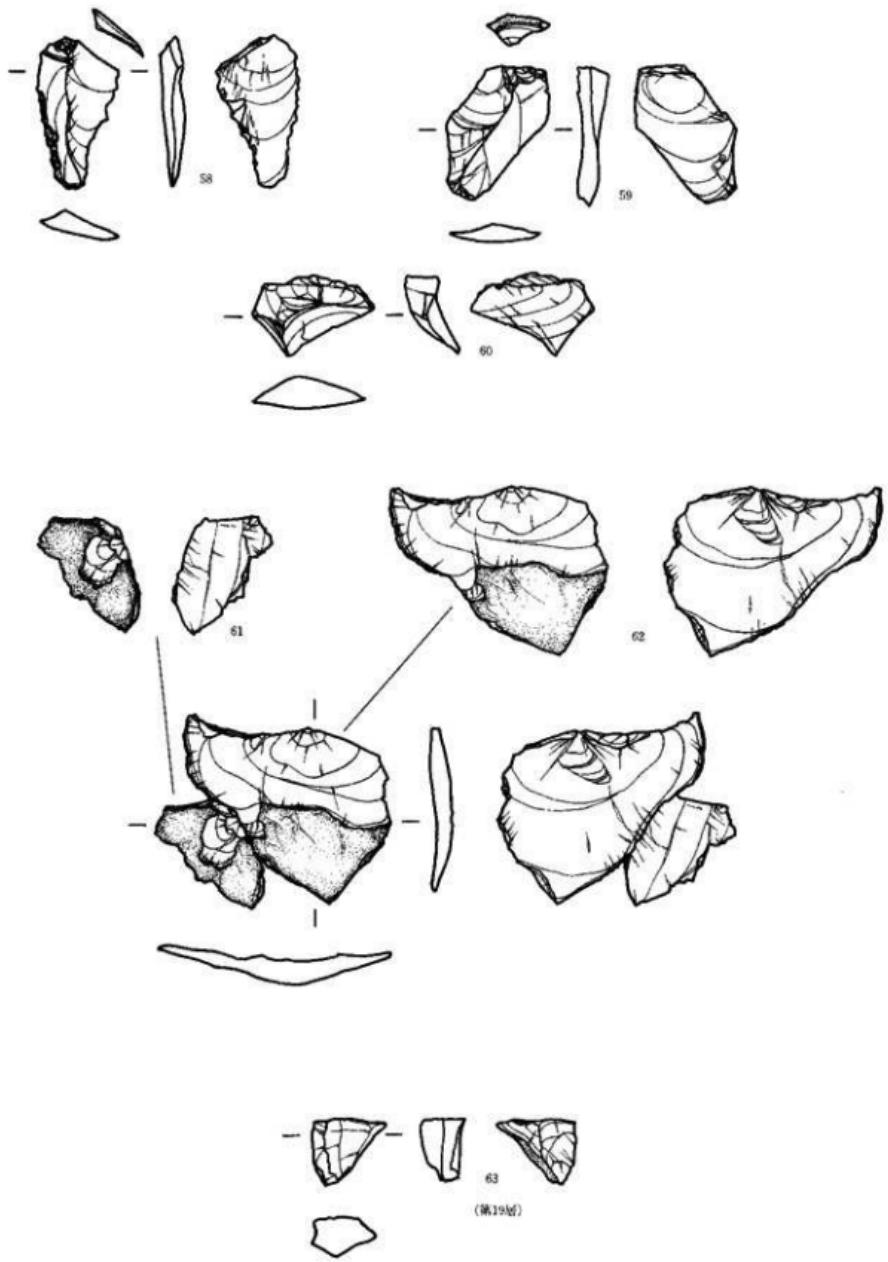
#### (第19層)



第38図 第5層・第6層・第7層出土遺物平面分布図

V-18区から1点の石器が出土している(第39図63)。今回の調査で、川崎スコリア層よりも下位から得られた唯一の資料である。第19層は、本来、礫を時おり含む層であるが、それらの礫とはまったく異なる石質で、珪質凝灰岩製の剥片である。

以上、各層出土の資料について述べてきたが、個々の石器についての記載は、属性表との重複を避けるため、2・3の資料を除きほとんど行なっていない。属性表を第5~7表に示したのでそれを参考にしていただきたい。



第39図 第7層出土遺物、第19層出土遺物 (Scale; 1/2)

第5表 石器属性表1 (Tool, 磨石等)

%	出土区	年代層	石器名	石種	長 mm	幅 mm	厚 mm	重量 (g)	取上 基準	解 説
5	V-19	第2層	石錐	珪化した 成岩の質硬岩	26.5	12.6	3.9	1.0	137	馬頭鉢は含まない。
9	U-19	第4層	石錐	珪化した 成岩の質硬岩	25.2	10.2	11.3	11.2	15	ツイントルフ
26	W-5	第6層	石錐	珪化した 成岩	21.9	22.8	10.4	6.0	74	石材は質硬利確によって下削された可能性あり。
37	V-19	第5層	石錐	珪化した 成岩	26.4	26.3	6.7	38.2	70	個体数

第6表-1 石器属性表2-(1) (Flake等)

%	出土区	小土器 層	石器名	石種	長 mm	幅 mm	厚 mm	重量 (g)	石器の 形態	打留痕(バブル) の形状	用途の 基準	解 説	
1	V-19	成岩本体 のある部分	片狀	質硬岩	48.5	25.5	10.6	13.7	鈍刃	20.9	7.5	s F 7	
2	J-32	1 成岩本体 のある部分	片狀	質硬岩	28.5	34.2	9.7	9.4	鈍刃	17.7	8.2	s F 17	
3	*	成岩本体 のある部分	片狀	質硬岩	15.9	30.5	6.6	2.3	鈍刃	-	-	s H, f 15	
4	V-19	成岩本体 のある部分	片狀	質硬岩	23.6	22.1	7.1	4.0	-	-	d	F 8	
6	L-19	第4層	片狀	質硬岩	31.5	28.8	3.8	3.0	鈍刃	7.3	3.2	s H, f 24	
7	*	*	片狀	質硬岩	25.4	14.3	7.1	2.0	鈍刃	10.1	6.9	s H, f 22	
8	*	*	片狀	質硬岩	21.2	37.9	8.0	4.3	-	-	-	H, f 23	
10	*	*	片狀	質硬岩	22.0	16.2	2.4	0.7	鈍刃	5.0	2.1	s H, f 18	
11	*	*	放倒剥離面 のある部分	片狀	質硬岩	21.5	27.5	9.9	4.3	鈍刃	12.6	6.5	s H 16
12	V-19	第5層	片狀	質硬岩	18.9	49.2	21.1	15.1	鈍刃	18.2	16.2	s F 25 結合部A 付近2	
13	*	*	鈍刃	片狀	質硬岩	28.3	18.3	14.1	3.6	鈍刃	17.4	12.0	s S, f 69 結合部A 付近2
14	*	*	鈍刃	片狀	質硬岩	43.9	28.2	13.7	11.0	-	-	-	10 結合部A 付近2
16	*	*	鈍刃	片狀	質硬岩	46.6	31.1	12.2	13.9	-	-	-	12 結合部A 付近2
17	*	*	鈍刃	片狀	質硬岩	44.7	42.2	12.2	22.7	鈍刃	13.0	8.0	s F 14 母心2
18	*	*	鈍刃	片狀	質硬岩	46.4	40.4	11.7	17.9	鈍刃	4.0	2.1	s H, f 166 結合部C 付近2
19	*	*	鈍刃	片狀	質硬岩	38.3	37.9	17.6	24.7	-	-	-	11, f, 20 母心1
20	*	*	鈍刃	片狀	質硬岩	49.8	33.2	20.5	27.1	鈍刃	10.8	10.5	s F 13 結合部B 付近2
21	*	*	鈍刃	片狀	質硬岩	19.2	15.6	5.8	1.1	鈍刃	12.2	5.5	d U 164 結合部B 付近2
23	*	*	鈍刃	片狀	質硬岩	24.2	5.4	2.8	0.4	鈍刃	7.3	2.4	s F 77 結合部E 付近2
24	*	*	鈍刃	片狀	質硬岩	31.9	14.5	5.3	2.6	鈍刃	12.2	4.2	s F 78 結合部E 付近3
25	*	*	鈍刃	片狀	質硬岩	26.1	11.9	2.5	0.8	鈍刃	3.5	2.9	s H, f, 92 結合部E 付近3
26	*	*	鈍刃	片狀	質硬岩	49.1	33.5	10.5	10.5	鈍刃	13.9	9.6	s H, f 166
27	*	*	鈍刃	片狀	質硬岩	31.2	24.4	13.5	6.2	-	-	-	11, f, 34
28	J-19	*	鈍刃	片狀	質硬岩	28.0	22.8	7.1	3.7	鈍刃	8.4	2.2	s S, f, 49
29	*	*	鈍刃	片狀	質硬岩	27.2	36.7	17.9	11.2	鈍刃	26.7	17.9	d H, f, 23
30	*	*	鈍刃	片狀	質硬岩	37.8	20.2	8.4	6.4	鈍刃	-	0	s H, f, 43

第6表-2 石器属性表2-(2) (Flake器)

No.	出土年	出土地名	石器名	石	長 (mm)	寛 (mm)	厚 (mm)	重量 (g)	打面 数	打面幅 (mm)	打面深 (mm)	打面形 状	尖端の 形状	尖端の 形状	取上 番号	備考
32	V-18	第6層	剥離	青灰質凝灰岩	66.1	52.3	14.7	34.5	28.0	32.8	10.2	s	l	—	6	
33	*	*	剥離	青灰質凝灰岩	22.1	14.7	11.0	2.1	20	14.9	10.7	d	H, f	—	4	
34	W-18	*	剥離	青灰質凝灰岩	34.6	32.9	9.9	7.2	3	5.6	2.7	d	H, f	173		
37	U-19	*	剥離	青灰質凝灰岩	17.3	11.0	2.5	0.4	剥離	3.4	0.6	s	H, f	—	54	
38	V-19	*	剥離	片理質頁岩	32.2	13.0	6.9	2.9	剥離	10.1	6.2	s	F	—	64	
39	V-18	*	剥離	片理質頁岩	16.2	18.9	4.8	1.5	剥離	11.7	4.1	s	—	—	9	
40	V-19	*	剥離	片理質頁岩	35.1	30.2	7.7	6.9	—	—	d	H, f	—	76	石器を含む 器物5	
41	*	*	剥離	片理質頁岩	26.7	23.0	13.0	6.6	—	—	—	—	F	—	39	器物4
42	*	*	剥離	片理質頁岩	40.5	56.1	12.1	30.1	—	—	d	F	—	29	器物4	
43	*	*	剥離	片理質頁岩	36.8	33.0	6.3	0.6	剥離	21.2	5.5	s	—	—	86	没収資料B 器物3
44	V-18	*	剥離	片理質頁岩	19.4	7.2	4.9	5.4	—	—	—	—	F	—	2	
45	V-18	*	剥離	片理質頁岩	20.8	16.0	4.9	1.4	—	—	d	S, f	—	89	器物4	
46	*	*	剥離	片理質頁岩	14.1	31.4	9.2	3.1	剥離	3.2	9.0	s	H, f	—	28	器物4
47	*	*	剥離	青灰質岩	29.3	21.2	16.0	4.6	剥離	20.5	8.2	s	F	—	66	結合資料B 器物2
50	*	*	剥離	片理質岩	34.1	22.6	11.8	5.6	—	—	—	—	—	—	37	結合資料B 器物2
51	*	*	剥離	片理質岩	41.3	42.9	20.8	28.6	剥離	36.0	18.0	d	H, f	—	36	結合資料B 器物1
52	U-19	*	剥離	片理質岩	28.7	29.7	13.2	7.0	—	—	—	—	—	—	38	結合資料B 器物1
53	*	*	剥離	片理質岩	6.7	31.1	14.6	7.1	—	—	—	—	—	—	46	結合資料B 器物1
54	V-19	*	剥離	片理質頁岩	33.5	35.7	19.3	4.6	剥離	16.1	7.6	d	H, f	—	77	石器を含む 器物5
55	*	*	剥離	片理質頁岩	19.3	25.3	12.0	4.5	剥離	28.7	11.7	d	H, f	—	51	石器を含む 器物5
56	V-18 第7層	二段目下の A面	剥離	青灰質凝灰岩	26.5	11.3	3.6	1.2	—	—	—	—	F	—	32	
59	*	*	剥離	青灰質凝灰岩 のある剥離	24.4	19.1	5.5	1.4	剥離	11.1	9.4	s	F	—	57	部分的に瓦築
60	W-18	*	剥離	青灰質凝灰岩	16.9	21.2	6.4	1.2	剥離	17.9	6.2	d	F	—	175	
61	V-18	*	剥離	青灰質凝灰岩	12.5	23.8	2.8	9.9	—	—	—	—	S, f	—	33	器物6
62	*	*	剥離	青灰質凝灰岩	30.3	40.3	4.4	6.5	剥離	35.8	7.6	s	S, f	—	31	器物6
63	*	第19層	剥離	青灰質凝灰岩	11.5	13.8	7.3	9.9	—	—	—	—	—	—	172	

(凡例)

- No.の番号は石器の実測図・写真に付された番号と一致する。
- 「長」「幅」の計測法は「北前造跡発掘調査報告書」と同様に、林謙作(芥沢他 1970) の方法に準ずる。
- 「厚」はその個体の最も厚い部分である。
- 「打面の状態」では自然面打面を「自」、節理面打面を「節」、剥離面打面を「剥」、調整面打面を「調」と表し、「調」の後の数字は調整面の数を示す。
- 「打面幅」は打面の両極を結ぶ直線の計測値である。
- 「打面厚」は打面の両極を結ぶ直線と直交する方向での最大値である。
- 「バルブの形状」は diffused bulb (不明瞭なバルブ) 、 salient bulb (明瞭なバルブ) とに区別し、それぞれd, sで表わす。
- 「末端の形状」はフュザーエンドをF、ビンジフラックチャーをH, f.、ステップフラックチャーをS, f.と表わす。
- 「取上番号」は調査時点での登録番号である。

第7表 石器属性表3(石核)

編 號	地 點	層 位	石 質	長 (mm)	寬 (mm)	厚 (mm)	重 量 (g)	形 狀	存 在 地 點	取 樣 面 積	備 考
15 V-19	苗	6	磨	56.3	52.3	30.5	82.6	刮	片	2	67
22 *	*	*	鐵	46.8	32.6	39.1	53.1	粗	刮	2	80
31 *	*	*	鐵	41.5	35.1	35.7	55.1	刮	片	1	68
35 V-18	苗	6	磨	57.7	39.9	32.5	17.1	刮	片	1	3
40 U-19	*	*	鐵	42.5	34.9	24.9	43.5	粗	刮	2	128
49 V-19	*	*	鐵	31.2	22.6	21.9	16.9	不	明	5	83
56 *	*	*	泥	65.6	55.6	22.8	80.6	不	明	2	59

## 第VII章 花粉分析

竹内貞子

(森藤報恩会自然史博物館)

山田上ノ台遺跡および北前遺跡は、仙台市南西部の名取川左岸に発達する段丘上に位置している。これらの遺跡周辺の当時の自然環境と時代を明らかにするために、遺跡発掘トレンチ壁面の泥土および基盤の段丘礫層の花粉分析を行った。

### 1. 試料採取

上ノ台遺跡では、U-18区西壁面およびW-19区南壁面から試料を採取するとともに、下位の段丘礫層からも採取した。北前遺跡では、基盤の段丘礫層から試料を採取した。

### 2. 分析方法

花粉分析の処理はKOH-HF-アセトトリシス法により、以下に示す手順で行ったが、花粉の含有量が少なかったため、アセトトリシス法以外はビーカー内で行った。砂礫はあらかじめ水洗いによって粗粒砂および礫を取り除いておいた。

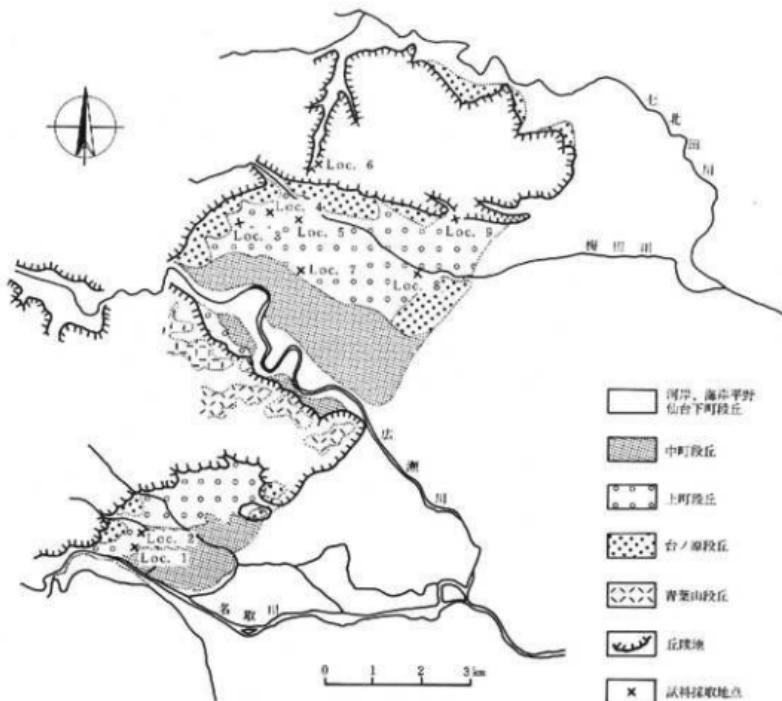
適量の試料を1000ccポリビーカーにとり、10%水酸化カリウム溶液を加え一昼夜放置したのち、上澄みをすてた。沈殿法で水洗いを行ったのち、10%塩酸を少量加えてから45%沸騰水素酸を加えて一昼夜放置した。沸騰水素酸をすて10%塩酸を加えて更に一昼夜放置した。上澄みをすてポリ遠心管に移し、遠心分離器で4回水洗いを行った。水酢酸を加え遠心分離を行ったのち、濃硫酸1：無水酢酸9の混合液を加え10分間湯煎して水酢酸で処理した。遠心分離器で4回水洗いをしたのちプレパラートを作った。

検鏡にあたっては樹木花粉が200個になるまで数えたが、山田上ノ台遺跡発掘トレンチの壁面の試料については200個数えるまでにいたらなかった。

### 3. 花粉分析の結果

山田上ノ台遺跡のU-18区西壁とW-19区南壁より採取した試料はそれぞれ基本層序（仙台市教育委員会・本間物産株式会社、1981）の第4層から第33層までと第3層から第33層までであるが、両壁面とも上部第19層までは花粉が検出されなかった。第20層から下位には花粉が含まれていたが、含有量は非常に少なく、百分率であらわすまでにはいたらなかった。第8表に検出された花粉の種類を示してある。

全体としてスギ属の花粉が多く、全層準から安定して出現する。ヒノキを中心とするヒノキ科-イチイ科、マツ属、ケヤキ属も、ばらつきはあるが比較的多い。U-18区西壁、W-19区南壁とともに、第33層の礫層は上部の粘土層に比べて、含有花粉の種類が多く量も多いが、なかで

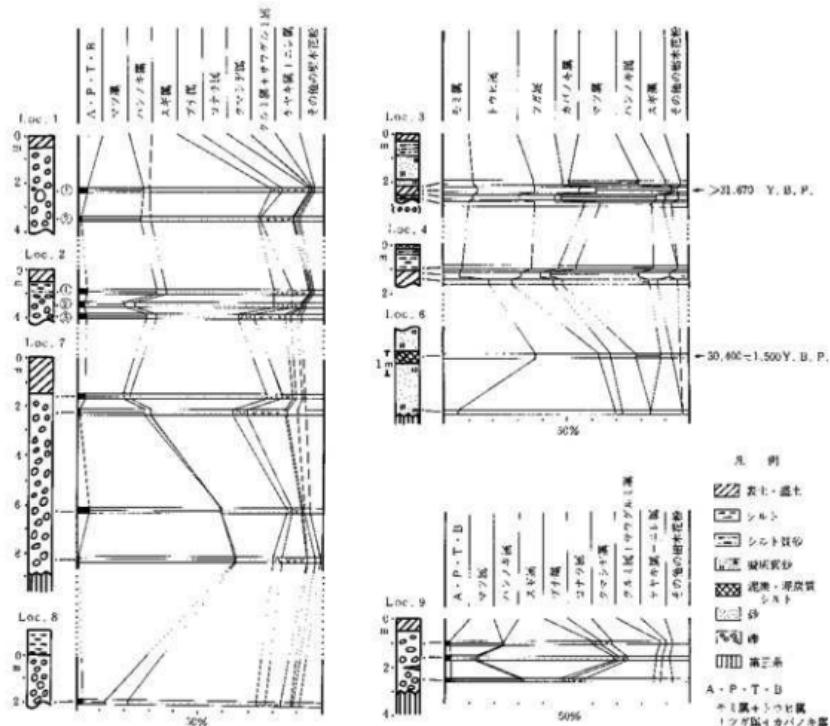


第40図 仙台付近の段丘の分布と試料採取地点を示す図

もスギ属の量が多いのが目立つ。

山田上ノ台遺跡発掘地点わき（第40図Loc.1）の露頭と北前遺跡発掘地点わき（第40図Loc.2）の露頭で採取した、基盤の段丘礫層の花粉分析の結果は第9表に示した。また主要花粉の出現率については、第41図の花粉ダイアグラムに示した。第41図の花粉ダイアグラムは、樹木花粉の総数を基準とする百分率で示してある。

山田上ノ台遺跡わき（第40図Loc.1）の露頭の礫層に含まれる花粉化石は、草本類の花粉や胞子に比べて樹木花粉の割合が比較的多い花粉組成を示し、樹木花粉のなかではスギ属、マツ属が多い。スギ属は40数%から50%を占め、次にマツ属が25%弱を占めている。これらのほかにコナラ属、ブナ属、ハンノキ属などもかなり多い。モミ属、クルミ属、ケヤキ属、クマシデ属、ヤナギ属、カバノキ属なども量は少ないが安定して出現している。草本類ではイネ科の割合が多く、ヨモギなどのキク科やシダの胞子もかなり多い。



第41図 主要花粉ダイアグラム

北前遺跡わき（第40図 Loc.2）の露頭の疊層も山田上ノ台の疊層とほぼ類似の花粉組成を示している。スギ属は下部でやや低率であるが上部では高率となり、マツ属も20%から30%を占めている。そして上ノ台と同様、コナラ属、ブナ属、ハンノキ属、モミ属、クルミ属、ケヤキ属、クマシデ属などを伴うほか、下部でトチノキ属がかなり含まれているのが目立つ。草本花粉に対する樹木花粉の割合が、上ノ台に比べて若干多いこと、アカザ科と同じ傾向を示していること、ナデシコ科が上ノ台には含まれるが北前には含まれず、フサモ属やツツジ科はその逆であることなど若干のちがいが認められる。

#### 4. 段丘構成層堆積時の自然環境

山田上ノ台遺跡と北前道路は仙台市南西部の名取川流域に発達する段丘上で、ほぼ200mはなされた場所に位置している。川崎町の方から丘陵地の間に沿って東流してきた名取川が、右岸は相変らず高館山の丘陵地の麓にそいながら、左岸で丘陵地が切れたところにあたっている。

遺跡所在地を中心にして、東方には扇形に台地と平野が開けているが、北、西および南の三方は丘陵にかこまれた状態になっている。

上ノ台遺跡も北前遺跡も、遺物は段丘をつくる礫層の上位の粘土層以上から出土しているが、下位の礫層の堆積当時、すなわち古名取川がこのあたりに礫を堆積させ扇状地をつくっていた頃、遺跡周辺の丘陵地にはスギとマツが優勢で、コナラ属やブナ属を主とした温帯性落葉広葉樹を混じる林が発達していた。遠くの山腹にはモミ属やカバノキ属なども生えていたであろう。丘陵地の前面の台地はかなり開けた状態で、イネ科やキク科、シダ類などを主とする草地に、マツやスギ、ヒノキ、コナラ属やクルミ属、クマシデ属、ケヤキ属などが疎林をなしていた。そして、河岸にはハンノキやヤナギなどが生いしげていた。温暖湿润な海洋性気候に支配されていたと推定される。

礫層の上にのる粘土層は、第6文化層から第9文化層までの遺物を包含している。この粘土層からは、上ノ台ではスギ、マツ、ヒノキ、ケヤキ属などの花粉を産出している。北前遺跡での粘土層の含有花粉については不明であるが、礫層に含まれる花粉の種類が上ノ台とほぼ同じであることから、粘土層も上ノ台とほぼ同種の花粉を含むと考えてよいであろう。

従って、礫層堆積当時から粘土層堆積時にかけて、このあたり一帯の植生はあまり変化がなかったと考えられる。丘陵地は依然としてスギやマツを主とする針広混交林におおわれていた。しかし、堆積環境はかわり、扇状地をつくるような大量の砂礫の供給はなくなり、川は停滞しながら粘土層を堆積させていた。温暖な気候もそろそろ終りをつけ、この辺にも気候悪化の兆があらわれはじめたのかも知れない。

#### 5. 磨層および粘土層の堆積時代

仙台市の市街地を流れる広瀬川は、市の南東部・都心付近で名取川と合流する。この広瀬川の流域には市街地をのせる台地を中心に、第四紀更新世、完新世に形成された段丘がよく発達している。そして、これらの段丘は古期のもの（高位のもの）から青葉山段丘、台ノ原段丘、上町段丘、中町段丘、下町段丘に区分されている（川山 1933；中川ほか 1960、1961）。

名取川流域で、山田上ノ台遺跡および北前遺跡ののる段丘は、川山（1933）、中川ほか（1960、1961）によれば上町段丘である（第40図）。中田ほか（1976）はこれを台ノ原段丘に含めているが、その根拠は示されていない。

ここで、仙台市街地の上町段丘堆植物および台ノ原段丘礫層の花粉分析の結果についてみてみよう（第41図）（竹内 1982、M.S.）。

まず上町段丘堆植物についてであるが、仙台市街地の上町段丘分布地域の北西部では、礫層の上位に泥炭層ないしは泥炭質シルト層をはさんだシルト層および砂層が約2～3mの厚さでのっている。仙台市三条町の三条中学校校庭裏（第40図Loc.3）の崖で採取した試料について、

シルト層にはさまれた泥炭層の花粉分析の結果をみると、モミ属、トウヒ属、ツガ属、カバノキ属などの亜寒帯性樹種の花粉が樹木花粉全体のはば50%をしめ、マツ属も加えると90%前後となる。この泥炭層からチョウセンゴヨウマツの種子とカラマツ属およびトウヒ属の葉の化石を産していることから、産出するマツ属の花粉はチョウセンゴヨウマツを主とする五葉松型マツ属の花粉と考えられる。スギの花粉もわずかに出現しているが、全体として温帯性要素の花粉は少ない。この泥炭層の<sup>14</sup>C年代は $>31,670 \text{ Y.B.P.}$ (TH-682)と測定されている(Radio-carbon Dating Committee of Tohoku University, 1984)。

また、北山一丁目の道路わき(第40図Loc.4)の泥炭層の分析結果をみても、亜寒帯性樹種の割合が多く温帯性樹種の少ない花粉群集があらわれており、上記の結果と同様の傾向を示している。

七北田川の支流になるが、北仙台駅の北側の国道4号線の東側で現在は埋立てられてしまっている谷(第40図Loc.6)の一本杉植物化石層の<sup>14</sup>C年代は $30,400 \pm 1,500 \text{ Y.B.P.}$ の値を示しているが、花粉群集はやはりモミ属、トウヒ属、カバノキ属、五葉松型マツ属などの亜寒帯性樹種が多く、温帯性樹種の花粉はわずかである(Takeuti, 1962)。

板垣ほか(1981)によれば、北仙台駅の近く(第40図Loc.5)で礫層上位のシルト層下部に含まれる木材の<sup>14</sup>C年代が $26,240 \pm 1,360 \text{ Y.B.P.}$ と測定されている。

これらに対して段丘発達地域の南部では、礫層の上位には顯著なシルト層の発達はなく、主として礫層のみであり、あってもわずかに砂が薄くのるものである。

勾当台通りの北二番丁角(第40図Loc.7)ではボーリングの結果、盛土の下に約8m弱の礫層が認められる。この礫層はスキ属、マツ属が多く、コナラ属、ブナ属、クルミ属、ケヤキ属などを伴う花粉組成を示す。下部でマツ属が多く上部でスギ属が多く出現している。

仙台市北東部の清水沼(第40図Loc.8)では、礫層の上位に泥炭層をはさまないシルト層が発達しているが、この下部の礫層の花粉分析の結果は、上述のLoc.7の礫層の分析結果とほぼ類似の性質を示している。

そのほか2~3箇所の花粉分析の結果をみても、全体として礫層はスキ属、マツ属を中心とした温帯性の落葉広葉樹を混じる花粉群集で特徴づけられている。

次に、台ノ原段丘礫層についてみると、仙台市北東部の与兵衛沼わき(第40図Loc.9)における段丘礫層の含有花粉群集は、上町段丘礫層同様温帯性要素の優勢な花粉組成を示すが、ここではスギ属、マツ属についてクマシテ属、コナラ属、クルミ属、ケヤキ属、ブナ属などがありの割合で出現している。1箇所だけの資料であるが、上町段丘を構成する礫層に比べて針葉樹種の割合は減少しており、逆に広葉樹種の割合が増加しているのが目立つ(第41図)。

山田上ノ台および北前の段丘礫層と粘土層の含有花粉群集を仙台市北部の台ノ原段丘礫層お

より仙台市街地の上町段丘構成層の礫層部分の含有花粉群集とそれと比べると、その組成上の特徴は上町段丘構成層の礫層部分のそれによく似ている。従って上ノ台および北前の段丘堆積物と上町段丘構成層の礫層部分はほぼ同じ時期の堆積物であり、山田上ノ台および北前の段丘礫層は上町段丘堆積物と考えてよいであろう。

次に堆積時期の問題であるが、前述のように仙台市北部で上町段丘構成層上部のシルト層にはさまれる泥炭層の堆積時期が3万数千年B.P.から2万数千年B.P.の間を示すこと、また山田上ノ台で段丘礫層の上にのる火山灰中にはさまれる川崎スコリアの降下時期が、3万数千年B.P.より新しく2万数千年B.P.より古いと推定されている（板垣ほか 1981）ことから、これらの礫層の堆積時期はそれより古い時期と考えられる。また、台ノ原段丘礫層は最終間氷期の堆積物とされている（中川 1961）ので、それより新しい時期になる。

いっぽう含有花粉群集から温暖な気候が推定され、その時期は約4万数千年前から約3万数千年前の、世界的に知られている「ゲトワイゲル亜間氷期」と推定される。

## 文 献

- 板垣直義・豊島正幸・寺戸恒夫（1981）：仙台およびその周辺地域に分布する洪積巨末期のスコリア層  
東北地埋、第33巻、第1号、P.48～53.
- 仙台市教育委員会・本間物産株式会社（1981）：山田上ノ台地跡一発掘調査概報-. 仙台市文化財調査報告書第30集、  
P. 1～66.
- Takeuti, S. (1962) : Palynological Studies on the Pleistocene Sediments of Ipponmugi in the Northern  
Part of Sendai City, Japan. Tohoku Univ., Sci. Rept., 2nd Ser. (Geol.),  
Spec. Vol., no. 5, P. 275～277.
- 竹内貞子（1982）：花粉分析からみた仙台付近の低地段丘構成層の堆積時期について（予報）。日本地質学会東北支部  
会報、第12号、P. 9.
- 田山和二郎（1933）：北上山地の地形学的研究、其一河岸段丘、A、仙台近傍の河岸段丘、齊藤報告会学術報告、第17  
号、P. 1～83.
- 中川久夫（1961）：本邦太平洋沿岸地方における海水準静の変化と第四紀編年、東北大学理学部地質学生物学教室研  
究部文報告、第54号、P. 1～59.
- 中川久夫・小川貞子・鈴木義身（1960）：仙台付近の第四系および地形(1)、第四紀研究、第1巻、第6号、P.219～227.
- 中川久夫・粗馬寛吉・石川琢二・竹内（小川）貞子（1961）：仙台付近の第四系および地形(2)、第四紀研究、第2巻、  
第1号、P. 30～39.
- 中田 高・大坂義四郎・今泉俊文（1976）：仙台平野西縁・長町一帯府継に沿う新期地盤変動、東北地理、第28巻、第  
2号、P. 111～121.
- Radiocarbon Dating Committee of Tohoku University (1984) : Radiocarbon Dating Reports of Tohoku  
University No. 9. Sci. Reps. Tohoku Univ.,  
7th Ser. (Geogr.), Vol. 34, No. 2 P. 112

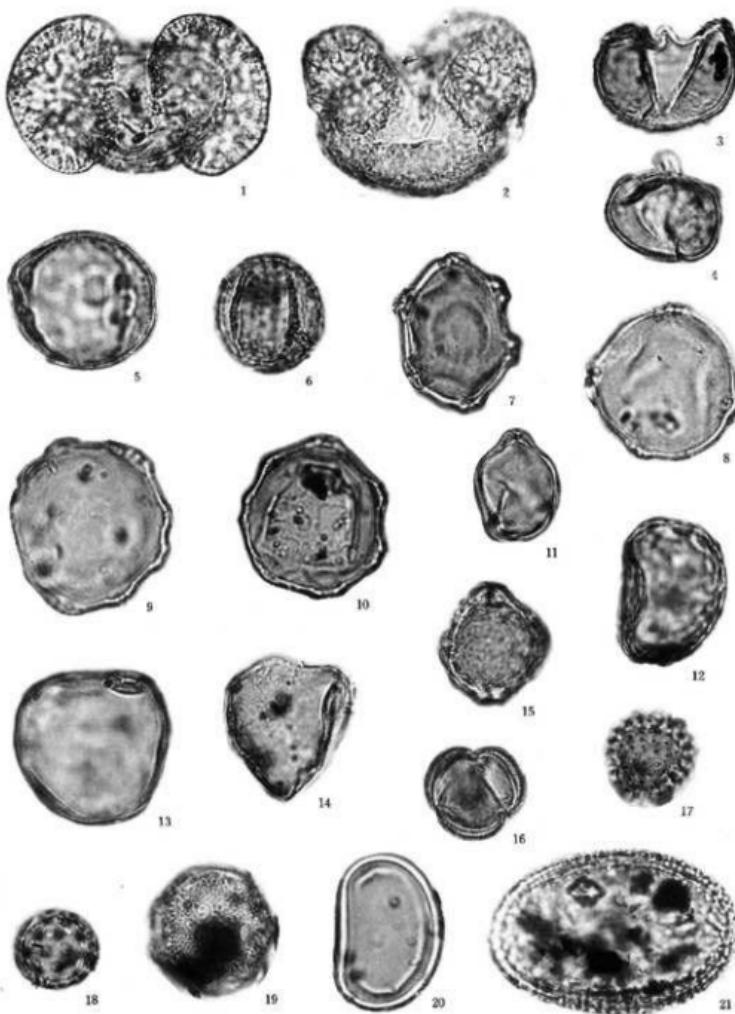
第8表 山田上ノ台遺跡出土花粉一覧表

U18区西壁一部		W19区南壁一部		セミ属		マツ属		コナラ属		ハシバミ属		スギ属		ヒノキ科—イチイ科							
20	21	20	21	21	27	29	30	31	32	33	34	35	36	37	38	39	40	41	42	43	44
+		+		+		+		+		+		+		+		+		+		+	

第9表 山田上ノ台(第40回Loc.1)および北前遺跡(第40回Loc.2)における段丘堆層の花粉百分率表

山田上ノ台遺跡		北前遺跡		カキ塚		北前遺跡		カキ塚		北前遺跡		カキ塚		北前遺跡		カキ塚		北前遺跡			
①	②	①	②	①	②	①	②	①	②	①	②	①	②	①	②	①	②	①	②		
1.94	731.3	0.3	0.3	3.5	6.1	-	1.6	0.3	0.3	-	0.6	0.3	0.6	-	-	0.6	-	0.3	0.6	-	0.6
0.418	0.320	1.5	1.5	1.5	9.2	0.4	2.9	0.4	1.1	0.4	1.1	0.7	0.7	0.4	0.7	-	0.4	-	1.1	0.4	9.2
0.823	0.035	1	2.4	-	5.6	6.0	-	3.2	2.0	0.4	-	0.4	0.4	0.4	-	-	0.8	-	0.8	0.4	-
0.512	241.3	2.6	-	5.5	2.6	1.5	3.0	1.5	0.7	-	0.4	1.5	0.4	-	-	-	-	0.4	12.2	0.4	0.7
0.516	241.2	-	3.8	8.3	0.9	2.6	1.3	1.7	-	1.5	-	0.9	-	-	1.3	3.2	0.4	-	0.4	17.9	-

図 版



## 図版説明

650倍

- 1：マツ属 U-18区西壁第31層  
 2：マツ属 北前遺跡わき礫層—②  
 3：スギ属 U-18区西壁第33層  
 4：スギ属 北前遺跡わき礫層—②  
 5：ブナ属 北前遺跡わき礫層—②  
 6：コナラ属 山田上ノ台遺跡わき礫層—②  
 7：ハンノキ属 山田上ノ台遺跡わき礫層—②  
 8：クマシテ属 山田上ノ台遺跡わき礫層—②  
 9：クルミ属 山田上ノ台遺跡わき礫層—②  
 10：サワグルミ属 U-18区西壁第30層  
 11：カバノキ属 山田上ノ台遺跡わき礫層—①  
 12：ケヤキ属 U-18区西壁第30層  
 13：イネ科 北前遺跡わき礫層—②  
 14：カヤツリグサ科 U-18区西壁第30層  
 15：フサモ属 北前遺跡わき礫層—②  
 16：ヨモギ属 山田上ノ台遺跡わき礫層—②  
 17：キク亞科 北前遺跡わき礫層—③  
 18：アカザ科 山田上ノ台遺跡わき礫層—②  
 19：ナデシコ科 北前遺跡わき礫層—③  
 20：シダ類胞子 山田上ノ台遺跡わき礫層—②  
 21：シダ類胞子 山田上ノ台遺跡わき礫層—①

## 第Ⅶ章 まとめ

最後に、今回の調査によって得られた成果と今後に残された課題とをあげ、本報告書のまとめとする。

今回の調査の大きな成果として、後期旧石器時代の接合資料が得られたことがあげられる。宮城県内では、石器文化談話会の精力的な踏査によって、127ヶ所の旧石器時代の遺跡が確認されている（石器文化談話会 1981）。しかし、これまで調査の行なわれた遺跡は数少なく、他時期の遺跡として発掘調査が行なわれた際に1点か2点の旧石器時代の石器が得られた遺跡を除けば、わずか9遺跡が調査されているにすぎない。そのためか、これまで旧石器時代に属する接合資料が得られた遺跡は、ほとんどなく、岩出山町安沢A遺跡のカッティングから採取されたスクレイバー2点が接合した例がある他、大和町中峯C遺跡で主に折れ面によって接合する資料が6例得られているだけである。今回の本遺跡の調査で5例の接合資料が得られたことは、今後、県内においても同様の資料が得られる遺跡が発見されることを予想させるものである。

また、これまでの県内の調査例では、旧石器時代の石器は、層理面に貼りつく様に、もしくは若干下層にくいこむ様な形で出土する場合が多く見うけられたようである。しかし、今回の調査によって、石器が層中からも出土する例があること、異なる層位から出土した石器が接合する例があることが明らかとなった。接合する資料で最も離れていたのは、平面で約4m、垂直的には約45cmの距離をもつものであった。このことから、前回の調査の際にとらえられた第1・第2文化層は同一の文化層としてとらえるべきである。

前期旧石器時代の石器は、今回の調査では1点しか得られなかった。このことは、前回の調査の際、U-18区及びW-19区から出土した前期旧石器時代の石器の面的ひろがりは、今回の調査区まではほとんど及ばないことを示すものである。今後は、今回の調査区外の隣接する箇所に調査区を設定し、U-18区、W-19区出土石器群の面的ひろがりを把握する必要がある。

本遺跡出土の前期旧石器時代の石器群と、昭和56年に北前遺跡から出土した石器群との新旧関係については、今回の調査では結論づけることはできなかった。しかし、「第Ⅰ章 1. 遺跡の位置と地形」にあるように、両遺跡間には明瞭な段丘崖は認められないで両遺跡の位置する段丘は同一段丘と考えられること、また土壤分析（第Ⅳ章）から、両遺跡の石器群が出土した層は周囲の支谷から凝灰岩由来の物質の供給をくり返して受けた形成された層であると推定されるので、若干離れた地点では堆積のあり方が異なることが考えられることから、現在のところ、両者にはそれほどの時間差はないものと理解しておくべきであろう。両者ともに石器群のまとまりが明らかになっていないので、今後の調査によってそれを明らかにし、その上での石器組成、石器製作技術等からの検討を行なわなければならない。

## 参考文献 (五十音順)

- 赤澤 威・小田静夫・山中一郎 (1980) : 「日本の旧石器」
- 泉市教育委員会 (1984) : 「泉市長崎遺跡現地説明会資料」
- 岡村道雄・鍵田俊昭 (1980) : 「宮城県北部の旧石器時代について」 (『東北歴史資料館研究紀要』第6巻)
- 小林行徳・佐原 真 (1964) : 「第四章 第一部 石器」 (『紫雲出』 諸間町文化財保護委員会)
- 後藤秀一 (1980) : 「金剛寺貝塚探集の斜片接合資料」 (『金剛寺貝塚 宇賀崎貝塚 宇賀崎1号墳他』 宮城県文化財調査報告書第67集 宮城県教育委員会)
- 石器文化該会 (1978) : 「座敷乱木遺跡発掘調査報告書I」
- (1981) : 「座敷乱木遺跡発掘調査報告書II」
- (1981) : 「(6) 宮城県」 (『旧石器時代の東北』 東北歴史資料館)
- (1983) : 「座敷乱木遺跡発掘調査報告書III」
- 石器文化該会・古川ロータリークラブ (1984) : 「古川市馬場塙A遺跡発掘調査現地説明会資料」
- 仙台市教育委員会・本間物産株式会社 (1981) : 「山田上ノ台遺跡I発掘調査概報」 仙台市文化財調査報告書第30号
- 仙台市教育委員会・仙台市富沢長町上地区面積理組合 (1981) : 「山口遺跡発掘調査報告書」 仙台市文化財調査報告書第33号
- 仙台市教育委員会 (1982) : 「北前遺跡発掘調査報告書」 仙台市文化財調査報告書第36号
- (1982) : 「仙台市山田上ノ台遺跡・北前遺跡の調査」 (『考古学ジャーナル』 No.206)
- (1984) : 「山口遺跡II」 仙台市文化財調査報告書第61号
- 多賀城市・多賀城市教育委員会 (1984) : 「志引遺跡発掘調査報告書」
- 東北大 (1984) : 「背瀬山B遺跡現地説明会資料」
- 東北歴史資料館・石器文化該会・古川市教育委員会 (1984) : 「馬場塙A遺跡II 第2次発掘調査現地説明会資料」
- 丹羽 康・菊地逸夫・小川 出 (1984) : 「宮城県中峰遺跡調査概報」 (『考古学ジャーナル』 No.233)
- 山中一郎 (1978) : 「森の宮遺跡出土の石器について」 (『森の宮遺跡第3・4次発掘調査報告書』)

写 真 図 版



写真1  
遺跡遠景(名取市大館より)  
撮影:五十嵐康洋



写真2  
発掘作業開始風景



写真3  
V-19区検出ピット群  
(東→西)

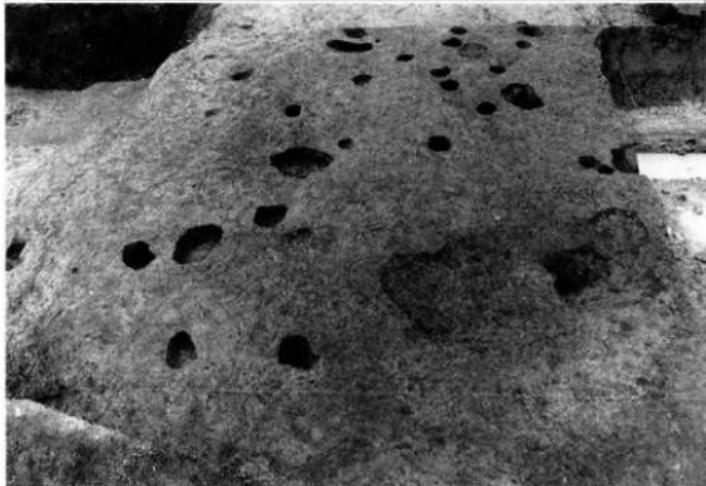


写真4  
U-20区風倒木痕完掘状況  
(南→北)



写真5  
遺物出土状況(第5層)  
No. 26及び7

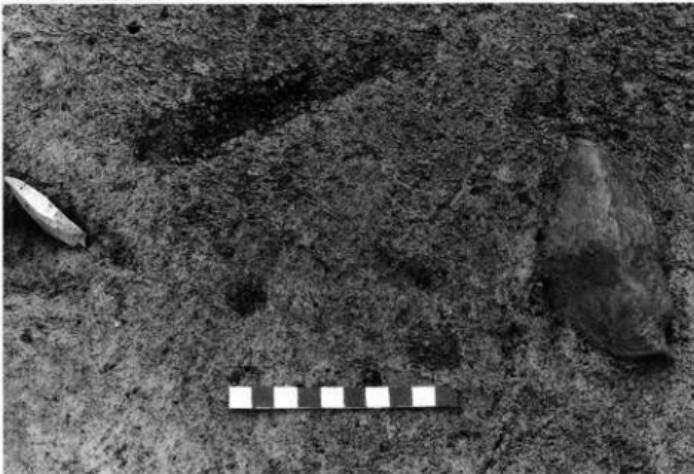


写真6  
遺物出土状況(第6層)  
左からNo. 33、35、44



写真7  
遺物出土状況  
遺物集中1  
(南東から)

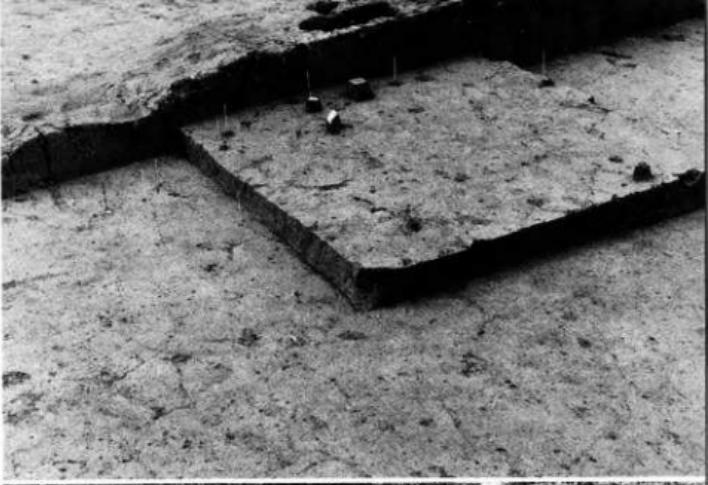


写真8  
V-18区西壁

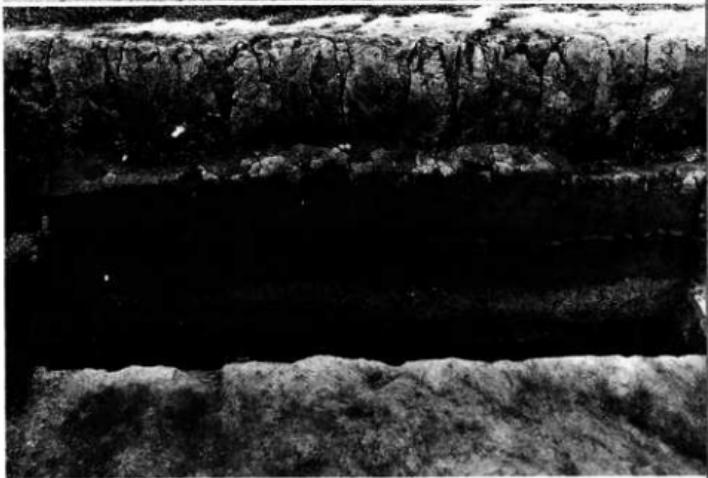
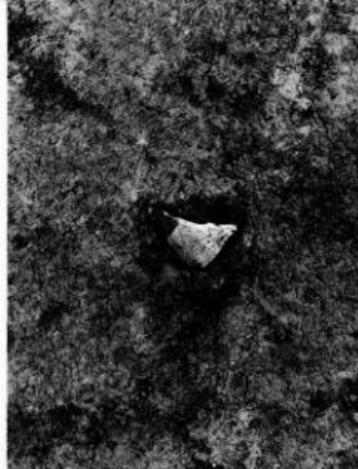


写真9  
作業風景



左：写真10  
No. 14出土状況



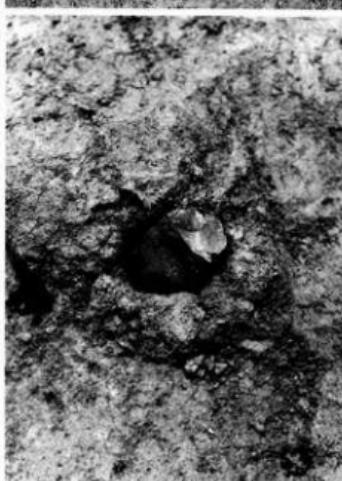
右：写真11  
No. 16出土状況



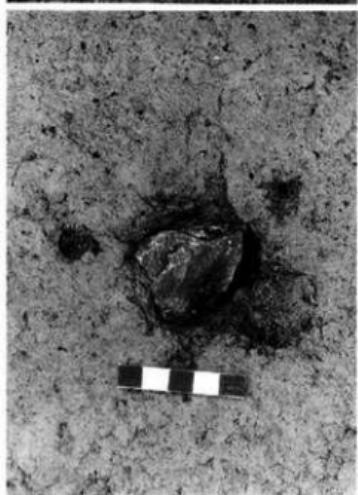
左：写真12  
No. 17出土状況



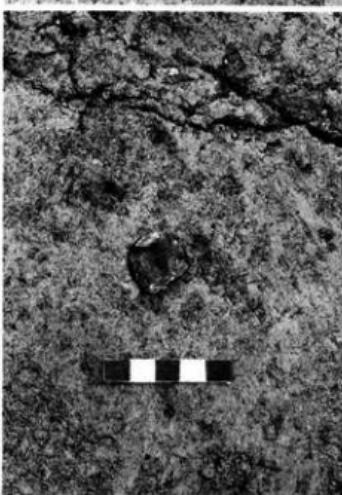
右：写真13  
No. 20出土状況



左：写真14  
No. 22出土状況



右：写真15  
No. 36出土状況





a. 前処理



b. 樹脂の混和



c. 樹脂の塗布①



d. 樹脂の塗布②



e. 寒冷紗の貼り付け①



f. 寒冷紗の貼り付け②



g. 樹脂の塗布(2回目)



h. レベルの記入

写真16 剥ぎ取り転写作業1



i. 分割線の記入



j. 剥ぎ取り①



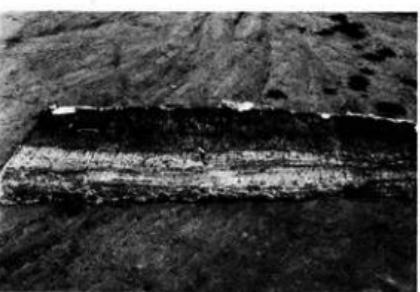
k. 剥ぎ取り②



l. 剥ぎ取り③



m. 反応していない土壌の除去



o. 作業完了



n. 水洗

写真17 剥ぎ取り転写作業2

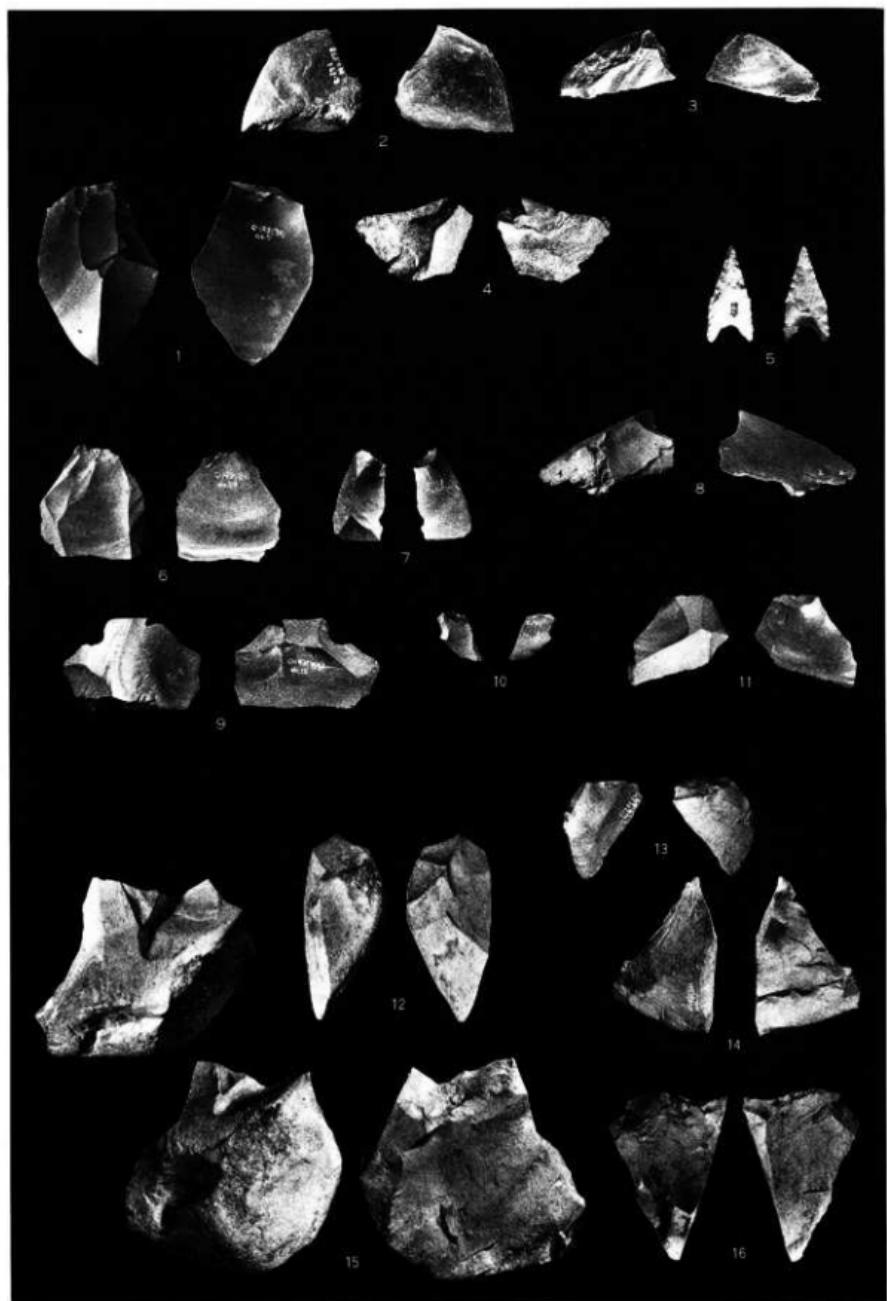


写真18 出土遺物 (1~4:倒木床内、5:第3層、6~11:第4層、12~16:第5層、Scale:3G)

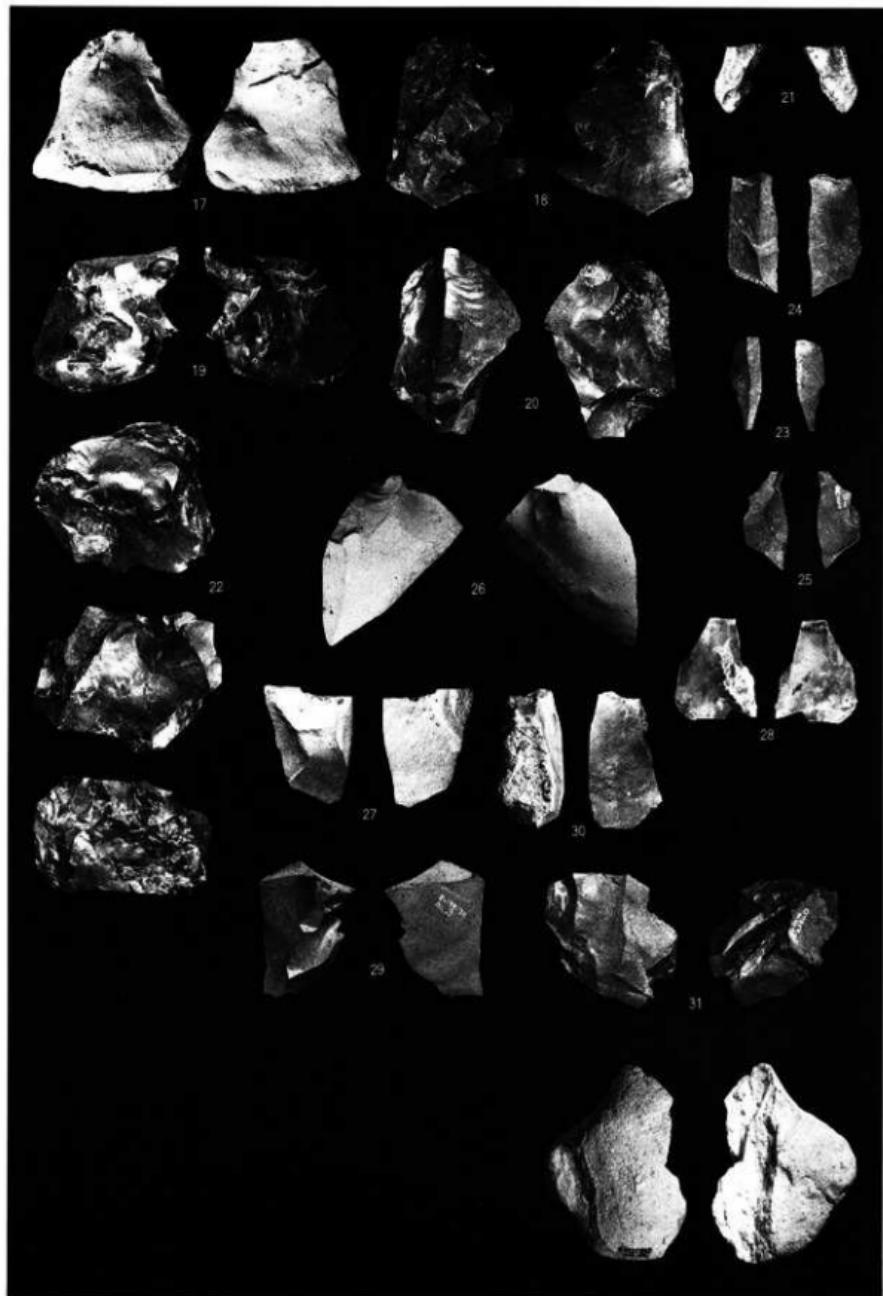


写真19 出土遺物 (第5層、Scale : %)

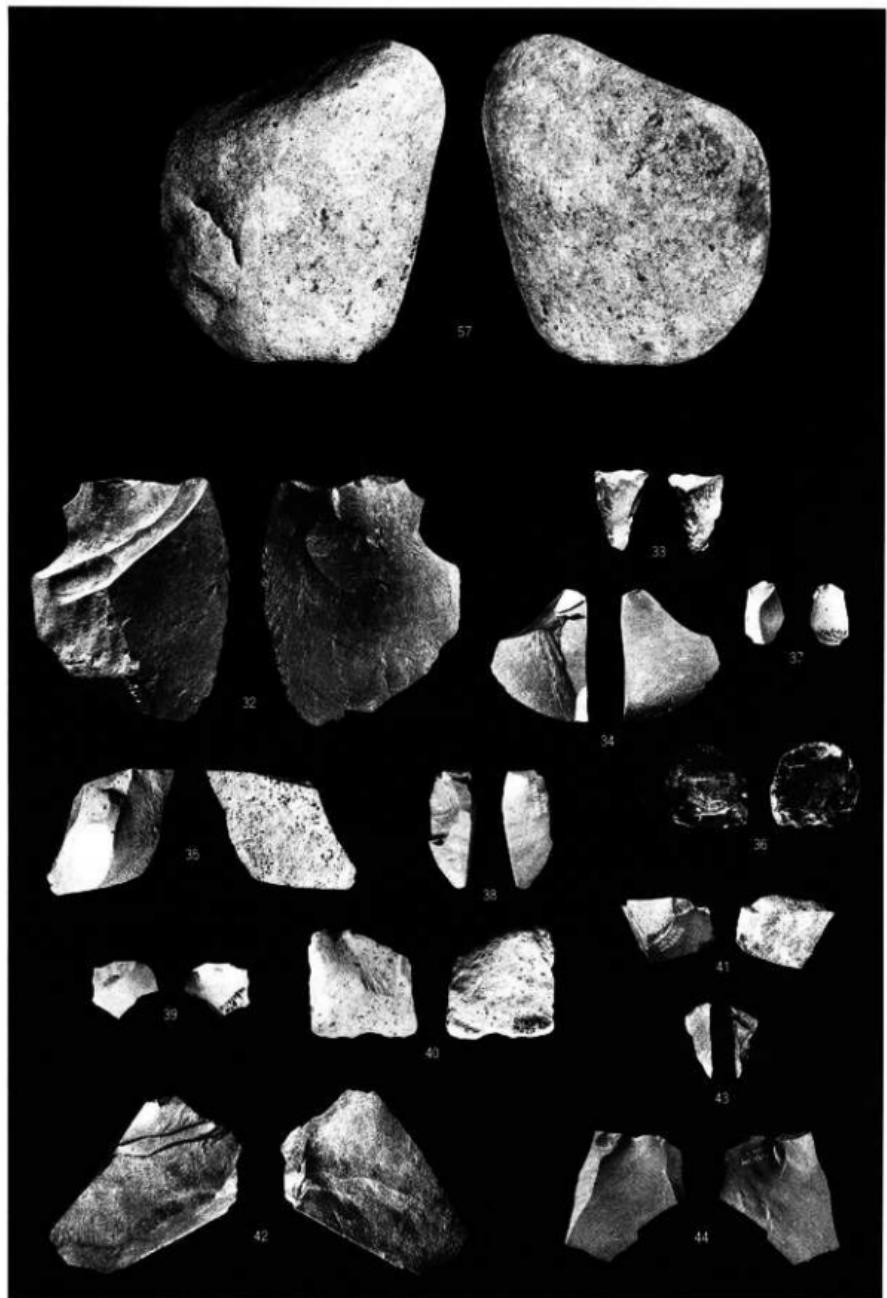


写真20 出土遺物 (57:第5層、32~44:第6層、Scale:5%)

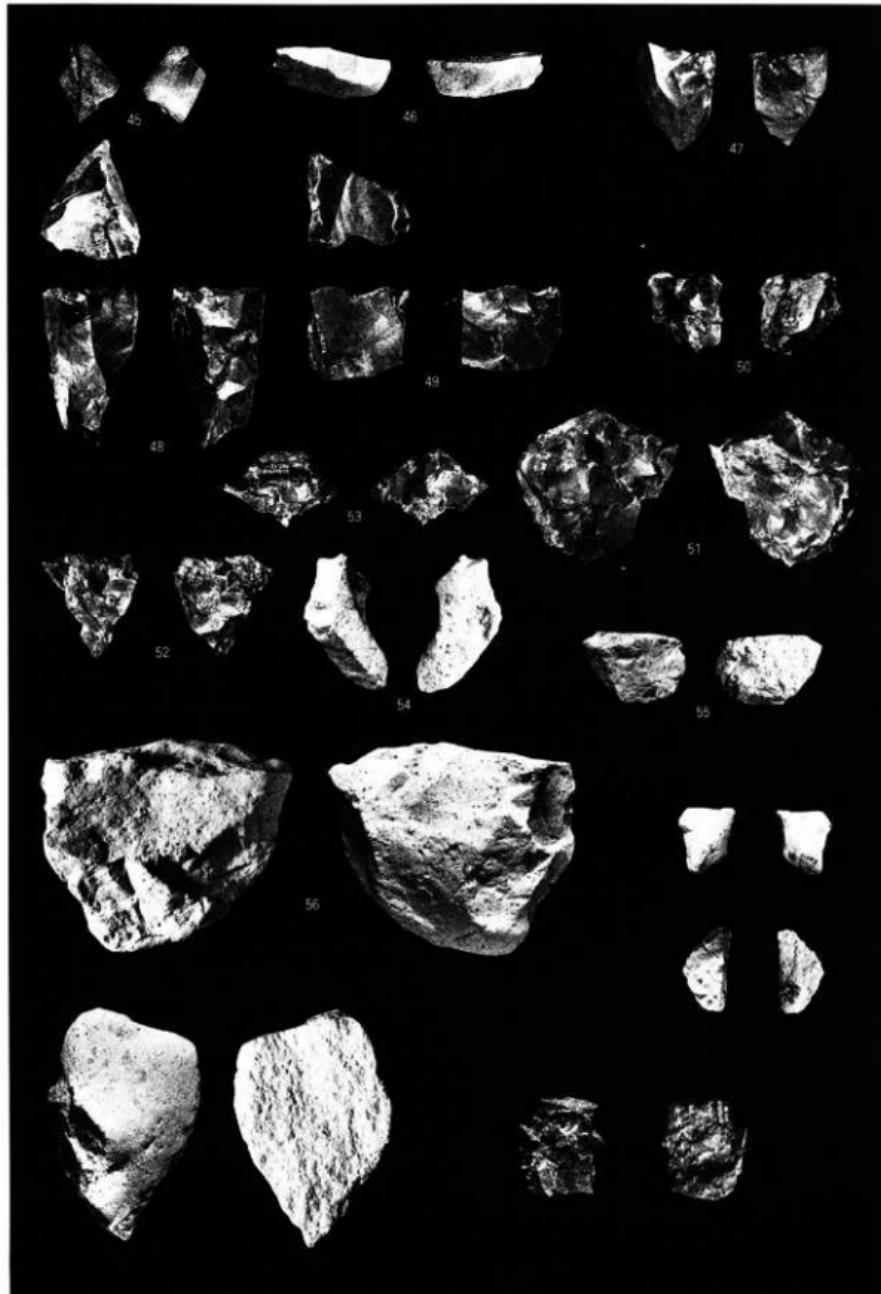


写真21 出土遺物 (第6号、Scale : 3分)

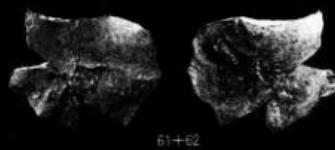
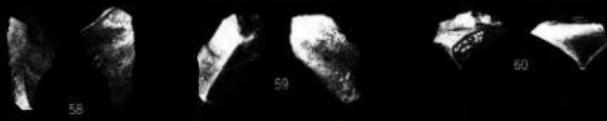
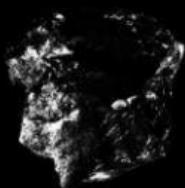


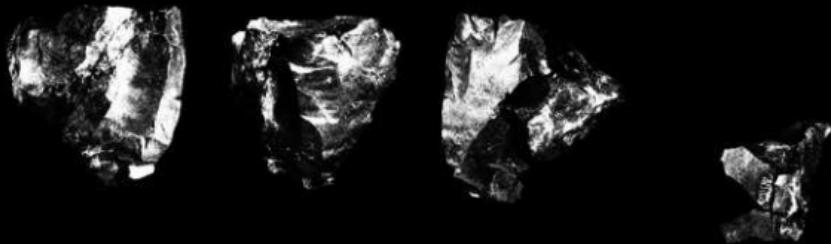
写真22 出土遺物 (58~62: 第7層、63: 第19層、Scale : %)、接合資料A、接合資料E (Scale : %)



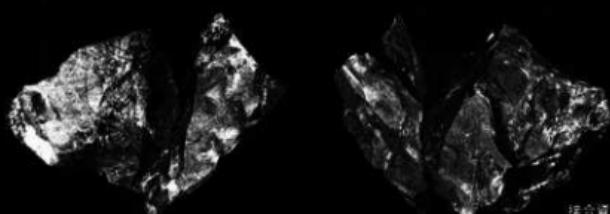
接合資料C



接合資料B-1



接合資料B-2



接合資料B

写真23 接合資料B、接合資料C (Scale : %)

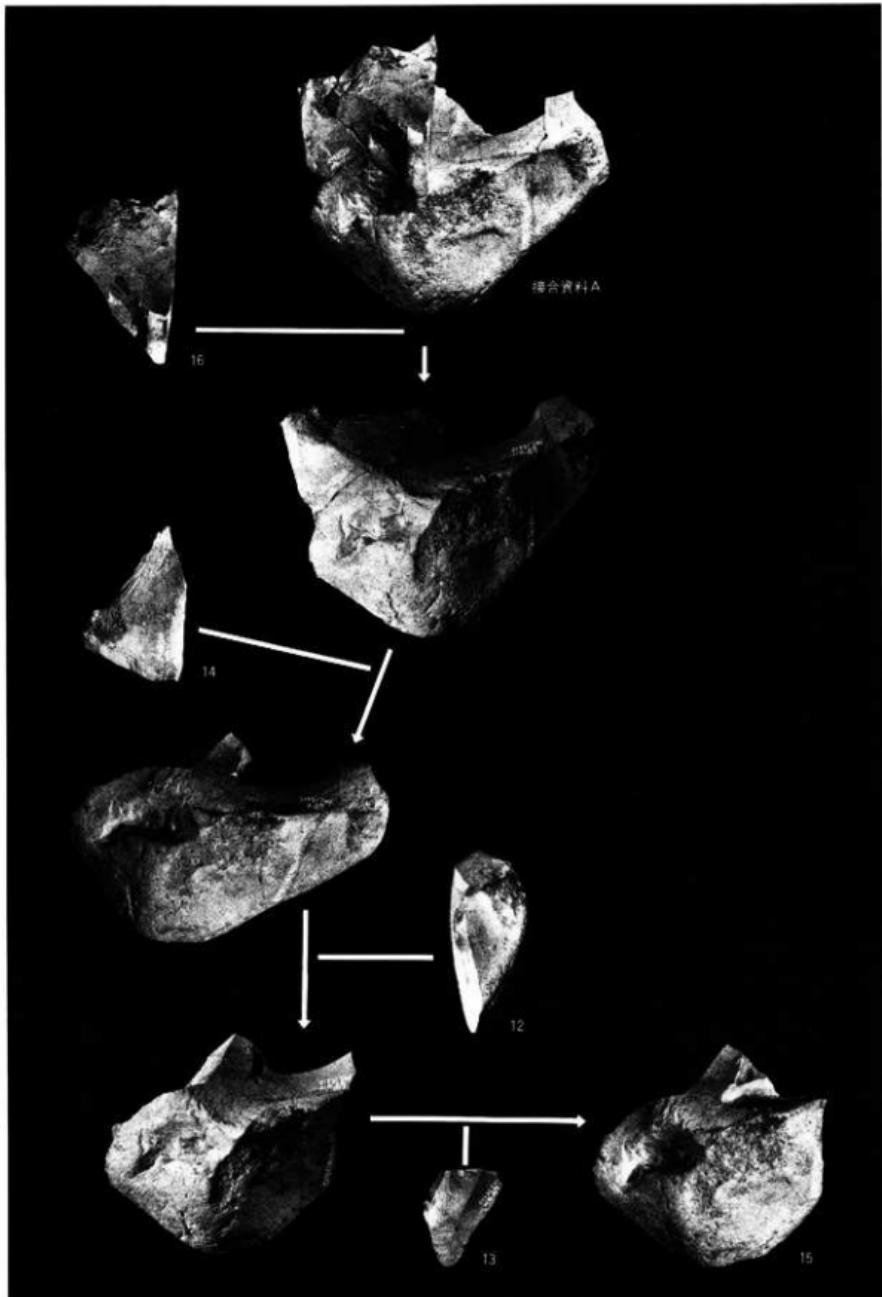


写真24 接合資料 A (Scale ; %)

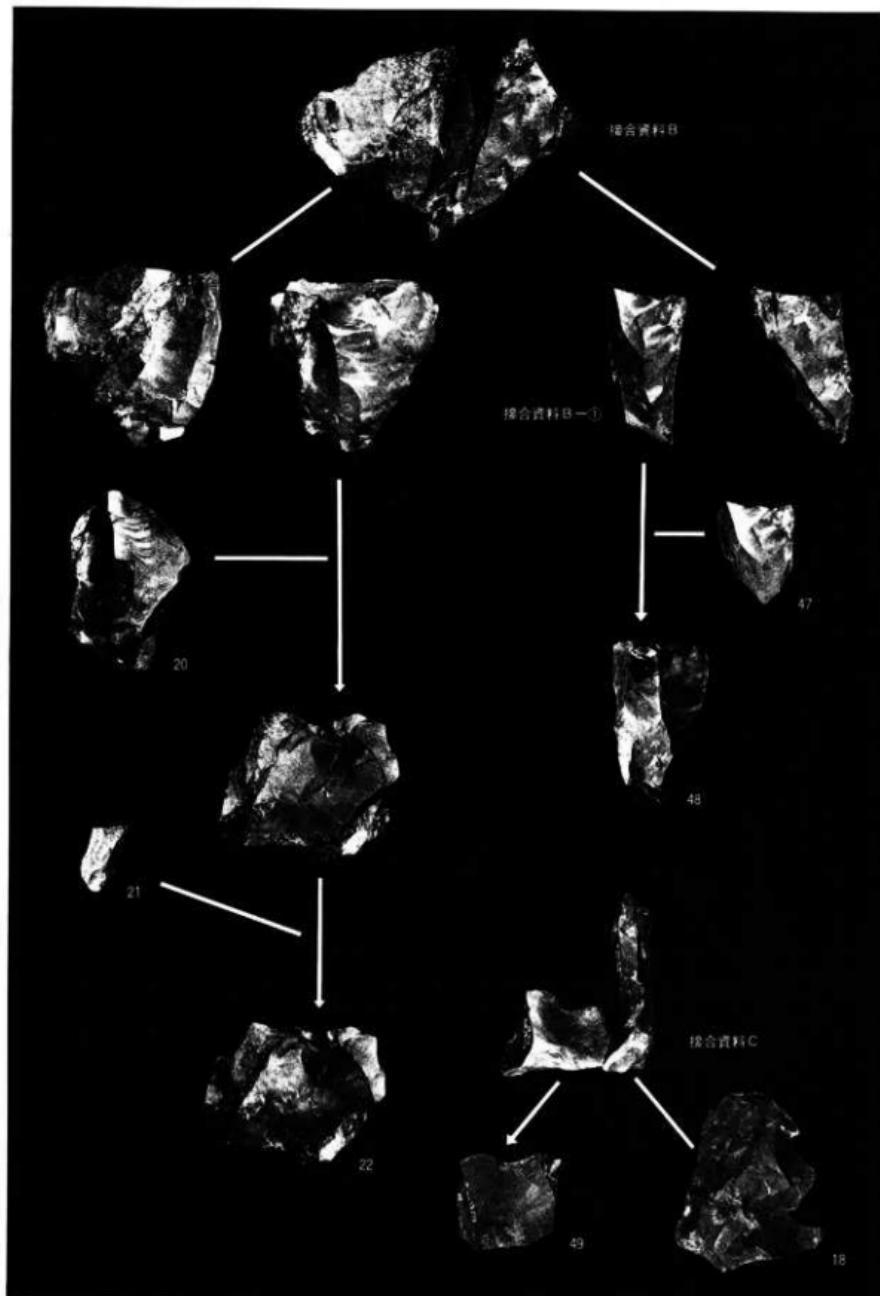


写真25 接合資料B、接合資料C (Scale : 1分)

## 職 員 錄

### 社会教育課

### 文化財調査係

課長	阿部 速	係長	佐藤 隆	主事	工藤哲司
主幹	早坂春一	主事	田中 則和	〃	渡部弘美
		〃	結城 慎一	教諭	渡辺 誠
文化財管理係		教諭	菅原 和夫	主事	主浜光朗
		主事	木村 浩二	〃	斎野裕彦
係長	佐藤政美	〃	篠原 信彦	〃	長島榮一
主事	岩沢克輔	教諭	小野寺和幸	〃	及川 格
〃	山口 宏	〃	佐藤美智雄	教諭	千葉 仁
		主事	佐藤 洋	〃	松本清一
		〃	金森 安孝	派遣職員	高橋勝也
		〃	佐藤 甲二		
		〃	吉岡 恵平		

### 仙台市文化財調査報告書刊行目録

- 第1集 天然記念物巣窟下セコイア化石林調査報告書（昭和39年4月）  
 第2集 仙台城（昭和42年3月）  
 第3集 仙台市燕沢善應寺横穴古墳群調査報告書（昭和43年3月）  
 第4集 史跡陸奥國分尼寺跡環境整備並びに調査報告書（昭和44年3月）  
 第5集 仙台市南少泉法鏡塚古墳調査報告書（昭和47年8月）  
 第6集 仙台市荒巻五本松跡発掘調査報告書（昭和48年10月）  
 第7集 仙台市向山愛宕山横穴群発掘調査報告書（昭和49年3月）  
 第8集 仙台市向山愛宕山横穴群発掘調査報告書（昭和49年5月）  
 第9集 仙台市椎町云海寺横穴群発掘調査報告書（昭和51年3月）  
 第10集 仙台市中山町安久東遺跡発掘調査概報（昭和51年3月）  
 第11集 史跡遠見塚古墳環境整備予備調査概報（昭和51年3月）  
 第12集 史跡遠見塚古墳環境整備第二次予備調査概報（昭和52年3月）  
 第13集 南小泉遺跡一範囲確認調査報告書一（昭和53年3月）  
 第14集 采瀬跡発掘調査報告書（昭和54年3月）  
 第15集 史跡遠見塚古墳昭和53年度環境整備予備調査概報（昭和54年3月）  
 第16集 六反田遺跡発掘調査（第2・3次）のあらまし（昭和54年3月）  
 第17集 北星遺跡（昭和54年3月）  
 第18集 汀江遺跡発掘調査報告書（昭和55年3月）  
 第19集 仙台市地下鉄関係分布調査報告書（昭和55年3月）  
 第20集 史跡遠見塚古墳昭和54年度環境整備予備調査概報（昭和55年3月）  
 第21集 仙台市開発関係遺跡調査報告1（昭和55年3月）  
 第22集 経ヶ峯（昭和55年3月）  
 第23集 乍報1（昭和55年3月）  
 第24集 今泉城跡発掘調査報告書（昭和55年8月）  
 第25集 三神峯遺跡発掘調査報告書（昭和55年12月）

- 第26集 史跡遠見塚古墳昭和55年度環境整備予備調査概報（昭和56年3月）  
第27集 史跡陸奥国分寺昭和55年度発掘調査概報（昭和56年3月）  
第28集 年報2（昭和56年3月）  
第29集 郡山遺跡I－昭和55年度発掘調査概報一（昭和56年3月）  
第30集 山田上ノ台遺跡発掘調査概報（昭和56年3月）  
第31集 仙台市開発局史跡調査報告2（昭和56年3月）  
第32集 湯ノ泉遺跡発掘調査報告書（昭和56年3月）  
第33集 山口遺跡発掘調査報告書（昭和56年3月）  
第34集 六反田遺跡発掘調査報告書（昭和56年12月）  
第35集 南小泉遺跡－都市計画街路建設工事関係第1次調査報告（昭和57年3月）  
第36集 北前田遺跡発掘調査報告書（昭和57年3月）  
第37集 仙台平野の遺跡群I－昭和56年度発掘調査報告書一（昭和57年3月）  
第38集 郡山遺跡II－昭和56年度発掘調査概報一（昭和57年3月）  
第39集 燕沢遺跡発掘調査報告書（昭和57年3月）  
第40集 仙台市高速鉄道関係遺跡調査概報I（昭和57年3月）  
第41集 年報3（昭和57年3月）  
第42集 郡山遺跡－宅地造成に伴う緊急発掘調査一（昭和57年3月）  
第43集 果道路（昭和57年8月）  
第44集 湯ノ泉遺跡発掘調査報告書（昭和57年12月）  
第45集 茂庭一茂庭住宅頃地造成工事地内遺跡発掘調査報告書一（昭和58年3月）  
第46集 郡山遺跡I－昭和57年度発掘調査概報一（昭和58年3月）  
第47集 仙台平野の遺跡群II－昭和57年度発掘調査報告書一（昭和58年3月）  
第48集 史跡遠見塚古墳昭和57年度環境整備予備調査概報（昭和58年3月）  
第49集 仙台市文化財分布調査報告I（昭和58年3月）  
第50集 岩切畠中遺跡発掘調査報告書（昭和58年3月）  
第51集 仙台市文化財分布図（昭和58年3月）  
第52集 南小泉遺跡－都市計画街路建設工事関係第2次調査報告（昭和58年3月）  
第53集 中田畠中遺跡発掘調査報告書（昭和58年3月）  
第54集 神明社跡発掘調査報告書（昭和58年3月）  
第55集 南小泉遺跡－青葉女子学園移転新工事地内調査報告（昭和58年3月）  
第56集 仙台市高速鉄道関係調査概報II（昭和58年3月）  
第57集 年報4（昭和58年3月）  
第58集 今泉城跡（昭和58年3月）  
第59集 下ノ内浦遺跡（昭和58年3月）  
第60集 南小泉遺跡－倉庫建築に伴う緊急発掘調査報告書一（昭和58年3月）  
第61集 山口遺跡II－仙台市体育馆建設予定地一（昭和59年2月）  
第62集 燕沢遺跡（昭和59年3月）  
第63集 史跡陸奥国分寺昭和58年度発掘調査概報（昭和59年3月）  
第64集 郡山遺跡IV－昭和58年度発掘調査概報一（昭和59年3月）  
第65集 仙台平野の遺跡群IV－昭和58年度発掘調査報告書一（昭和59年3月）  
第66集 年報5（昭和59年3月）  
第67集 富沢水田遺跡I－第一京崎耕地区（昭和59年3月）  
第68集 南小泉遺跡－都市計画街路建設工事関係第3次調査報告（昭和59年3月）  
第69集 仙台市高速鉄道関係調査概報III（昭和59年3月）  
第70集 戸ノ内浦遺跡発掘調査報告書（昭和59年3月）  
第71集 後河原遺跡（昭和59年3月）  
第72集 六反田遺跡II（昭和59年3月）  
第73集 仙台市文化財分布調査報告書II（昭和59年3月）  
第74集 郡山遺跡V－昭和59年度発掘調査概報一（昭和60年3月）  
第75集 仙台平野の遺跡群V（昭和60年3月）  
第76集 仙台城三ノ丸跡発掘調査報告書（昭和60年3月）  
第77集 山田上ノ台遺跡－昭和59年度発掘調査概報書一（昭和60年3月）  
第78集 中田畠中遺跡－第2次発掘調査報告書一（昭和60年3月）  
第79集 欠ノ上ノ台遺跡発掘調査報告書（昭和60年3月）  
第80集 南小泉遺跡－第12次発掘調査報告書一（昭和60年3月）  
第81集 南小泉遺跡－第13次発掘調査報告書一（昭和60年3月）  
第82集 仙台市高速鉄道関係遺跡調査概報IV（昭和60年3月）  
第83集 年報6（昭和60年3月）  
第84集 仙台市文化財分布調査報告書III（昭和60年3月）

---

仙台市文化財調査報告書第77集

## 山田上ノ台遺跡

—昭和59年度発掘調査報告書—

昭和60年3月

発行 仙台市教育委員会

仙台市岡分町3-7-1  
仙台市教育委員会社会教育課

印刷 横東北プリント

仙台市立町24-24 TEL63-1166

---

